川柳塔

昭和六十三年二月二十五日 印刷
昭和六十三年三月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻七三〇号

日川協加盟

No.730

三月号

NEW FORMAL COLLECTION

泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた。
男のロマンと
フォーマルと。

OSK JEFF ORIGINAL DESIGN

株式会社 大エスケー

〒540 大阪市東区南新町1—13
☎ 06(941)8015

NHK学園関東甲信越川柳大会

日時　昭和63年5月29日(日)午後1時～4時

会場　浦和駅西口「コルソ」7階ホール
（浦和市高砂1—12—1）

宿題　（事前投句・各題2句）
①「夜」　山崎　涼史選
②「たっぷり」　堀口　北斗選
③「肩」　篠崎堅太郎選

席題　選者—佐藤正敏・池田秋の月

講演　渡辺　蓮夫

事前投句締切　4月30日必着

投句先　〒186 国立市富士見台2—36
電話・0425（72）3151
NHK学園川柳センター
関東甲信越川柳大会係

投句料　一、五〇〇円（入選作品集代含む）

《参加要領》

◇大会へ参加希望の方はご自分の住所氏名の宛先を書いた返信用ハガキを同封して下さい

◇事前投句は、普通の便箋、またはこれと同じ大きさの用紙二枚を、いずれも真中にタテの線を引き、一枚目の右半分に郵便番号、住所氏名（ふりがな）電話番号、NHK学園川柳講座受講者の方は受講番号、大会への出欠を書き、一枚目の左半分に宿題①の作品、二枚目の右半分に宿題②の作品、左半分に宿題③の作品を、それぞれ二句記入して下さい。

年賀状

西尾　栞

三月号に年賀状という題で書くのもおかしいが、書いて悪いという規則もないので書いてみる。

高杉鬼遊さんの住居と私とこの間は、自転車で走って十分位のところである。ところどころ田圃の残った村道と川に沿うた道は、私にとって格好の散歩道である。これからたんぽぽ、れんげの咲く畔道と、揚雲雀のさえずる空を見上げて春風に吹かれて歩く気分を今から楽しみにしている。鬼遊さんは、相当古い自転車で、月のうち二、三回はやってくる。兄弟や親戚の者と逢うよりずっと楽しい。

某日、鬼遊さんは「今日は」というて勝手知ったる茶の間へ現われてくれた。楽しい話のあと、「話は変りますが」と前おきして鬼遊さんは、今年の年賀状が河内屋画材店のコンクールのベストテンに入ったことを話してくれた。今年の彼の賀状は、うっすらおぼえているが、判然としない。彼に似合わない変な字の一句が書かれていたことだけはおぼえているので、そのことを話すと、色々と書いてみたが、どうしてもうまく気にいった字が書けない。四、五枚書きつぶしてから左手で書いてみたのが案外面白くかけたので、それにして、中尾藻介さんの彫ってくれた鬼の一字の角印を押したのが今年の賀状となったのであるという。それで彼が帰ってから、やっと探しあてた賀状をつくづく見てみると、なるほど面白く出来ているが、

昇りつかれてすこし遊んでみたい竜

という句が気に入った。すこし休んでみたい竜より、遊んでみたい竜の方が面白い。これは審査員の方々に、句が気に入ったと思う方が、あるいは至当かもと思った。それから二、三日して又電話がかかって、ベストテンの九番であること、賞品は二十四色の絵具であることなどと話してくれた。それで翌日、早速大阪へ出ることのついでに、河内画材へ廻ってみた。心斎橋筋のそごう百貨店の一軒隣で、北側のウインドウにお手のもののイーゼルに、一等から十等迄が貼られていた。ベストテンには、文字の賀状が鬼遊さんのだけで、他は皆、竜の絵が殆どであった。そのことを電話で話すと、十一日から、もう一つ丹青堂のコンクールが発表されるのだと楽しそうな声が返ってきた。丹青堂の方の吉報を待つ今日この頃である。

医者は慰者也というドクターと春の宵

新年会嘘の初めの御挨拶

餅食べて死んだ話も小正月

「こんなふうに死にたい」本を読む二月

大寒の温さをいうて飲みにゆく

川柳塔　三月号　目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

年賀状……西尾　栞…(1)
夫もたのしく……小出智子…(2)
川柳塔（同人吟）……西尾　栞選…(4)
自選集……(30)
■川柳太平記(118)　川柳の群像　木下愛日……東野大八…(34)
■連載　誹風柳多留廿六篇研究（三十四丁～三十五丁）……(36)
水煙抄……黒川紫香選…(38)
秀句鑑賞┌同人吟……河内天笑…(33)
　　└水煙抄……舟木与根一…(70)
川柳点の先駆、大坂・堺の前句附……阿達義雄…(56)

夫もたのしく

小出智子

四年程前のことだったか、朝日新聞に毎週一回「男の自立」というタイトルで、妻に頼らないで生きてゆかねばならないということを、例を掲げて掲載されていた。一、二度読んだことはあるが、男性の哀れな面が誇張されているようで気の毒にさえ思われたが、その内に終ってしまった。

だが主人の方は、定年後病気をした所為もあって、引き続いて仕事には就けず、元来が商家の生れで、至ってこまめな人であるだけに、毎日をもてあましていた。それだけに「男の自立」欄はしっかりと読んでいたようである。それからというもの、以前からやりかけていた趣味にも積極的になり、医者からも運動を進められていたこともあって、掃除と買物は自分の仕事と決めているようでもあった。何処で習ってきたのか天ぷらは主人の十八番で、味も私のより美味しい。私が出掛ける日など、決ったように天ぷらを上げてくれる。息子からゴキブリ亭主呼ばわりされようが、一向に気にしていない様だ。お蔭で、過日私が入院することになった時も、家事のこと

おかめと小町……布施幸子……(59)
愛染帖……橘高薫風選……(61)
〈女性コーナー〉苗香の花……八木千代選……(64)
88年新年おめでとう会……(71)
初歩教室……阿萬萬的……(66)
「客」……内芝登志代選……(68)
一路集「隅」……奥田みつ子選……(68)
「水」……吉岡きみえ選……(69)
柳界展望……(73)
本社二月句会……(75)
各地柳壇(佳句地10選/飯田悦郎)……(79)
■3月各地句会案内 93
■編集後記 95

座右の句

旅人へ何と親しい駅だこと　(薫風)

私の句

鳩は鳩人には人の朝が来る　信本博子

だけは心配をせず病院へ行くことが出来た。

でもそれに至るまでには、妻である私の方も大変だった。気の向いた日は派手に広げて料理を作ってくれるが、その後片付けの大変なこと、妙な顔でもしようものなら「気に入らんのなら明日からせんぞ」とくる。うっかり当てにしていると「僕の本職ではない」と言わぬばかりの知らん振り。それに私としては共稼ぎ夫婦ならとも角、どうしても世間体を気にしてしまう。「奥さん何してはるのやろ」と言われているようで、近所の人には弁解などもして、気にしないようにしてきた。

その内、日が経つにつれて、有難いことではないかと思えるようになっていった。でも慣習化されることは結構なことではあるが、我々戦中派の人間としては、何か夫婦の存在感とか、相互の愛情の交換とかが稀薄になりそうな気がしてくる。そこで主人には出来るだけ負担をかけないように、甘えてしまわないようにと心掛けておれば、お互いに楽しくやってゆけるのではないかと考えるようになった。

斯くして主人の「男の自立」は私が病気をしたこともあって、精神面はとも角、生活の上では何とかなりそうなこの頃である。悪妻かもしれないが、どんな形にもせよ諍いもせずに、労り合って、主人には主人の趣味、私には川柳があることは幸せなことである。

川柳塔

西尾栞選

住み馴れた地球へ少し飽き申し
不始末を隠す耳輪が揺れてます
客足が途絶える頃をねらいます
子はみんな寝たかと念を押す話
味のある仕打ちじゃないの落し蓋
持駒は年金だけのふところ手

熊本市　有働芳仙

聞くともなしに聞いた話で株を買い
団らんの鍋へ今夜は雪模様
歳末は特価初売りは超特価
初鏡まだまだいける顔の艶
さすが俺の子元日勤務を買って出る
初明り救急車はもう駆け回り

倉敷市　野田素身郎

笑う日がきっと来るだろ温い飯

倉敷市　小野克枝

納豆に若いふたりの夢が伸び
怖い程喪服の似合うお友達
ボロボロの妻がひと言待っている
衿巻きの狐に負けたなと思う
底抜けの明るさがよいおむこ様

兵庫県　遠山可住

肩書の肩が上って酔うている
死して名を残す弔辞は敵が読む
小便が黄色うビタミン効いて来る
お歳暮にもろたみかんが腐りかけ
いたずらをしたくて隅の席にいる
小癪な機械で千円札を押し返し

松原市　谷垣史好

母は在さず紙風船をふくらます
こんなとき真っ赤に咲くは馬鹿な花
グッドバイと言うて死ぬのもシャれてるぞ

ほったらかしの猫よお前は哲学者
福神漬の存在価値と私と
濁り世にどうして出ない海坊主

和歌山市　西山　幸

自己暗示かけてひとりの柝を入れる
小悧巧にふるまいすぎる縫いぐるみ
古雛よそんな哀しい瞳をするな
雑学を蓄えている吸取紙
教会のオルガンに歩を合わせよう
明日も生きようまだ米櫃に米がある

八尾市　高杉鬼遊

弥生三月若かりしひと若かりしまま
雛人形ひとの知らない闇をだく
権力に負けるなれんげワッと咲け
国会の野次を子どもが聴いている
セックスに遠くほとけに近くなる
春の日に諍うこともなく老いぬ

下関市　石川侃流洞

東京の地下ではもぐらもう住めぬ
冬眠ができそう妻の皮下脂肪
もう怒るマグマと知った地震計
燃えた日もある死火山の草いきれ
親の欲子の欲塾が跋扈する
ペンペン草よ君は七草知名士だ

桜井市　岩本雀踊子

人生はへのへのもへのかも知れぬ
深爪を切った女のうたぐりよ
旧正があるふるさとの吊し柿
安酒に酔える私は無位無冠
善人のつもりが敵にされている
男臭い男で死んでやるつもり

松原市　玉置重人

戦友会生きて戻れた活き造り
逆境にお前も負けぬ影法師
梅干しが酸いので安心しています
佗しさは嫁方に似る孫の顔
番号を忘れたカード持て余す
うららかな初春に混んでる太鼓橋

平田市　久家代仕男

初詣でマイカー徒歩に追い抜かれ
さあどうぞコシヒカリですほとけさま
急行に無粋を晒す無人駅
蚯蚓とも仲好しで居る有機農
蓮根を掘ると泥手も蓮根に
闇の森楽譜を提げた雉子が飛ぶ

大阪市　西出楓楽

身構えて行くクラシックコンサート
道草の分だけコクの出たお方
すがる藁残してくれぬコンバイン
スランプへ羽毛布団が軽すぎる
幸せを分けて上げたいマタニティ
サシスセソだけの女で朽ちそうな

竹原市　小島蘭幸

国宝を見て来た初春の小さい旅
台所で妻の音する盃よ
一輪車サーカス小屋が街に来る
僕のジョークが解るおんなになってきた
ふところ手他人の振りをしています
大勢で行くことにする厄払い

出雲市　原独仙

ふるさとへ流るる雲よ郷愁よ
ゲートボール茶呑み友あり祖父元気
残業を絶対信じる良妻で
怪しげな電話もかかる十二月
胃薬をポケットに師走に堪えている
忘年会又かあなたは胃が弱い

米子市　林瑞枝

死に際に洩れた言葉を受け継ごう
光芒のあれは天女か母なのか
雪見障子に母の匂いがしてならぬ
散らばった靴から温い声がする
匂うような楊貴妃絵から匂わない
平均寿命延びて六十の手習いよ

八尾市　宮西弥生

親友が嫁ぎ東京近くなる
花束の中味がほしい女です
おふくろの味が恋しい寒気団
周波数狂ってひとりで生きてます
ニュージャパン出てふぐ鍋に酔うコース
五日制消化へストーブの守りをする

大阪市　津守柳伸

成り行きにまかす女の処生術
長老のはなし素直に聴く事情
ひっそりと咲いて華やぐ福寿草
太陽を楯に驕りのない暮らし
ほどほどに閉じる独りの頁数
三匹の侍がいる血圧計

松江市　恒松叮紅

釘一本打てぬに均等法をいう
後手後手になっても印がいる役所
離婚届子はかすがいが死語になる
病院に姥捨山の地図がある
昇給金一円也自分史の一ページ
外聞も恥も新人類不感症

藤井寺市　吉岡美房

凍死せぬ程度に夫閉め出され
信号を待って居る間の物忘れ
ひざ枕膝の温さは俺のもの
通勤に坪何千万を踏んで行く
国際化注文ばかり聞きに行く
耳栓をしても地球の軋む音

奈良市　宮口笛生

三ヶ日あっという間の酒びたり
正月の胃袋重い胃腸薬

天理さんへお詣りしようかと妻がいう
有難い説教だったとは歳か
寒椿気温上らぬ日が続き
方向音痴駅で狐につままれる

美禰市　安平次弘道

雑学が生きる庶民の知恵袋
心貧しきおんなが頼る修飾語
紙人形と春の話がしたくなる
ロボットが働き蜂の真似をする
冬木立花芽は春を疑わず
仕合せな日日に気づかぬ無神論

倉吉市　奥谷弘朗

人徳か他人の痛みの解る人
うまい店知っているからついて来い
束の間の青空だった君の性
ものごとを棚ボタ式に思いすぎ
資本家の目には鳥合の衆に見え
老夫婦又口ぐせを笑い合い

米子市　小西雄々

塩辛い水も承知の名幹事
スイッチオン突然春の訃が届く
子の色にいつしか溶けてわらべ唄
形見分け遠い身内も現われる
ヒーローへとことん花を持たせよう
廃止線その後北風吹くばかり

島根県　堀江正朗

こんなとき閉じた瞼に亡母が生き
踏みだした白杖春の息吹きから
愚の無限闇の無限に数珠を操る
盲人も一つは欲しい覗き穴
妻多忙やるせない程ひまな僕
盃へなじむ笑顔と読みとられ

和歌山市　福本英子

血圧の罪着せられた雑煮餅
正月の客へ明け暮れ白い足袋
嘘ほんと上手に使う子を案じ
齢一つ重ねしみじみ死亡欄
仮装行列貸衣装屋の成人日
がらくたはがらくたなりに元の位置

西宮市　林はつ絵

青信号少し走ってみましょうか
びっくり箱の底にやさしい鬼がいる
三面鏡どの面からも出るサイン
塩壺の蓋をとらずに行った姉
住み馴れて声がやさしくなっている
公園で市会議員とする話

尼崎市　春城年代

初夢に安定剤が利き過ぎて
酒の上でくい違うたはどのあたり
無の時間流れて命透き通る
人ひとり消えなんとする息づかい
初日記心ならずも悲を遺す

逆縁の姑は惚けた返事する　米子市　青戸田鶴

おろそかに出来ぬと朝の暦から
スパイスをきかせてみても冴えてこぬ
あく抜きをしてから逢いにいってくる
落椿失うものも多くなり
冬の日のお茶の相手が有難い
広告の重みに耐える新聞よ　兵庫県　辻文平

欲一つ捨てるとなごむ夜の猪口
哀しみが溜まる六十路のくすり指
真ン中に嫁で食欲出る夕餉
思い出の駅で思い出呼んでみる
洗い髪明日の逢う瀬を夢にみる
縄電車二人になってお茶の味　弘前市　田中叶

妻が居て児が泣き本を読んでます
一歳の児はスプーンの丸さかな
人の死や足のしびれを持ち帰る
ワイパーの間隔よりも急く心
中流の生活ボンレスハムありて
加害者で巻尺の端持たされる　岡山県　土居耕花

コメカミの辺から明ける大晦日
退院の日の老妻がこそばゆし
輪廻とや次は酒屋に生まれよう
忙しなやパトにピーポー消防車
仏飯をコチコチにして倦怠期　倉敷市　稲田豊作

みの虫の孤独葉っぱは皆散った
八十の坂で試練はもう御免
衿元に触れて蠱惑の風になる
人気なんて風が止んだら落ちる凧
気の強いおんな猜疑の鬼を飼う　堺市　中川滋雀

スランプを背負って変らぬ年が明け
木枯らしと試行錯誤をくりかえし
年金の枠から足は出たまんま
あそうだそうだとトイレから戻り
冷や酒で話上手でスッと去に　笠岡市　松本忠三

欲のない人です連れ添う五十年
いきあたりばったり何時もの癖ですよ
渡る世間鬼が時々出没し
どこをどう勘繰られたか図星です
契約になって端数が物を言い　伊丹市　樫谷寿馬

七十や鏡を覗く日の多し
あら炊きのだいこ歯にしむ独り酒
雪国へ紅い情けの明太子
薄端の松隆々と昇り龍
元日や徒然草を読み返す

祝い客送って夫に酌ぎなおし
知恵一つ拾って一つ物忘れ
活け替えて飾り言葉はいらぬ花
鏡から若いつもりをカットされ
澄みきった水の深さは母に似て

島根県　堀江芳子

きこえますかホラ自然のラブソング
北風よ僕とデュエットしませんか
年男次は西暦二〇〇〇年
貴男は好きポケットベルは大嫌い
針千本怖くて大臣にはなれぬ

松江市　柳楽鶴丸

やさしさが好き龍の眼は小さめに
禁煙車なら席があると言われても
リクライニング回して女よう喋る
だからそやからと女攻めてくる
別れ話がとっても好きな唐辛子

京都市　松川杜的

鬼手仏心父のメスには追いつけぬ
鳩時計妻はいくつになりたるや
逢いたくて秒針ほどの足の幅
お断りした人がいる街の角
保護色の兎を泣かす雪不足

弘前市　波多野五楽庵

地下足袋の穴から春の陽がのぞき
朝の出会いへ神も仏も光りだす
良心へ恥じる日帽子深く着る
雑魚だから後におれよと言ってたに
余生いくばく仏と握手しておこう

岡山県　嘉数兆代賀

初詣安請合いの鈴が鳴る
下駄の音めったに聞けぬ京になり
短い日長い日また一年のカレンダー
蟹シャボの盗られた跡も陽が温い
殺伐な世に弱点となる笑顔

京都市　都倉求芽

山椒を効かして幸運倍にする
廻りまわってわたしの噂雪割草
野暮なこと花を咲かせる寒の木瓜
相談を勘違いした赤い耳
家族皆予定公表カレンダーの怒り

京都市　山本規不風

米二合といで二月二十九日逝く
春を待つ花の種などどっさりと
ボケ防止のための折鶴かも知れぬ
四匹の猫がのびてる春ごたつ
飽食の猫よ鰯が嫌だとサ

鳥取県　川崎秋女

道標にされて動けぬ石地蔵
カラス一羽飛んで夕映えひきしまる
終点で世辞のいらない人と会い

鳥取県　松下たつみ

脇役の背骨は丸いまま動き
おにぎりの旅へジーパンよく跳ねる

鳥取県　新家完司

この街に住みこの街の溝そうじ
歩兵の本領わすれたいけど覚えてる
おばあさんと約束がある種袋
ひとり酒扶養家族は寝ています
天井裏の音は貧乏神らしい

鳥取県　両川洋々

転落の詩それからを風が問う
レールよ泣くな国鉄哀史俺が書く
そっと嫁け父の涙は娘に見せぬ
年金目減りああ楢山の灯がかすみ
年金は要らぬ戦死の骨かえせ

鳥取市　森田熊生

マイペース守る車で先に着き
車から降りて車が恐くなり
四季が好き暦の中のわらべ唄
丸印つけた暦と春を待つ
旧暦を大切にする老母でいる

島根県　西村早苗

花が咲く女がきっと逢いにくる
訃報聞くきっと逢おうと言うた筈
尾の切れた狐に似合うおぼろ月
春を画くそばに水割り絵具皿
風も春少うし阿呆な貌となる

目にふれるものみな春を疑わぬ
副作用代もふくめて払わされ
ネクタイを替えて苦手へ立ち向い
白旗を掲げて敵を信じきり
きっぱりと脱いでポプラは悪びれず

島根県　小砂白汀

喋るだけ喋りストレス消えたらし
大根の肥りにあわてている暖冬
山茶花の散りしくなかに昔おく
氷雨降る信じた友の影がない
アイロンを無心にかける冬の午後

島根県　榊原秀子

七草がすめば暮しが廻りだす
亡母までの年へと欲をまた重ね
元日へもう十年という夫婦独楽
ああハイヒール今老いを着ぶくれて
ひな壇の雛も老いたり春の宵

米子市　錦織文子

落ち椿神の啓示を待っている
言の葉を継ぎ継いでいる日記
包丁を夢中になって砥いでいた
おぼろ湯の二日三日の有情かな
靴下の穴をこぼれて行く演歌

米子市　林荒介

カスミ草どの花とでも添いとげる

米子市　石垣花子

欺されてやろう囮が美人だから
中流だやっぱりセロリかじらねば
巣の中で威張らせておく男下駄
あした咲く程は山茶花散っておく

米子市　田中亜弥

神に逢う母の祈りの深さかな
玉手箱あれから釘を打っておく
ふるさとで軽い軽いと老母を抱く
それからの未婚の母は強くなる
遺伝子をかえねば身内おなじ顔

米子市　野坂なみ

初硯まず寿と大書する
どの子へも合格祝出来ますように
その生きざまその死にざまの輝きよ（宇野重吉さん逝く）
暖冬よ気ままにせずに冬らしく
巣に帰る鳥のマナーを見習おう

米子市　政岡日枝子

飴玉が口にある間の小休止
帰る気にさせた一個のにぎり飯
プラトニックラブ今年の傷は痛かった
水晶の涙みぞれになるだろう
御飯たべたか温い電話をありがとう

米子市　菅井とも子

厄年も運勢欄を気にしてる
歯を白く磨くあと味消すために
煌煌と招きリフトが眠らせぬ
優勝楯貰うと喜寿も若返り
極楽の入口にいる眠り猫

和歌山市　若宮武雄

むつかしい事は識らない物わかり
水仙の匂いを届けたいお方
条件が満ちた話へ乗りきれず
呆けだしてからどの子にも労われ
見晴らしの報いはたしか坂の汗

和歌山市　堀端三男

互助会が古稀の祝いをやるという
無職だが予定いっぱい詰まる幸
お歳暮の鮭と数の子まだ続く
核心をあやふやにして多数決
主賓として招く恩師がもう居ない

和歌山市　内芝登志代

村山の阪神見たい年が明け
音たてて地球が変ってゆく怖さ
厄除けに好きな花束買ってくる
いつ来ても温い風吹く里の道
霜の朝身重の遠い嫁案じ

和歌山市　牛尾緑良

ほほえみを受けるゆとりが出来て春
子が育ちがっぷり四つに組んでくる
春を待つ心が花の芽をみつけ

帳尻を合わす自慢を秘めている
二枚目になりそこなった絆創膏　唐津市　仁部四郎

十八の春の暦へ白く燃え
相性があるのか電話いつも留守
花咲いて椅子が動いて花が散る
アリバイとツケは手帳に赤で書く
狼煙にも煙草のけむりなりますよ　唐津市　久保正敏

女房のおでんが美味い寒の入り
門限を他人が決める寡婦の足
女房が褒めぬ女を好きになる
強引さ愛の深さと見間違う
パトロンが代ってインコ買いかえる　唐津市　田口虹汀

一の矢は少し外して打診する
緊張が日毎に溶ける松の雪
木蓮へ急げ急げと春の雨
父さんの元気を示す煙草の輪
待ち人はみくじ通りに来なかった　寝屋川市　江口度

ストーブが出ると雑談多くなる
福笹の下にはいつも居る泥鰌
手拍子が揃い福笹売れていく
神様が罰を与える筈がない

残業続く生き甲斐を考える　寝屋川市　稲葉冬葉

不渡りへ疼く呼吸を温め合い
どの句を見ても負けたと思う沈丁花
願望と現実に立つ門出かな
とんとんと来たわけでなし夫婦駒
畦道の向こうで鎮火した模様　寝屋川市　柴田英壬子

ご丁寧にふたつ並んだ泣きぼくろ
意外にもおしゃべり黒子持っている
石仏の柔和な目からひび割れる
般若心経飾りは何もない女
春の唱歌を絶唱しないことだ　大阪市　河合庸佑

ひかえめに自信ありげな言葉じり
逃げ道をあけて追い込む思いやり
八つ当りしてる自分が道化めく
負けて勝つ勝負の深さかみしめる
強引に押して己が浮いただけ　大阪市　江城修史

どん底に生きる明日をくれた友
振り向かぬ過去を忘れた絆たち
楯となる妻が耐え抜く冬の風
慰めは限りあるもの友喪中
銀杏散る街の渇きにある想い

念入りな化粧別れのセレモニー　大阪市　黒田真砂
初春の顔少し伏目に三面鏡
いばってる割にはもろい落し穴
八歳の春いとおしくお年玉
好きだから心に秘めている痛み　大阪市　本間満津子

廻り年無事通過した誕生日
小豆粥わたしに似合う誕生日
念願の温泉一日ごりょんさん
みな同じ顔してファミリーレストラン
慌てないでまだ寒いのよ沈丁花　大阪市　神夏磯典子

初詣で煙の中にいる安堵
掛軸へ札所の旅が甦り
手品師の帽子とどこが違うだろう
老梅のせめてともしびになれるかも
予言者も所詮地球を逃げられぬ　呉市　林野甦光

蛇の目傘昔の夢を追っている
たしなみも均等男性化粧品
コーヒーの味深くなる愛の詩
足音が僕を追い越すストレッチ
誤解とく鍵は他人が持っている　名古屋市　越村枯梢

音痴にも和む茶房のクラシック
初詣手を洗っても洗っても
俎の裏まで滲みる倦怠期
おとこ七十マリオネットも疲れ果て
外面は悠々自適というくらし　大田市　藤田軒太楼

一本をさげて節分の客となり
山の湯のせせらぎ孤老の詩心
雑談にことよせ聞きたい事があり
ゆずられた資産に異外な負債額
ベレー帽贈られ退職の暮しぶり　東大阪市　森下愛論

毎日を遊んでいるのに六時起き
良寛に一茶にもなりひとり旅
はるばると来た旅なるに雪ばかり
ひとりだからこそ呑んで寝るときめ
昼すぎに起きて昼めし食いに出る　松江市　舟木与根一

宗教の自由を侵しに来る布教
D五一でなくてトンネル夢がない
奴だこ初春の風には肩が凝り
三ヵ日すぎて池の坊気がゆるみ
詮無いがボケを他山の石とする　岡山市　時末一灯

あんな時微笑んだ悔いまだ残る

幽玄の流れを見たり年明ける
真っ直ぐに落ちて椿の意地がある
ナルシシズム春宵一刻孤独なり
信頼の崩れ激しく入日燃ゆ

守口市　羽原静歩

かおり幼稚園卒園式を祝う（第二十回）

ランドセル可愛い闘志はちきれる
眼と脚と腰が落ち目になっていた
左右左右人生のヤジロベー
文鎮がどっしり大正生きている
老人の本音のど飴なめながら

高槻市　辻白渓子

都合悪いのが居て礼を言いそびれ
コネ利いた処遇本人だけ知らず
車椅子押してる人が礼を言う
麻雀をやめさす幹事使いする
目立つのが目的減らず口たたく

羽曳野市　榎本吐来

寒ざくろおとこ四人の年が明け
神様に頼むことなき初詣で
屠蘇汲んで今年の色はまだ見えず
片道の年賀が秘めているドラマ
先読めぬまま止り木の鳥となる

富田林市　藤田泰子

諦めることを覚えて矢は持たぬ
失うもの無いから怖いものがない
悪友の電話元気が湧いてくる
若者に笑われそうな願いごと
孤独ではないと気付いた水枕

松原市　佐藤藤子

神さまの道が混んでる三ヶ日
借りてきた本に傍線引いてある
断りにきて約束をしてかえり
りんご飴祭はレトロ調がいい
一週間が長いと思う恋すすむ

尼崎市　春城武庫坊

舎弟　淳一郎逝く

制癌剤と四つに組んで寄り切られ
癌と闘い遂に全弾撃ちつくす
風濁り沙羅の木一つ姿消す
魔手に触れ新居に坐ることもなく
年の順乱れ生者に酷い風

八尾市　宮崎シマ子

恍惚が愛の言葉の方へ向く
ハンサムな医者へ通うは神経痛
灯を消すと取越苦労顔を出す
母憶う筆へ母から先に来る
タラチネの一画くずし兄は逝く（兄の死）

静岡市　渥美弧秀

旅の瞳は一斉に向く茜富士

ブランコも孫とゆれてる早春の雲
眼鏡越し編むセーターの背の丸く
自分史の終章弾む詩・音楽
ボランティアと話が弾む車椅子

豊中市　田中正坊

国東半島の旅（三句）

九体の仏かなでるシンフォニー（真木大堂）
漫談の説法を聞く阿弥陀堂　（富貴寺）
おぼろなる壁画美しきかな浄土（〃）
年賀状逢いたいひとが一人いる
パレットに三原色がある未来

高知市　赤川菊野

鈍行でゆこうよ先が見えたから
もろもろを捨てて写経の墨をする
福寿草凜と咲かせて寡婦の庭
結婚をするまでは弟は姉思い
生きている証をくれた炎えるもの

西宮市　奥田みつ子

優等生少しいたずらしてみたら
シャベルカー見物がいてよく動き
ひとまわり大きくなって恋終わる
一期一会今日のよろこび今日のもの
暑い国からもハッピーニューイヤー

浜田市　中川幸一

盆栽の松が畸形を恨まぬか
柿ひとつ残し廃屋まだ解かず
庖丁のない厨から出る料理
大臣の素顔は書かぬ記者クラブ

堺市　高橋千万子

実家という名のホテルあり三ヶ日
お年玉値上げにはしゃぐおめでとう
しのぶれど私の酒は顔に出る
口説く気で酔わせて酔ってそれっきり

唐津市　浜本ちよ

筆先に親の真心寿の一字
娘見る温い心で嫁を見る
寿命伸び悩みも増える切なさよ
四季咲きの花の女でしゃべり過ぎ

唐津市　浜本義美

地価高騰あわだち草は伸びたまま
長針がコトリと動き去年今年
値崩れに蜜柑の山のちぎり捨て
充電をした舌の根がよくまわり

浜田市　佐々木裕

単身赴任風鈴をまだ吊す
俺こそが喜劇の王様かも知れぬ
くされ縁一期一会と断ち切らぬ
愚妻から折れてあっけない幕となる

町田市　竹内紫錆

教練以来の父の声量

かばうことなく無口な二人
ガッツポーズが老境の癖
定退同士がよく会う斎場

仙台市　川村映輝

健康を求めて雨の日も歩き
わが人生倖せな娘が居てそれでよし
落選した陰に悪妻浮び出る
寝ころんで駅伝を見るお正月

諫早市　原田メイシュン

感情がもつれて帰る下駄の音
初日の出俺の屋敷も染めてくれ
正しい季節を雑草に教えられ
店先は四季を惑わすものばかり

大阪市　西森花村

冬ごもりしなびた顔の数揃う
表札も子の名に変って友の家
別れ際やっと笑顔になった人
窓際のくしゃみ課長にまで届き

大阪市　北勝美

ぜひ来いと切符を添えて息子から
喜寿の春新幹線から仰ぐ富士
年賀客年玉目当も連れてくる
真っ黒な八白土星を信じない

大阪市　藤田頂留子

浮かぶ句が人の句に見えて来るあせり
たった今帰りましたとテレビつけ
仏壇のバーゲン次は墓石彼岸前
バーゲン中毒見に行くだけは行ってやる

大阪市　大塚節子

年賀の顔思い浮べて御節炊く
女ひとり七草囃す音わびし
入学の祈願も上中並とあり
戎さん過ぎてやれやれ街のたたずまい

大阪府　坂口公子

いい筆で書き上げておくまるいまる
よく揃う歩調で風があたたかい
果てしない海の青さをこの胸に
三拍子揃うて気になる罪と罰

大阪市　大野武太

申告が近いぞ歯科の領収書
この辺に確か母校があったはず
熟年の幾星霜を語る肌
店頭にいつも店主がいる安堵

大阪市　塩田新一郎

聴診器胸に冷たく十二月
毛皮着て動物保護をぶつ女
地価暴騰地球だまって回ってる
炭坑節踊らせ司会者膳につく

大阪市　古川美津枝

丸ビルの角をさがしてみるうらら

八掛に亡母の好みを知る紬
着ぶくれて豆もいわしも食べず越す
漬物を自慢にしてる冬の水

大阪市　板東倫子

一飯の縁で野犬に住みつかれ
日だまりで性善説をあたためる
老いの日々白旗いつも用意する
いたわられてやろう娘も四十歳

和歌山市　神平狂虎

やがて春汽車から船に乗り継ごう
春はまだ浅くて見えぬ向う岸
霜柱男の道は白いみち
一歩ずつ進めておこう春の駒

和歌山市　福井桂香

水仙が今年も届く母の居間
湯豆腐のゆげの白さに諭される
ごぎょう草母は小さくなり給う
自己主張最たるものに我が指紋

和歌山市　後藤正子

許すことも愛することも恙なく
どっと笑ってその場を少し後ずさり
拡大鏡の端から現われてくるおばけ
ガラスの靴を捜していますおもちゃ箱

和歌山市　山川克子

潔白な大根白を押し通す
手紙にも書きましたがと長電話
良薬は苦いものよと甘い声

和歌山市　坂部紀久子

明日からと今日に甘えている狡さ
編物へ満足そうな置火燵
サウナ出てその気になって乗る秤
生欠伸されて話の腰が折れ

和歌山市　木本朱夏

スーパーにない温み買う小売店
ファスナーを閉じ忘れている老いなれや
無人駅昨日の詩集が風に鳴る
約束のない日曜日が晴れている

倉吉市　渡辺独歩

三が日過ぎたら居留守したい神
大根を洗えば大根背を伸ばす
娘住む浪花の予報聞いて寝る
人間の回復の橋揺さぶるな

岸和田市　福浦勝晴

帰途急ぐピエロの肩に星が降る
商談がこじれて雪の溶ける音
ジャンジャン街哀しからずや昼の酒
うどん屋で不況を啜る昼の音

岸和田市　原さよ子

お伊勢さんで総理に逢った初詣
糠に釘されど男だ前に出す

七草粥パン食の子も食べている
住み慣れて道の起伏も気にならず
諭すべき子に諭されて日々平和

宇部市　平田実男

内孫誕生（二句）

考えに考え平凡なる名前
息子ちと親父の顔になって来る
聞くだけは聞く神様も屠蘇機嫌
アーメンを唱え核兵器を造り

岸和田市　清野こう

雪の中走って来たらし屋根の雪
学校がはじまり静けさ取り戻す
ゆずの香にどっぷりつかり冬至の湯
ヘルパーがほめてすかして食べさせる

岸和田市　古野ひで

新春の陽に新芽の息吹ききこえそう
わが胸に住むひとひとり雲流る
聟殿の意見素直に聞いておく
宅配へこまめに荷物を作る母

岸和田市　島崎冨志子

年賀状マンガの文字やワープロも
お賽銭はりこみ山程願いごと
五十台最後の年よ万歩計

孫十ヵ月

仁王立ち次の一歩が踏み出せず
又同じことを言うてる年だナー
食えさえすりゃ円高なんて気にしない
おかげ様そんな言葉が好きになり
悠々自適とは誰のこと車椅子

姫路市　大原葉香

大和路を巡りて

大和路がシルクロードに掘られけり
柿須賀や御所柿の味奈良の味
邪魔されず邪魔にならない隠居部屋
頼られない生活（たつき）に馴れて日々是好

姫路市　人見翠記

菓子の名前

古稀の初春くちびるの紅にある若さ
外孫の絆年玉だけ送り
初風呂で吟じしみじみ生きる幸
受験の子四当五落の寒い初春

姫路市　丁坪サワ子

幾年か校歌で続く同窓会
年重ねせめてデザインはでに着る
聞き耳の上手な茶の間友が寄る
美しく老いたく詩と共に生き

島根県　栂みどり

かんざしに親の知らない夢をさす
地球から振り落とされまい兄弟よ

島根県　松本はるみ

一瞬のわき見に神は通り過ぎ
缶ビール今日は胃の腑も許さねば
島根県　北川民子

夕闇の白い山茶花亡母憶う
鯛焼きが三箇でもめる睦じさ
なれ初めはソロバン玉の桁違え
水仙へ触れる指です清らかな
鳥取県　林露杖

天地の息吹き畏し初日の出
一役を辞めて静かに寝正月
水仙の香る小部屋へ招じられ
父となる父たることの難しさ
鳥取県　土橋螢

お土産に千円なりのさくら餅
月朧どちらからとなく歩み寄る
死ぬ方へ向って走るほかはなし
この胸に触れたい男がひとりいる
鳥取県　中原汲香

燃え尽きて死ねるだろうか黄水仙
懸命に妻を護って風の中
無遠慮に雑音たかい昼の旅
実年の虚色くっきりルージュ描く
鳥取県　中原みさ子

某月某日笑い袋の穴みつけ
西へ西へ父の足跡追っている

誰か拾ってください花が風に乗る
笑顔千両晴れて夫婦の独楽まわる
鳥取県　羽津川公乃

雪国に暮らし賛歌に背を向ける
臭覚も視覚も青を模索する
終点も寿命も伸びる青写真
肩叩きまだ浪人の子がひとり
神戸市　仲どんたく

一年の計立てる日を酒の中
中ぐらいのたっしゃと思う喜寿の欲
割切れぬまま新春の竜となり
裏窓の暮し温める灯が点り
神戸市　山口美穂

霜柱とささやく水の愛よ
入れ歯はずせばとってもかわいい老母である
茶柱をだまっておれぬ朝の膳
今日の無事輝くオリオン座を仰ぐ
玉野市　小谷仙山

一度くらい勝ってみたかろうヤジロベー
野次馬でないのが野次馬の中にいる
又いつか会う日へ通う手の温み
日銭稼いで銭の重みが胃に溜る
羽咋市　三宅ろ亭

行商の女のリヤカー鱈と烏賊
町長のアイデアらしい目安箱

千曲川スペイン風の美術館
荒れる夜は小諸馬子唄唸ります
今治市　越智一水

秋の夜を妻と大事にして語る
嫁が来てそれから父がくどくなり
すみませんと言って女は先手打ち
水割りが単身赴任へ濃くなり
枚方市　宮川珠笑

肩書きを無視してくれる飲み仲間
二日酔回復今夜も五時から男
煙草を愛す父母の肺ガン看取っても
愚痴知らぬ妻と銀婚自祝する
柳井市　弘津柳慶

歩いたら五分の処へ自家用車
初夢は何んだったかと床を出る
暖かい正月何か気が抜けて
テレビの呼鈴にだまされ玄関へ
奈良市　天正千梢

出身校を物差しとする世を嘆き
ひと時は善女になりて回向の座
ていねいに暮らしていますおぼろ月
親の苦労子供の肩にこぼれ落ち
今治市　矢野佳雲

生れたら雪のとっても深いとこ
寒いから寝る外はない檻の虎

よれよれの服流行を狙いすぎ
命なんてはかないものと喪服脱ぐ
橿原市　岩井本蔭棒

団欒の湯気を逃げてる反抗期
思い出にいつも悲しい母います
脱落の同志の靴がある寓居
五六人増やし負担を軽くする
高槻市　川島諷云児

脇役で終る人生だってある
人生は運と不運の綱渡り
長生きはしたくないのに薬漬け
裏の裏読んで空しく妥協する
高槻市　竹内花代子

折紙の順は先に覚えた孫の指
湯豆腐の嵯峨野は尺八の音で食べ
佗助がぽとり生菓子の彩で落ち
初スーパーへ七草だけの市場篭
高槻市　河瀬芳子

「正月は帰ってこい」とつるし柿
柳の下の泥鰌わたしも口語体
鬱の字はもう書きません虫眼鏡
アパートの窓から演歌ふってくる
米子市　寺沢みど里

暖冬の先が気になる葱畑
ひと振りの塩から丸い粥となり

あとひとつ咲けば満願福寿草
歳月を無駄にはしない和紙の艶

米子市　澤田千春

燃えつきた山は静かな顔をみせ
善人を迎える故郷の橋がある
節目節目に燃えて歩こう遠い道
面白い嘘にうっかりうなずいて

竹原市　森井菁居

ホップステップジャンプが好きな男坂
矢印に逆らうほどは無い勇気
かかる世へ負けず嫌いの血をもらう
九谷にも色々あって旅愉し

竹原市　岩本笑子

しばらくはだまって生きて見るとする
抱き締めて子のまっすぐな瞳に出合い
逃げるのはよそう小さな手と握手
お嬢さん心盗人にて候

出雲市　吉岡きみえ

裏切りに遇うてジャガ芋芽がのびる
足くせの悪い靴が二足ある
約束を守り寝ている蛙たち
高慢なトゲをのばして冬バラよ

出雲市　園山多賀子

猜疑心さらさら持たぬ実千両
情実が時に眼鏡を曇らせる
結論の答委ねる春の風
終焉のための笑顔を蓄える

出雲市　河原恵美子

ほら貝の過去を知ってる水すまし
父の背あの日をきっと許してる
エプロンの白がまぶしいシクラメン
きんぴらを母の顔できざみ終え

羽曳野市　中村優

桐箱の銘で飾った中の壺
文豪のほのかな恋の升の文字
金びょうぶ立てて言葉の厚化粧
窓際で種火を抱いた正義漢

羽曳野市　佐野白水

横着な賀状住所書かぬまま
一年の設計元日にはもう狂い
設計図あしたは少し書き足そう
木枯しは僕のうれしい気も知らず

寝屋川市　岸野あやめ

小癪なり暴走族の初詣
子のシャツが親のシャツ抱く洗濯機
良い友で居ましょうなどと逃げてゆく
嫁の手の結構枯れて来る賀状

寝屋川市　平松かすみ

雪景色待ちくたびれているカメラ
えび天のボリューム脱いであきれられ

温室が好きな男でまだ独り
包み紙乙女に返る京の菓子

箕面市　坪田紅葉

親も子も言いたい事も言わぬまま
若い気でいるのも困る肩がこり
円高を理由に家族でハワイ行き
カレンダーをかけて掃除のしめくくり

松原市　北野久子

九千万だあれも当っていなかった
一枚の賀状が昔おののかす
安楽死の署名運動待っている
肩パット外してやっと落ち着いた

松原市　小池しげお

薬局が風邪をひいてたかぜ薬
ライバルへ答を二つ用意する
松林かくれんぼした人と遇う
くっしゃみをしてヒレ酒を注文し

大和高田市　岸本豊平次

ペンペン草生えても寄付の筆頭
会葬は日溜りでマフラー取っただけ
大霜を寝床で肩が感じとり
初日の出山から明けてくる大和

宝塚市　丸山よし津

繕いが下手で北風もろに受け
備前九谷盃集め下戸の春
百の自我押さえて歩く蟻の列
飽食の果て朝粥に凝っている

高石市　浅野房子

世間体だけの絆でつながれる
枯葉舞う公園ストンと陽が落ちる
流行のサラダ記念日よまされる
ただ熱いお茶だけほしい負け戦

羽曳野市　田中隆二

腕組を解けば思案がこぼれ落ち
偉そうなことは言わない紙コップ
重箱で外国産が顔ならべ
実印を妻が預かる定年後

河内長野市　井上喜酔

末代の恥と親父が穴を埋め
気休めの言葉が余計怒らせる
ランドセル買う孫がいてお年玉
反対をしても最後は火消しツボ

茨木市　井上森生

頸椎の検査冥途の検問所
年の瀬の指揮元気な妻の竹箒
沈む陽に問えば朝まで待てという
初弓や大和ごころがよみがえる

西宮市　西口いわゑ

歌一つ覚えて帰るバスの旅
三面鏡へ時に女は無理を言う

初恋へ淡々と書く年賀状
木枯しへ屋台があって酒がある

西宮市　瀬尾六郎太

フルムーンサッポロラーメン舌つづみ
元旦に孫待つ札幌雪変化
老妻曰く雪の札幌洗礼と
正月はいくつになっても喜々として

東大阪市　崎山美子

晴れがましい席にまごつく老夫婦
握手した温みをそっと持ち帰る
お世辞とは知りつつ弱いほめ言葉
ビル街でひそとのれんは生きている

八尾市　山下みつる

ゴマすりの家来ばっかり残ってる
年寄りが居て夕食をせかされる
出来ました娘に彼氏親の声
だんご汁すすると冬がそばに来る

芦屋市　竹中綾珠

杖だけで歩ける幸を芦屋川
手術ミス新聞に載り幸思う
椅子生活六甲山の春霞
手術前夫の顔が目に迫る

尼崎市　奥山美智子

字引繰るもぬけの殻とならぬため
人事と思えぬ話きいている
好々爺昔語りが好きである
笑えない思い過ごしが耳にある

兵庫県　脇田米朝

ころがせるような土地なら持ってない
通せんぼしてたは僕の好きな人
風船の糸は母ちゃん握ってる
デカンショの街に煮えてる牡丹鍋

富田林市　松本今日子

大鍋の大根ふきふき家族なり
丸顔と聞いて来ただけ待ってみよか
行くも良し帰るのも良し古い街
念入りに書いた賀状がもどって来

藤井寺市　福元みのる

男なら晴着見ないで顔を見る
餌のないときは鳩さえ平和でない
昇り龍飛龍わたしは這うてゆく
普通車もよし坐れるし眠れるし

弘前市　斉藤劦

雪しんしん温湯(ぬる)こけしは眠たがり
出稼ぎの親も見にきた発表日
減反の話に乗ってくるそば屋
寒鱈を一本下げて帰路の風

和泉市　西岡洛酔

良心のかけらを太陽知っていた
朝露と足跡残し老いの職

恐山ちちははの声風に聞く
七尾市　松高秀峰

貧乏のあかげで和む松の内
正論を吐いて退職早くなり
窓口で夫婦他人の顔になり
倉吉市　野中御前

日本に核を落して見にきてる
喜寿迎え傘寿の坂のきついこと
笛吹けば時々燃える妻がいる
倉吉市　淡路ゆり子

ひたすらに大根を太らす野良仕事
たくあんも入歯になると味が落ち
何事もさほど気負わぬ六十路越す
大阪市　吐田公一

水たまり庇い合ってる老夫婦
デュエットができるカラオケばかり選り
人間を創って神は悔いている
大阪市　中西兼治郎

うしろ指七十五日耐えて生き
股のぞきせずとも橋立よい景色
娘のシャワーぼかして見せるすり硝子
大阪市　町田達子

嫌われる注意を母は繰り返し
南の灯にレトロ追う日の戎橋
愚かさを見透かす月が冴えて来る
大阪市　井上白峰

忌憚なき意見を吐けば椅子廻る
白旗を掲げていても尾は振らず
保険屋が終着駅の距離測る
大阪市　鍛原千里

むずかしい本は電車の中で読む
芽吹く春信じて開ける北の窓
生きている重みやわらかく豆を煮る
大阪市　寺井東雲

待っていた好きな番組寝てしまい
風のよな旦那で妻が悩んでる
お見事で計りたくなるあのバスト
大阪市　渡部さと美

三十年長しみじかし夫婦びな
寄り添うて足跡ここはパール婚
三十年の坂に置きましょ椅子二つ
和歌山県　天満三千代

夜業する納屋へ甘酒くる寒さ
半日で五年を語るクラス会
人間だから欲の中から出られない
和歌山県　寺田裕美

身から出た錆は素直に落さねば
強そうな弱そうな龍年賀状
手ぬきした今日に限って客がくる
和歌山市　青枝鉄治

器量よい蜜柑から取るこたつの手
ボーナスを一気飲みした娘の晴れ着
ゆっくりとさせて上げたい陛下の背

岡山市　川端柳子

みとれると雛人形の春の声
たった一度の人生秘密も悔いももっている
明るくあかるく振舞うローソク風にゆれ

岡山県　荻野鮫虎狼

自販機に後は任せて初詣で
最善も次善も策の無い晦日
虫が寝る冬です僕も冬眠中

岡山県　岩道博友

喝采の橋に便船減らされる
欲をした利殖の風見鶏倒れ
筋書を聞けば仏陀の過去を入れ

岡山県　小林妻子

明日への指針へ眠い日記書く
春の雪日銭の苦労知りはせぬ
吉日を追って大工の予定表

岡山県　山本玉恵

人形を洗うて不倫の罪をけす
昼の月又も私を追うて来る
振袖を着て焼芋を買いに出る

出雲市　板垣夢酔

同窓会その後の暮し皺に見る
煙草の輪敵の出方をじっと待つ
ビザも無く赤い国から渡り鳥

出雲市　石倉芙佐子

一ぴき二ひき羊を呼んで夜が明け
冷静な素顔ばかりを見せる川
ある時はしびれ薬も盛るお皿

出雲市　小玉満江

おすましの顔が並んだ美容院
目くばせが嬉しい二人の退社ベル
第九が流れて街があわて出す

高知県　小澤幸泉

元旦や訪う人もなく暮れる
寝正月テレビひとりがよくしゃべり
和服着てやっと親父の席を占め

高知県　中内朱坊

アメダスが届けてくれた初日の出
柳友の安否年賀が未だ来ない
訪米の首相農家の目が光り

高知県　曽我部裕

持ち駒が日増しに減って行く落ち目
びわの花今年は孫に送れそう
五体健康残ったものはこれぐらい

高知市　北川竹萌

肩力抜き近寄らん塔の影
そっと逢う犬が尾を振る松葉杖

回復のリズムに合わす歩道橋
島根県　石田清泉

列島を埋めつくしているグルメ
アツアツの炬燵でアフリカの地図拡げ
七十の自覚をさせた保険証
島根県　藤原鈴江

卯の花の香りが向きを変えさせる
笑っても泣いても狂わぬ砂時計
七十歳春よ春よと待ちわびる
鳥取県　広本文子

ぽっくりと逝ってようやく善人に
ブルジョアの時計はいつも気ままです
破局ではなくてあたしの出発よ
鳥取県　さえきやえ

傷口の深さを夫に語らない
愚痴捨てるほどよい広さ畑を打つ
かすがいの子にそむかれた冬椿
鳥取県　江原とみお

銘柄のよい神さまと手をにぎる
お茶漬は日本人からはなれない
丁重にむかえてくれる給料日
米子市　金山夕子

落ちないように神の背中にしがみつく
順番に神の握手を待っている
イヤリング外すとすべる丸木橋
米子市　光井玲子

冬の箸甘い味にはだまされぬ
最後には乱れてしまう福寿草
堪忍袋まだつくろえる倖せよ
豊中市　上田登志美

点滴を受けつつ名優芸に死す
渡り鳥わが運命を見た思い
今日は今日明日に持ち越ししない主義
豊中市　一瀬福一

旱天を尻目水草花咲かす
木犀に鼻近づけて一人言
囀りにその囀りに歩を早め
豊中市　辻川慶子

福寿草母は米寿の春迎え
置炬燵テレビは母の子守り唄
逢える日の眉はやさしく美しく
福岡県　横地雅風

必ずを守っているのは聞いた方
時たまの都会で呆けたと自覚する
お化粧の明け暮れごきぶり顔を出す
唐津市　山口高明

辰巳から娘の縁談やって来る
竜の目に人間共の腑甲斐無さ
釣瓶井戸遠い昔の風呂の水
枚方市　二宮山久

正月に決めた事がらもうわすれ
一日を無事で過ごした神の前
正月の気分が抜けぬ社の仕事
西条市　片上明水

本堂の冷え経文がまだ続く
海に橋かかって島の情が消え
焚火する位置境内にちゃんとあり
寝屋川市　宮尾あいき

桜並木固いが蕾ちゃんと付け
恋風か去年の風邪がまだ癒えず
津軽の海ジョンガラ節のバチさばき
岸和田市　芳地狸村

円高がひびかぬ孫のお年玉
食べるときだけが元気な呆けはじめ
いつからか風呂の掃除をまかされる
鳥取県　金川満春

喜寿過ぎた余生だ丸く渡りたし
あれこれと妻満杯の神頼み
元旦にあれこれ燃える覚悟決め
島根県　松本文子

追憶の死角に花を活けておく
冬眠の脳味噌大きなあくびする
暮れの街後姿へ呼びかける
静岡市　永倉僕川

天国は混んでるらしい急ぐまい

クレヨンの赤がすぐ減る幼児の絵
訃報聞く句会の朝へ同い年
大東市　土岐トク子

演歌聞く心は青春の虹の色
美わしき御名はイエスよ比類なき
愛憎は流れ流れて五十年
竹原市　信本博子

子を想う親のふくらすしゃぼん玉
故里で思い出のくず抱いて来る
ろう梅の花びら透けて皆無口
竹原市　石原淑子

女強し愛することを知ってから
朗らかに母親役に徹し切り
恋人を演じてみよう二人旅
貝塚市　行天千代

正月と運動不足と消化剤
今からが冬本番の初暦
孫たちが去んでやれやれ床につく
堺市　柿花紀美女

年毎に短く老いの四季が過ぎ
ふる里の幼なじみも他人めき
人住まぬ家の展示場枯葉舞う
富田林市　新開千代子

くやしいが予言通りになって来た
ドラの音が未練心をかきたてる

親にするやさしいしぐさ孫まねる　唐津市　筒井朴竜

一杓の水掛け亡母へ供養塔
九重山に響く杣挽き樵唄
滔滔と末廬へ流る松浦河　弘前市　真喜内實

一年を雪純白で締め括る
洋服の裏働いた父の地図
煩悩を捨てきれぬ腰曲がって来る　寝屋川市　堀江光子

十二月手品習つている気配
美容院歯医者も予約する師走
除夜の鐘きく燈明をつけ替える　有田市　松井かなめ

名誉より金より健康でいる余生
白基調娘の夏のファッション
降りるたび土産をあさるバスツアー　姫路市　都里遊光

憎い人嘘よこの世でいっち好き
神様も覚えきれない願い事
争うて出れば十六夜優し過ぎ　川西市　松本ただし

親の年越えて親がまだ見えぬ
苦労せよしっかりやれと親の判
ぬるま湯にしびれ切らした差益金　福岡市　吉川一郎

仏像を見るのは好きで無神論
月の夜影がスリムにしてくれる
試行錯誤重ねてドラマが出来上る　広島県　藤解静風

いさぎよく退くが火種はおいてくる
大詰めにきて戯れではすまされぬ
貧乏性衝動買いがまだ抜けず　岡山市　井上柳五郎

爪に火の小金預けて税取られ
この旅はワンカップひとつ着く距離に
ウオッチング隣の庭の菊の数　倉吉市　渡辺菩句

北風にうしろ髪引かれたことがある
言訳を長長と
酔うて来て国訛　岡山県　直原七面山

十指皆違う考え抱いている
腹這いが充電してる三ヶ日　大阪市　北山悟郎

ウオッチング今日も東京都心へと
残業の金で健康買いに行く　和泉市　岡井やすお

贈り物だけでは義理の気がすまぬ　和歌山市　玉井豊太

投げ売りとあるから母はヘルメット　吹田市　茂見よ志子

継がぬ子か父の足跡悔やむ齢
懲りないで株に一喜一憂するつもり　姫路市　中塚遊峰

幸せの包が届く師走風
伊勢海老も外国生れ幅きかす　出雲市　小白金房子

代筆が気になる友の身を案じ
国境を越えて善意の荷が届く　出雲市　竹治ちかし

注釈はいらぬ故郷の山と河
一人ずつ帰って家の灯増し　出雲市　久谷まこと

水溜り飛び越えてから振返る
干渉はせずに歩かす子の歩幅　米子市　川上より子

山茶花を掃いて椿に思慕つのる
白壁の孤高の裏ににじむもの　竹原市　古田太虚

梅が咲き水仙が咲き蘭が咲き
七草はスーパー店にはえてます　海南市　三宅保

信管のない不発弾過去がある
石垣のいちばん下も石である　大阪市　宮下とし

争えぬ血すじは子等の呑みっぷり
歳末のハッピにまじっている社長　河内長野市　植村喜代

アルバイト帰っていちいちする話
この上はどこまで変る二千年　広島県　田村新造

寛美観て出ると道頓堀は雪
笛太鼓響く故郷の神楽宿　岡山県　矢内寿恵子

兎小屋しきたりばかり追うて初春
雪のないことも案じる農日記　箕面市　椎江清芳

芸者から仲居女中と老けてゆき
不器用な男器用に浮気する　和歌山市　山田高夫

仕組まれた愛に溺れる泥の舟
愛憎にゆれる乳房を二つ持ち　和歌山県　新谷忠昭

フルムーン妻もへそくり出してくる
退職を待ってた杉の枝はらう　茨木市　堀良江

ヘルスメーター松過ぎてからこわくなり
粕汁でよいご機嫌の姉妹

自選集

しあわせがちょっと気になる塩胡椒
風呂敷をかたく結んで齢かな
わからないことは石屋に聞けばよい
花の咲くはなしを母にしてあげる
その気になればその気になれば　春

小出智子

白菜の頬冠り解く小正月
人恋えば瀬戸の浮島絵の如し
ぐい呑みで男は逃げる道探す
ゆるい目の鼻緒で旅の恥探す
筋の無いドラマ始まる鏡かけ

月原宵明

日本に居てピンと来ぬ円の価値

金井文秋

頭と足はまだ衰えてないつもり
バランス感覚にもしのび寄る老化
修羅場は知らず年輪がふえただけ
仕事がリハビリと根性を見せて死に

正本水客

笑い声のなかの別れを別れとも
規則正しく変るシグナル待っている
思い違いを詫びて姉妹仲がよし
笑いごとでは無いと傘借りて去ぬ
うらおもてに浴衣を着てる旅のこと

児島与呂志

もう少し生きるネタあり一行詩
幸せな夫婦が出来る口喧嘩
残像に同行二人の夢がある

脱ぎ捨てて揃える手があり酔うててもー
言い負けに馴れて沈黙してこまし

黒川紫香

出湯からはなれて波の音を聞く
バスツアー隣の女に貰う菓子
早咲きの梅窓越しにバス走る
老女から声かけられた天王寺
話だけお聞きしますと来る喫茶

市川鈴魚

それからが軽い女の糸切歯
男一匹影のさみしいふところ手
にぎりめし空の蒼さと話しずき
度の強いめがね流れは逆らえず
志野の皿ぎしぎし山はまだ吹雪

小林由多香

日曜大工たたいた指をまた叩き
十二月売る目買う目が殺気立ち
シグナルの赤忘れ物思い出し
念仏をあげて瞼に亡母と逢う
気の乗らぬ見合い化粧を手抜きする

工藤甲吉

腑に落ちぬものにパチンコ文化賞
初せりのマグロはずらりマグロらし
ゲートボール老いは子どもにかえるとか
今日はついているぞと朝の二黄卵
触るだけでもサボテンは許さない

本田恵二朗

良癖と悪癖みごと兼ね備え
念入りに育てて鳶にさらわれる
根無草またの名烏合の衆と言う
立食いの寿司と学帽なつかしみ
歩道橋ここらでちょっと一と休み

大矢十郎

思い出し笑いも五十年の芸
下手な事言うより頭下げておく
相続の話が止んだ咳一つ
うちへ来て銀行話の桁落とす
隙少し見せて女の処世術

野村太茂津

聞く耳を持って正邪を区別する

急所に触れて本音引き出す気が減入る
青い海泳がす稚魚を育ててる
稚魚育つ鯛か鮪か雑魚だろう
雑魚ならばも一度放す青い海

山内静水

おかげさま六度び迎えた春やはる
明けまして昔は紫雲たなびけり
おらがはる担いだ絵馬の鈴が鳴る
落し子を眺めて思案をしてる辰
おかげさま快気を祝う年男

藤井明朗

人生いろいろ男とおんなのドラマ
円高の対策にほんの偏頭痛
暖冬へあとが気になる遅い春
子や孫の願望春へ夢さぐる
喜寿祝う艶も美声もおとろえず（堀江正朗氏喜寿）

水粉千翁

筋道を通す箒が丸くちび
去る者は追わぬ背中がなつかしい
ここに住む幸せ柿が熟れ残り
ほめなおしけり湯豆腐に話しかけ
谷合いの住めば都の紅葉散る

米澤暁明

反対という末席の目がきらり
水引きでキリリとしまる床の松
松の根は岩をつかんで風に堪え
日本中みんなあやかる昇り竜
松の内もうペンのいる原稿紙

八木千代

竜の子の今は漂うばかりだが
そのうちに風巻きおこす龍の念
天井の龍のまわりのつむじ風
掴めないものがまだある龍の爪
雪おこし龍の唸りを連れてくる

橘高薫風

性バレンタインデーとはならぬよう
バレンタインデー世之介の世なりせば
ハートチョコ仏さまにもあげてある
時実新子さんへ
有夫恋マリー・アントアネットかな

—同人吟—

秀句鑑賞

—前月号から—

河内天笑

この世へはちょっと花見に寄っただけ

新家完司

五百億年前のビッグバン（大爆発）によって生れ現在も膨張し続ける大宇宙、その片隅の銀河系宇宙のそのまた片隅に位置する太陽系宇宙で四十五億年前に地球が誕生したと言われる。日本列島が今の形に納まったのはおよそ百万年前で人類の先祖が地球に登場したのもそのころと言われる。

半世紀前まで言われた「人生僅か五十年」も今では「人生八十年時代」に入ろうとしていますが、それでも振り返れば来し方の全てはアッと言う間の出来事の様で、大宇宙の中のひとりの人間の一生はとなると、まさに「ひと夜の祭」位だなどと思いが馳せて行きます。

すこし次元の違う角度からとらえたこの句はスケールが大きく、しかも全体に漂っているペーソスが味わい深く、惹かれました。

お月様今宵は連れがありますの

田形美緒

いちど一緒に歩けるだけでもと胸をふくらませていた人と、いま、こうしてふたりで歩いている。ときめきの時間に酔っているわたし。すこし冒険しているわたしが生き生きしている。いつも相談相手になってくれていたお月様が見ていらっしゃる。わたしはとても誇らしげにお月様にはしゃいでみたくなった。こんな夜はおそくなっても、亭主にはどんな嘘でもスラスラ口が動いてくれるのです。

未亡人寡婦なんとでも言いなはれ

稲葉冬葉

ご主人を亡くされた当座は、ほんとうに途方に暮れられるだろう事は容易に想像出来るし、ましてや交通事故で一瞬の内にこの立場になられたら尚更です。この句、やけくそや開き直りで言ってるのではさらさらない。

噂をくぐり抜けてやっと自分の生き方に自信らしきものを見つけての心意気とでも言えそうで、「サー何でも来なはれ」というしたたかに鍛えられた熟練寡婦の肝っ玉がありありと見えて来ます。からっとした明るさが感じられ、語り口調の中で力強さが伝わって参ります。

右の手はあんまり物を知り尽し

土居耕花

見たり聞いたり試したりした私の手もずいぶん齢を重ねたものだ、と感慨深げに自分をふり返る翁の姿。静かな翁の右手には見えないものまでがよく見える不思議なエネルギーがそなわっていて読む者に神々しさを伝えてくれます。「右の手」に自分を置きかえて句の味を引き出されるあたりは、さすがの「右手」であると賞賛したい句です。句集「やっこ凧」よ永遠に。

世直しへ妻を連れ出す投票日　高杉鬼遊

あやとりの橋を渡ってきた出逢い　林瑞枝

学歴もコネも通用せぬ土俵　高橋千万子

義理人情ふと考えたのが油断　柴田英壬子

姉妹で飲むには惜しい四畳半　北野久子

へそくりが貯まると口が軽くなる　羽津川公乃

弾丸よりましかパチンコ　ピリヤード　藤田頂留子

喜びもわずらわしさも血の絆　柿花紀美女

おしずかに出来ないものか猫の恋　曽我部裕

病気癒えタクアンを噛む泪かな　藤原鈴江

川柳太平記（118）

川柳の群像

木下愛日

東野大八

たらたらの記

「私は京都で生れた。（今の第二京極辺）こどものころからるい弱。やがて四条南座の横道のまんなかに大きな松の木があった川端へ移った。しがない旅館を営む父であったが数年をして（小学六年の祇園祭の日）その父の急逝。同時に家業の母と兄の手になって、青少年の時を過した。やがて家業の斜陽から、貫名海屋（菘翁）→遠山盧山→後藤徳山先生について、趣味で習っていた塗鴉を恥じず、大正十五年の秋、大丸大阪本店につとめる身となったのである。しかしながら、痩軀螳螂のそれゆえ妻を持つことも、しかもこども四人ももうけるなどのことは、つとめ先は勿論仲人でもあった食満南北翁はじめ岸本水府氏、前田雀郎氏、布部さちを氏など、知る人はみな私の七不思議に数えられたようである。まして本人にとって自称清貧をつづける生涯、古稀を迎えて今日にいたるということはまことに夢のまた夢のように覚える。

この時を記念するかのように日本少年のなつかしい投稿時代から詩、短歌、俳句を経て川柳に落ちついた自分の日記を読み返すかのように、ここに句集「愛日」を刊行することになったのである。（中略）しかし句をまとめるといっても、大阪第二の空襲、つまり昭和二十年六月十五日南海の岸の里で罹災し、一切を烏有に帰して、こども三人を宝にして故郷の山紫水明にまみえ、京都深草に移り住んで今日ある身なのである。だから活字にした句は、もれなく書きとめておいたが、それを焼失しているため、懐しい京都時代の、燭、大文字、擬宝珠、紙魚、そのほかの新聞、雑誌に発表した句などは、妙におぼえているものは、おもいだすまゝに書きとゞめ、主ともいうべき句の、つまり番傘横とじのよき時代から、同人になって四十六年までのものを森中恵美子さんの、それこそなみなみならぬご辛苦によってまとめていただいたのである。このことこそ、この句集の最も倖せとするところである。昭和47年2月8日　木下愛日」

これが初版「愛日」の添え書である。これに百六十三句を補足して第二版を再版したのは昭和52年12月である。戦前、戦後を通じ五十年間、心斎橋の大丸に通勤した。愛日は本名木下元一、明治33年2月8日京都市生れ。句集の添え書にもある通り文学青年で、若い頃脚本家を志し、食満南北に私淑し同家に寄寓し大阪住いもした。（大正9年―同15年）その時の句

。水のみやこの水に降る雪　　愛日

愛日は昭和59年4月8日老衰で死去。享年84。法名は法誉愛之禅定門。

「番傘」主幹礒野いさむは、同誌巻頭に〝木下愛日の人と作品〟と題し、長文の哀悼文を

寄せているが、以下はそこからの抄録。

「。叱られて寝る子が閉めてゆく襖
　。お父さんうちにお金がありますか

この（愛日の）句にふれたのは、私が番傘同人になって間もなくの昭和15年頃、深い感銘をうけた事を昨日のように覚えている。戦時下のきびしい生活の中で、庶民の親子の情愛をさりげない言葉でかく綴れるものかと。

　徴用の目のふち染めて姉の家　愛　日

徴用をうけて地方の軍需工場に赴く者が姉を訪れ、盃を交して語り合ったのであろう。しかし軍のきびしい検閲制度に、この句は徴用を恐れ、泣いているのではないか、女々しい川柳だ、戦意を喪失させるような川柳の発表はけしからんと、番傘本社に軍の情報部から呼出状がきた。岸本水府氏が赴いて釈明につとめ許された一句だ。言論の自由を失ったのは文学のすべてだったが、川柳も例外ではなく、反いて発刊停止の憂き目にあったものが少なくない時代だった。当時、編集事務に携っていた私も、水府氏も止むをえず戦争協力の誌面づくりに転換せざるを得なかった。（中略）

愛日は番傘作家中の変り種である。別に本格川柳を逸脱していないが、伝統の流れのうちで、思想の先端を認識し、はっきりした個性が作品に現れている。川柳を学する念に篤く、忠実に世相の表裏を観察して、巧みに詩性に触れきたり、捕捉するに全精力を作品に盛らず、あわれ、ゆかしとかの余韻を残している点、推奨すべきである。特に次の句

　かりそめの生命　金魚は翻えり　愛　日

自己の感覚内容に帰納消化し、取材に対しては常に愛情の念あつき感受性の強さがある。

　人の家の鏡に映るわが姿　　愛　日
　母は子を子は母をみる飯の砂　　〃

日常茶飯の一些事から、かかる微細な点の川柳化と詩性の味うべきものを見出してくる点がよい。ともすれば迫力に乏しく覇気に欠けていはしまいか―。

赤壁川柳会客員の近江砂人氏も、その頃、次のように愛日氏を語っている。

　友だちは買うてもらった子の寝顔　愛　日

何だか判じもののような句だ―とこの句を評している人があったように記憶する。この句をそんな味い方しか出来ない人は、文学を語る友ではない。この句は理屈に堕そうとした感覚を、詩の畑に取戻した渋い句である。句全体が一つの光背を背負っているようで、味い深い名句だ。川上三太郎氏は、愛日氏を「永遠の父」と評された。愛日氏はこどもの句と四つに組んで、苦しんでいる。」

「昭和24年の番傘誌に、一挙八十六句の連作「千日記」は、戦災後、終戦後の生活スケッチをまとめた赤裸々な、愛日氏の私小説風の佳作として好評だった。

　ゴーゴーを五十にできた子が踊る　愛　日
　目に入れて痛くない子のスキー焼け　〃

成長した子らの生活を、初老の父は、昔と変らない温い眼で捕えている。」

堀口塊人も「ふあうすと」（昭和47年6月号）の柳文で次のような愛日評を書いている。

「木下愛日氏が最近「愛日」を出版されるという。愛日氏は、想念を沈潜せしめて、自己反省の濾過を繰り返えし、その中から燻し銀のごとき光を発する作家は全国的に稀れである。私は現在、彼ありてこその「番傘」ファンなのである。愛日さんのような好作家を有することは「番傘」の誇りであろう。」

愛日―とは謙辞をこめた名雅号で、この自分を一歩控えめにおさえた発想表白が、多くの人の心をうったのであろう。

★次回は「鈴木九葉」

誹風柳多留廿六篇研究（三十四丁～三十五丁）

鈴木　黄・石田晋一・南　得二
小野真孝・本多正範・石田成佳
大屋六郎・八木敬一・多田　光
故岡田甫

589　**つれ〳〵のまゝいが栗ハゑみわれる**

鈴木＝はっきりしないが、『徒然草』の「栗喰娘」の件をテーマにしていると思われる。

親が娘の結婚をいくら反対したとて、娘も成熟して来れば、親の知らない間に、いつの間にか未通女ではなくなって一人前の女になっている。徒然草の「栗喰娘」も栗のいがが自然に割れるように一人前の女になったことだろう。

南＝徒然草の栗喰娘を暗示した程度の一般句と解すべきかと思います。

栗の笑みさハらバ落ん風情也　八三75

本多＝南氏説のように一般句と解します。未通女でしょう。

八木＝バレ仕立ての句であろう。

多田＝同。

590　**さくや姫裾を広けて穴を見せ**

鈴木＝富士山の祭神は、「このはなさくや姫」、そこで富士山を「さくや姫」とも言う。「穴」はさくや姫の女陰をにおわせながら富士の裾にある「人穴」を意味している。

この人穴を仁田四郎が探検した話は有名。

主題句は、単に富士山の人穴の入口を半バレ仕立に詠んだもの。

南＝賛。

すそのには人穴のあるふじぴたい　三二29

富士額裾野に人の穴もあり　七五31

多田＝賛。

三十五丁

591　**釈門ハむかし武門のあった所コ**

石田晋＝釈門は僧侶、武門は武士。「（上野は）江戸開府の当初は藤堂、津軽など大名の邸地であったが、江戸城の鬼門を鎮護する地と定

め、寛永年中に大寺院が落成して、東叡山寛永寺と号した」（『江戸文学地名辞典』）。意は右の引用ではっきりしている。すなわち現在の寛永寺の地は昔武士の邸宅のあったところである、というのであり、それを「門」の語で合わせただけの句。

南＝賛。

寛永まではにんべんのあった所　天三・八・五

きもんともしらずにはじめ御はいりやう　天五智1

多田＝賛。

とうにも堂にも縁ゝある霊寺なり　二三36

592　**おもふ壺へハ落させぬ師の御坊**

石田晋＝菅公雷となり宮中を荒らすを菅公の師法性房がしずめる説話の句。

「おもふ壺」の「壺」は「梅壺・梨壺」（宮中五舎）を意味し、それと「思う壺（予期したところ）」を掛けてあるもの。すなわち菅公が雷を落とそうとしていた梅壺などへは落とさせないでいるのは菅公の師の法性坊であるの意。

其のひどさ僧正壺のふたをする　二七21

南＝賛。

どのつぼへいつても時平ふたをされ　安四桜1

多田＝賛。

593　**夜なべ細工のてつへんハ駿河也**

石田晋＝「此山は人皇七代孝霊の御宇に一夜にゆしゆつせしとなり」（慶長見聞記）富士山は一夜にして出現したというので、意は夜業での細工の最高は駿河の富士山ということ。類句としては、

孝霊の夜なべ大ｷな仕事也　四六5

姫氏国の出臍ハ一夜細工也　五四26

鈴木＝賛。

よの山ハすそつつきにもたらぬ也　一八8

多田＝賛。

594　**敷しまですれハことわり納受也**

石田晋＝意は和歌でよめば、理は納受（神などが願いなどを聞き入れること）されるということ。祈雨小町説話がこれにあたるであろう。

ことわりや日の本ならば照りもせめ

さりとてはまたあめが下とは

哥の徳天も感涙流すやう　一三〇35

多田＝賛。

595　**旅てなひ歌枕する春の宵**

石田晋＝類句に、

旅でない歌枕する二日の夜　七三5

があり、二日の夜で「宝船」であろう。

意は旅でない歌（長き夜のとうの眠りのみなめざめ波乗り船の音のよきかな――別に舟に乗り旅立つ歌ではない）を枕として春の宵（正月二日）のねむりにはいる。また、旅と歌枕は縁語で結んだもの。

南＝賛。「旅でない歌枕」を、歌加留多として、春の宵を楽しむものと解していました。例句「二日の夜」がある以上「宝船」が正解であろうかと思います。

本多＝歌カルタと解しています。

大屋＝同。どうもすっきりしないが、歌かるただろうと思います。

八木＝宝船――初夢の句と思う。

多田＝諸説みなもっともでどれともいえません。私は「歌枕」をのんきに考えて人麻呂の早起きのまじない歌ととって、花見のためにこの歌を口ずさんで寝たと思っていました。

黒川紫香選

愛の戸を叩いて迷う冬の月　尼崎市　児玉歌子

反省を強いる女の塩加減

手切金出来ずに腐れ縁でいる

手の混んだ芝居見合をさせられる

姑を越す気負いがあった妻の椅子　京都市　松川芳子

無器用に生きて来ました破れ傘

八十路まだ疲れを知らぬ肩の張り

ぽっくりと死んだらいいとやけになり

サングラスかけて坊さん何処へ行く

腰かけのつもりの職で拾う恋　八尾市　高杉千歩

花の褥に幼ごころが蘇る

お返事が上手鸚鵡のしゃべりすぎ

移り香や亡母のしぐさを真似てみる

交際費やたらに嵩み午後の街

自画像がひとり歩きをして困る　富山市　舟渡杏花

死ぬ時も一緒にいつも騙される

いいとこを沢山持って運がなし

歯の浮いた世辞がくすぐる腋の下

矢が尽きた旅はやがての岸につく

旅仲間減ってアルバム薄くなる　熊本市　永田俊子

それぞれの過去を焚火にぬくめ合い

近く住んで都会は距離を保ち合う

政治家にパートのつぶやき聞えない

折れ蓮がいたわり合っている寒さ

のびのびと歩こう足に合わない靴捨てて　熊本県　大川幸子

ルールなどないがわが家のVサイン

差し指がきらいで真面目に生きてます

取りたての免許へ助手席落ちつかず

目のゴミを取る唇がそこにある
当然の権利と散歩せがむ犬　熊本市　宇野昭代

初夢もみぬ健康な高いびき
思い当ることがあるので医事辞典
パート変えたらしい此頃ちょっと派手
道づれがほしい日もある一人旅
マイペースなどと不精がひどくなる　今治市　野村京子

ライバルは反撃出来る視野におく
女の瞳に濁る踏絵がひとつある
おかめの面はずしたくなる毛皮展
悲しみに耐えぬく鍋を光らせる
耐えた事ばかりを書いた母の章　佐賀県　寺中三枝子

切符マニアが北へ幸福買いにゆく
振り返るとマグマを抱いた日々がある
目千両私みている金魚にも
多情多恨おんなごころを責めないで
ある不安キミと話題がずれてくる　名古屋市　藤井高子

どの辺に居ますか春の女神呼ぶ
雲がゆっくり流れて明日が読めてくる
モノクロの夢で老後を考える
はしくれの女心で紅を買う
よう喰うなあと見据えているのは魚の眼　高槻市　笠嶋恵美子

これっきり逢わぬ握手の手を洗う
愚かにも賽銭箱を覗き込む
怒りたくなると決って空を見る
顎をとんがらせ若い自己主張
恥かいたついでぶぶ漬け食べて去に　広島市　流奈美子

躓いた石の吐息を聞きました
孫娘もうキューピットからの使者
気の合った友で話が終らない
やさしさへ野良犬そっと寄ってくる
お世辞には遠く四角に生きている　米子市　足立由美子

小春日和せんたく物が天下取り
三寒四温今日は家中干しておく
絵の様な空と出会った今日の幸
飛び疲れ古巣で羽を休ませる
いい思いだけを古巣においてある　草津市　久保和友

黒いパンを買う白系ロシヤ少女美女
チエホフの家にさざめ雪降りつづく
食堂車の夜よシベリヤを走りぬく
元駅員をたたずまさせて駅廃止
石庭をほめると冷えが動かない

長岡京市　木本如洲

ネクタイの趣味中年に無理がある
妻の小指はすこし謀反を考える
情けには弱い素顔を父は持つ
酒灼けの鼻も和尚の人間味
孫の瞳の小さい嘘が怖くなる

守口市　森川まさお

初風呂は一人のホテルで目を瞑り
お互いに寝正月やと電話する
黒豆の皺のあるのを先にたべ
双六をしても無口な男の子
初詣で行脚の空也像と会う

米子市　小村てい子

輝いてからこだわりとなる受賞
嫁いだ娘を考えながら米をとぐ
つむじ風今日はどの径いったやら
涙など流して冬のまねき猫
眼裏に輝いて征った人偲ぶ

吹田市　井上照子

知恵の輪へ母挑んでる日向ぼこ
雑学は電車の中の週刊誌
絵筆もつ母まだ確か絵具とく
あんま機の思うとおりに身をくねる
遊び場が消えてマンション灯がともる

熊本市　黒田緑

強辯の根拠一握りの理論
高次元などと凡愚の手におえず
欠伸して心のヘドロ吐き出す気
まっサラのタオルは母のあたたか味
ちゃっかりのかたいガードに距離を置き

久留米市　鶴久百万両

樹氷見るときのコートは妻が撰る
冷えきった夫婦ひとごとには見えぬ
たった一度のデートできみが欲しくなる
女には謎さピエロの涙など
炭坑節を背にボタ山よサヨウナラ

岐阜市　渡辺杏村

風の中に春の匂いがまじりだす
合格にホッと解放された母
あたたかさラクダのシャツが重くなる
合格で母を囲んで慰労宴
やがて春土堤のつくしが予告する

兵庫県　東浦砥代

泣いた子も泣かした子も見る夕茜
また別な夢見る仮面提げて出る
燃え尽きて笑顔に変ってくる涙
描き切れぬ想いが墨をにじませる
言い過ぎた分だけ重い足の裏

西宮市　秋元てる

ちょっと泣かせたんと笑わす仕掛だな

北国の賀状へ都会の雪の事
先妻が良かった等と呑めば言う
無造作に袋一ぱいの薬
最初から悪妻だった訳でない

鳥取県　土橋はるお

終点の駅長室で泣いている
今年から漫画を孫に読まされそう
百姓を継ぐなら新車買ってやる
両の手を福がつかめるまで洗う

大阪市　上田柳影

腹立てて出れば山茶花の朱が笑う
葉牡丹がひらき小心責めてくる
気にしてる心に電話またも鳴る
大欠伸してるとバスが動き出し

京都市　木村たけし

大根焚きの湯気でぬくめる老いの数珠
街角に明治の味の店がある
鬼の手を叩くと森はこだまする
毎朝がいくさ弁当に母が居る

藤井寺市　高田美代子

いろいろとあって生きてるなと思う
栄光のテープを切ってからの道
早咲きの梅の便りを聞く炬燵
小雪ちらちら別れ言葉に降りかかる

出雲市　金村青湖

この辺に亡父母座らせて帰省酒
山は雪このまま終る絆かも
いつか逝く寂しがりやの妻残し
三味の音がいっそ哀れになる日暮れ

羽曳野市　吉川寿美

背伸びした財布が痩せて小正月
紙人形軽い約束してしまう
内輪ではすまない声で皿が飛ぶ
ナイフより切れる言葉が人を刺す

東予市　小山悠泉

小豆煮る音ことことと夜が更け
表情がゆるむ古老の艶話
指切りへ疑いのない少女の瞳
初春へ去年の悔いを積み残す

貝塚市　池田寿美子

盲目の友に

掌を握る花びら餅に辰の女
藪入りを新人類に教えとく
寒椿紅緒の下駄が路地を行く

宇野重吉をしのぶ

燃えつくす舞台の炎天国へ

静岡県　薗田漠沓

龍の凧くるくる廻っているもあり
お年玉すぐ開ける子と仕舞う子と
村の鐘聞かずテレビの除夜の鐘

故郷に捨ててはならぬものがある
鳥取県　小谷　美っ千

汗かいておんなスリラー夢物語
牽制球にひっかかるふりをする
宝石よりももっと素敵な君といる
ベストセラーの歌集を買いに京都まで
岡山県　千原　理恵

石橋を叩き出世に遠くいる
男には男のいくさ血の匂い
釣書に稼ぎの高は書いてない
鈴つけた猫はプライド持っている
尼崎市　森安　夢之助

二百海哩眺めて無口になる父の背
公園のレギュラーになった孫の守り
美人だが嘘をつくから困っている
電柱の天辺で寝ている奴凧
尼崎市　鈴木　良征

こんなよい話はないと親乗り気
どん底を知っているだけ強気です
お寺参りの好きな婆さん先に逝く
出逢いから縁の無かった人でした
大阪市　亀井　円女

内緒ばなしに孫の小さな手がぬくい
子育ての愛にも大事な匙加減
血の気のせいかいまだに悩む勇み足
白ならばどんな花でも愛せます
寝屋川市　太田　藍子

鯛止めてお肉にしたと若夫婦
家族減り小さくなったにらみ鯛
右腕が少し長めのテニス歴
今年こそあれもこれもと予定表
唐津市　相葉　あき

対角に座して若さを意識する
好きな人だけを呼び込む招き猫
ママゴトのお客も歳暮持って来る
家計簿は三段階に色分けし
西宮市　松本　一郎

七人の敵の一人が胸に棲む
祈ること子のこと孫のことばかり
世渡りに時々裏も使います
雪おろし三度目となる左遷の地
静岡市　沢田　きん

傘を着た月へあしたの旅仕度
春うらら口づけを待つ花の芯
燃え出した喧嘩は酒が火をつける
火種抱きしずかに女一人旅
堺市　桜沢　あか里

沿線の梅に誘われ万歩計
合格が一番気になる文珠さん
ひよどりが来る庭いつも平和です

飢えていた少年の日のハーモニカ
寝屋川市　内本さかえ

味噌汁のさめぬ近所に母が居る
つり皮に今日の疲れがぶら下り
子の便り届けば金の要る話
五本目が灰皿にある長ばなし
吹田市　栗谷春子

いらぬ湯がやたらに沸いて帰り待つ
テフテフと呼ばれた蝶は菜の花に
とっくりが空になってもまだ無口
珈琲店ぐらい優雅にすわりたい
守口市　結城君子

吟行の話しっかり足が聞き
マイケルジャクソンどこがいいのか観ています
第一志望音大と孫に驚かされ
客のよに「失礼します」と孫帰り
広島県　森川抜智

いつ死んでもよいとて死ぬ気さらに無し
四国へは船で行きたい時もある
真っすぐに歩けないので酔うている
鶴と亀とても知らずに生きている
尼崎市　山田保蔵

松葉ガニ静かに財布のぞいてる
気にするな水を飲んでも肥えますよ
まず一杯深い話はあとにする

招待で酒を飲むのも芸のうち
滋賀県　安田志津

寄り添うて春のかたらい福寿草
改造の木の香と福寿草で初春
痛む膝なだめすかせて今日の義理
保障のない明日へ意固地にみがまえる
静岡市　安本孝平

わが影を置いて見ている郷の地図
忘れたいこと多くあり膝を抱く
内職の妻に茶を出す気の配り
嬉しい日妻は猫にも話しかけ
河内長野市　大西文次

離婚する条件だけは揃ってる
目の奥で聞き分けている聴診器
お金にはならぬ肩書寄せ集め
神様に断りもせず離婚する
大阪市　島路太郎

うすうすとみどりが走る七日粥
婚約を告げに来る子と屠蘇祝う
病室に一人残って松の内
初夢にポケットベルが鳴りつづけ
旭川市　朝倉大柏

職安の職と大志が噛み合わず
ブーメラン戻って来ると信じこみ
悟ったか呆けたのかもう逆らわず

一目惚れして条件をみんな消し　熊本県　高野宵草

母さんが女になってダンスする
窓みんな開けて眺めてみる新居
吊り皮へ足が弱ったなと思い
大学を出した我が子に叱られる　今治市　渡邊伊津志

色の無い風が来て舞う風車
帰り道鯉の仕草を見て飽かず
ビー玉の音で昔を飲むラムネ
糸垂らす蜘蛛に対話が途切れたり　尼崎市　吉永伊三郎

一坪の土からもらう四季の詩
又一人同期の桜星空に
一本の白髪を抜いてほしい妻
猫よりは役に立ったと褒められる　尼崎市　的場十四郎

神さまの温みに近い母の背な
ほほ笑みがあるから背中向けられぬ
朝市の空気うごかす手のさばき
勝鬨を揚げてダルマに目を入れる　尼崎市　尾宮弘治

終の人去って鍵する菊花展
喪服着る度に幸せかみしめる
ゴム長と深さを競う故郷の雪

番犬が老いて眠りが深くなる　尼崎市　木下義嗣

宝石箱妻の若さがまだ残り
煩悩をしばし忘れる夜の月
無人駅母が迎えに来てくれた
ほろ酔うて一つおぼえの唄が出る　尼崎市　明壁敏之

乙姫がくれる箱なら貰います
ごみ箱が何時も何かを言いたそう
クリスマス妻と踊ったこともある
記念写真きまって何時も隅に居る　熊本市　北川一進

開閉も自由彼氏に渡す鍵
自信あるのがマイク離さない
残りもの包んで持たす子沢山
二人分史跡見て来る一人旅　豊中市　三宅つえ子

金屏風龍の長さを折りたたむ
手を引いた方もよろける老夫婦
くじ引きに強い男を借りて行く
外に立つ影に近付く車椅子　高石市　宮田純一

かかあ天下夫としてのもの申す
ストーブへ落ちるとこまできた話
結果論その過程が長すぎる

菜の花がきれいローカル線の旅　和歌山市　田中輝子

冗談言えるようになったら恋をしよう
励ました積りそれきり沙汰がない
暇にあかして推理小説書く女
釘一本打たれた油断悔いている　静岡市　杉山やす

いい事が何んにも無かった十二月
寂しさを語らず祖母の独り言
驚いた振りして席をうまく逃げ
警察と聞いて血圧上り出す　岡山県　松本元江

いい天気良いお話を持って来る
鬼ごっこ鬼が疲れて日が暮れる
青空のどこにかくれた黒い雲
憂さ晴らしするには酔えぬひとり酒　尼崎市　佐藤美代子

お婆さんが主役で放言まとめられ
ファッションを楽しむ四季がある国で
木馬から降す思案で夕暮れる
正座して日差し伸びてる影がある　熊本市　鶴田謹爾

噫呼運命(さだめ)名優の死悲痛なり
ヒヨの群れのどかに庭木で羽づくろい
週刊誌やや売れすぎる文化国　尼崎市　中澤向西

煩悩を捨てた良寛手毬つく
箱入りの娘にしておく姫だるま
元旦に鳩二羽下りた神楽坂　京都市　小林英子

美しい文字に溢れる淡い思慕
さりげなく祝辞を暗記するロビー
愛少し残し余白へ滲ませる　和歌山市　田中みね

胸の内明かすに程好いおぼろ月
心機一転トレードマークの髭を剃る
和解して寄り添う肩にぼたん雪　寝屋川市　宮崎菜月

受験です遠慮して下さい風の神
指と指巧みに商談まとめけり
ヒステリー玉溜めております喉仏　鳥取県　山根八重

かあさんの音痴が茶の間暖める
おはじきに少女の彩を置いたまま
四季に咲く花をたずねて旅に出る　出雲市　金森知恵子

しがらみは所詮断てない人の旅
学歴はともかく知恵の輪持っている
傷口をふさいでくれぬ冬の風　藤井寺市　菊地繁男

一泊の旅でも嬉し紙テープ
献立のテレビ尻目に目刺し焼く
手配書の髭に似るから剃り落とす
和歌山市　山口　三千子

矢の届く位置で足元たしかめる
翔びすぎて着地する場所見失い
遊ばせておこういつかは飽きるだろう
大洲市　西山　えつ美

ひこばえに穂がついたらと思う欲
卓上に満ちたりている漬物器
死ぬまでに第九を歌うチャンスまつ
十和田市　阿部　進

庭付きの家持て余す老夫婦
結論を急ぐ会議が縺れてる
寝たきりが憎まれ口をたたいてる
鳥取県　太田　幸枝

雪解けに浮いた噂と軽い靴
水が欲しくてシクラメンうなだれる
賀状来る郵便受は磨いたぞ
川西市　野村　静雄

定年の友ジャンパーでやってくる
だんだんに歳末らしくなって暮れ
元気です家内はもっと元気です
岡山県　後安　ふさえ

追信になって本音を覗かせる

玄関のベルが電話の邪魔をする
太陽の客に座敷を開けはなし
佐賀市　江口　万亀子

お多福のような魅力が嫁にある
嬉しい日不思議と涙こみあげる
誕生石がダイヤモンドでない人も
佐賀市　古川　一徳

大胆な意見を容れて危機脱す
正論でくる妻世間狭くする
二日酔い妻から軽い刑に会う
京都市　森川　春子

神楽待つ渡り廊下がようひえる
年玉を用意して待つ病む私
今年こそ白紙なくそう日記帖
八尾市　椎尾　公子

家計簿を中に明日を生き抜こう
友だちは働きすぎでつまらない
愛犬のつぶらなまなこに見透かされ
伊丹市　小熊　江美

見送りは電柱までと決めてある
待ちぼうけ足に枯葉が舞ってくる
娘と住んでうるさいながら平和です
静岡市　西村　千代

夫逝きてこんなに長い夜と知る
へそくりをときどき眺め楽しそう

うたた寝が上手でいい事聞いている　倉敷市　田辺炎六

退院が決まれば名残惜しくなり
退院の背中うらやむ目が刺さり
人を皆信じて罠を気にしない　桜井市　前山美恵子

涙全開明日は鬼の面を買う
真剣に言うので嘘にのってみる
ふとマッチすって少女の夢を追う　岡山県　伏見すみれ

母子手帳とっても嬉しいマタニティー
飾り気のない母さんの束ね髪
人形を部屋中飾って嫁きおくれ　泉南市　坂根流水

息災を知らせるごとく賀状くる
古戦場雑木林と草の原
余呉の湖天女の悲恋風伝う　愛媛県　八塚三五島

もう二度と逢わぬふたりの交差点
割勘と決めて負担のない財布
遠方の客が一番早く来る　高槻市　芦田静江

本番をすませ年賀の筆なじむ
芸生きて柿の木坂の寒椿
地を蹴って昇りそこねた青い竜　岡山県　福原悦子

義兄の急死について（三句）

小春日に亡兄の柩は雲渡る
通夜の席亡兄の追憶まだつきぬ
冬の家さびしい音する寒椿　兵庫県　森脇和子

例えばの話が好きで廻り道
セーターの胸にふくらみ欲しい春
病名を伏せる芝居に疲れ出す　鳥取県　津村八重子

国なまりやさしく舌にころんでる
食いちがう話ビールの泡も消え
コットンコトン庭の水車も春うたう　鳥取県　黒田くに子

片言の孫からあかい灯を点す
再スタートする日なの花咲いてきた
挫折した日から靴ひもギュッと締め　静岡市　青柳金吾

そそっかしい妻で茶碗がよく替る
グーチョキパー天敵が居る平和
春一番吹いて耳鼻科が混んで来る　佐賀市　石田源吾

被害者に他人が知恵をつけに来る
挟まれて辛い中間管理職
しがらみに押しつぶされた少女歌手

冬眠のカエル善人かも知れぬ　鳥取県　乾　隆風

ふところのメニューはうどんだけとする
そばかすの女が譲ってくれた席　竹原市　古田　比呂子

交際費これも人世の潤滑油
皮肉めき寝つきのよさをほめられる
子の作文母を少しあわてさせ　和歌山県　森　三枝子

三ヶ日内孫外孫入れかわり
ふとん干す日向を猫も知っている
受け流すことも覚えてみかんむく　橿原市　西本保夫

さわやかな笑顔の朝の陽が高い
つつましい生活をほほ笑ましく思う
猫だけが留守と知ってる日向ぼこ　静岡市　中川みつ

子育てを知らぬ乳房がまんまるい
叱られてみたくて時々嘘を言う
化粧品値切らず中流顔でいる　寝屋川市　井上すみれ

伝言板何度も読んで友を待つ
川柳のネタを貰った伝言板
玄関のチャイムを押してちびた靴　岸和田市　三輪通彦

二匹目のどじょうとならずＮＴＴ
お隣と一軒おいてうまが合い
大学で予備校の疲れとり戻し　鳥取県　鈴木芙美

半額セール待って初春には春の服
シクラメン来年咲かす本を買い
焦点を息子一言突いて去に　青森県　波ただお

年越しを一家揃って撮る写真
福袋買って福を持ち帰る
降る雪に灯台幻想的になる　高松市　竹川折荷

杖納め無縁塚にも手を合せ
名刺見て急に言葉を柔らげる
諦めた涙を路地で拭いてやり　徳島市　宮武まつ女

みえぬ炎を抱いて神さま仏さま
もう会えぬ別れテープが揺れ残り
年金の暮らしに過ぎる夢を買う　米子市　大田みさと

ひとり旅ホテルのロビーが冷た過ぎ
お茶だけが楽しみという老母卒寿
口車避けて自分を守り抜き　岡山県　池田半仙

余るほど今年も貰うカレンダー

年玉と孫の背丈がアップする
長の字が付けば定年来てしまい
久留米市　中垣米之

風邪の神今年も律気に御来訪
一本のタバコに朝を整える
なんやかや言ってもやはり初詣
静岡市　三浦つね

ただ無事を祈る許りの初参り
酒飲んで自分の靴がわかる足
酒の酔い秘密小出しに喋り出し
米子市　服部朗子

五十音どんどん伸びる孫の知恵
何となく古巣尋ねて見たくなる
車窓から墨絵と烟る故郷です
山口県　高崎雀声

呼ぶ雲に凧は一気に風に乗り
屋台にて上司の悪口言わす酒
庭園に琴の音日本の晴れ姿
青森県　福士トキ

便箋にすまぬみみずを這わせてる
チャルメラを耳に残して闇に消え
炊飯も芸の内なり身を助く
新潟県　高野不二

サザエさん読めば銀行もう呼ばれ
社長社長と呼ばれて社長顔になり
貰う方が先に新米食っている
鳥取県　乾喜与志

卒業式にあっぱれな送辞など
四つの島をつなぐレールが光ってる
豊漁のいわし晩酌盛り上げる
鳥取県　田村きみ子

うるわしき顔で湯の宿後にする
ささやかな願い出雲の神へする
春日向ふとん干そうか田に出よか
鳥取県　西川和子

狸寝をする風向きと違います
ライバルの店にはニュー器具が入った
フィアンセは先に知ってたスケジュール
奈良市　米田恭昌

理由(わけ)ありで左遷という名の島流し
僕の書斎は車にて御座候
デザートのようとりどりの薬出し
兵庫県　奥野テル

迷わずに決めたプランに雨予報
聞き上手すべて楽しい風として
百八つ喪の身静かに眼鏡拭く
島根県　喜島ノブ

よいこらしょ一荷に背負う句が重い
金恋し空の財布が夜泣きする
私には姑にもらった知恵がある

それからが身近寄りそう凡夫婦　米子市　新　正子
見るだけの菩薩さまより妻が好き
千の手の慈愛はずれて天の邪鬼　大阪市　川原　章久
さりげなく姑のおむつを替える嫁
山の湯で迎えた夢の寝正月
春の絵馬入試地獄の捨て処　奈良県　横井　都姫子
顔洗うまだまだまだと顔洗う
父の忌を節目大人になっていく
履物を揃え浮浪者横たわり　和歌山市　森　茜
豪快に飲んで花屋で立ち止まり
保温鍋ゴキブリ鎮座ましまする
首へ鈴つけたい人のしのび足　岡山県　清水　悠貴女
切った胃のいのち乞いする欠け茶碗
大木に伸びよと根っこ意地を張り
美しい嘘を盛ってるいちご皿　島根県　加本　義良
中流の意識で歩く朝の道
寒月に心の底を見透かされ
無防備な心安らぐ生欠伸　藤井寺市　楠　昭子
見合席ひげのまんまが気に入られ
ひげそりのリズムにパンが焼き上がり
やっと笑顔月日が薬になりました　岡山県　中嶋　千恵子
編棒に孫の笑顔が踊ってる
手鏡が六十路の小皺喋り出し
瀬戸の海夢のかけ橋列車走る　弘前市　小寺　ギホウ
亡母の十三回忌に喪服買う
深追いをし過ぎてバラのトゲを知る
開店で入った時から馴染み客　米子市　門脇　晶子
菜の花の種袋から声がする
戸袋に遠い昔がおいてある
手袋をはずしてからはうちとけた　鳥取県　久野　野草
つつがなき一日夕餉の笑い声
寝化粧をしたにそっぽをむいている
家訓とは決めていないが守り抜く　大阪市　桝本　蕗児
花の香におんな不倫をふとおもう
人間のエゴそのままの千社札
会長という飾りですそれもよし　羽曳野市　麻野　幽玄
白寿への一歩卒寿の新春の宴（義母九十歳の新春）

すれ違う男が甘い香を残し
老いの部屋能面一つで引締める
神戸市　高吉恭子

お見舞いの花おぼろなり眼病棟
看護婦の声が見えますみな美人
同じ事してもほめる人くさす人
田辺市　染道佳明

帰りましょ喜劇の幕は降りました
よく見ればこけしにもある手足かな
重吉の舞台を一度観たかった
和歌山県　田中隆積

教え子と共に前進出来る幸
今年こそ良い事あれと神だのみ
酒煙草止めて茶だけ飲んでいる
和歌山市　丸岩晏

幼児の評が的射るピカソの絵
ちょっとした風邪と悲しい嘘をつき
高槻市　津田スミ子

洗濯ものが金縛りにあう冬の朝
待ちわびた春に別れが待っていた
大阪市　今西静子

恋を得てうれしくかさむ通信費
冬の日の油虫なら叩けます
島根県　小田川智重子

方言がぽとりと落ちた同窓会

停年へ椅子とりゲームがまだ続く
唐津市　浜本治幸

子宝に未だ恵まれず犬と住む
自分史を書いて晦日を締め括る
出雲市　高橋きよし

宅急便今日も届いた蜜柑箱
希望校パスして威勢いい電話
岡山県　平田たけよ

掃除機に愚痴を吸わせて今日を閉じ
久し振り話がつきぬ雪しきり
新発田市　上鈴木春枝

入学へ机の置き場確保され
回覧を持って隣へ行ったきり
静岡市　丹羽定次

おしゃべりが敵に回ると手強いぞ
新聞のニュース飛行機よく落ちる
豊中市　小林一夫

恋文へ鉛筆の芯折れやすし
飼猫を抱いて淋しいことを言う
岡山県　富坂志重

幸せを茶碗の音に感じ取る
前客の土産を後客食べて去に
岡山県　牧野秀香

落ち着かぬ乾いたニュースで年が暮れ
若菜摘み暖冬異変が手に伝う

吹田市　西岡　豊
レパートリー一つふやして弾んでる

唐津市　入江　喜久夫
念のため証の人をたてて飲む

枚方市　森本　節子
キッチンで妻のハミング浮々と

静岡市　浅子　まつゑ
単身で赴任の朝の冬時雨

流山市　神田　治
味があると下手な作品褒められる

唐津市　野田　旭恒
向う岸つけばいい事ありそうな

岡山県　杉本　伊久栄
年の暮貸した借りたは昔ごと

神戸市　木村　貴代子
どん底に落ちて味方に妻がいる

大阪市　堀口　欣一
お茶漬を食べて帰るというハシゴ

岡山県　後安　江山
酒飲みに日記が書ける訳がない

黒石市　相馬　英三
世話をする幹事が先にダウンする

岡山県　土居　ひでの
世話役と共に飛びこむ奉賀帳

八尾市　向井　しづ子
初春の空を我が世と竜のタコ

唐津市　福島　紀一
裏表無いが地声が大きすぎ

島根県　小田川　昭子
夕立ちのようなあの子の泣きっぷり

富田林市　加藤　ミツエ
袋菓子かかえて母を待つ夕べ

晴れ渡りただ晴れわたりけさの春
散髪はいつもここです新世界

障子張りガラスも拭いて待つゆとり
たとう紙を開いて年始の帯を〆め

二十年過ぎて娘が狼に
子を思う母のおにぎり角がない

剪定という名で軽い花の首
孫去んで又むっつりと差し向かい

東京で手術の妹見舞う初春
会えてすぐ別れて初春をたしかめる

年賀状孫も一人の顔をもち
一陽来福去年の垢は洗い捨て

いい時世つばめ機上の客となる
正月がすめば多忙に戻る主婦

青森県　永沢　招人
よくもまあ物忘れする辞書の垢

善玉と見られ番犬の生欠伸
七福神珍種顔の宝舟

食通はグルメ求めて旅が好き　大阪市　平井露芳

お灯明上げても当らぬジャンボくじ　故宇野重吉氏

天国へ行っても舞台務める気　大阪狭山市　桜井荘次

新しい靴に食われた足の豆

連休の疲れを溜めた重い靴　愛媛県　石手武

ましな嘘つけと許して呉れたミス

引き分けにしとく職場の将棋盤　泉佐野市　真崎浪速子

減産といういらいらの田を植える

お妃が薄々洩れる竹の園　高槻市　孝久彰一

我慢してるのに相性よいと思ってる

販売機欲しい煙草がないところ　島根県　菅田かつ子

目覚しを心地よく聞く日曜日

百円でどんなに鈴を振ったとて　兵庫県　西脇冨美

体重計横を向いてて松の内

遅く来た賀状海外旅行とか　鳥取県　木下芙葉

懐に師走の風が通り抜け

年頭に抱負豊かに出雲弁　奈良県　田中紀美代

七人の敵を追い越す靴みがく

初夢は竜の背にのり天を舞う　鳥取県　伊吹富恵

合点した割に寄附金少なすぎ

それからを次々手繰る聞き上手　静岡市　柳沢たま

乳呑み子は母の乳房を我がものに

お隣の猫は鼠を捕ってくれ　和歌山市　根木実

百グラムの肉と二つの猪口の夜

向い風でも彩があるから背を向けぬ　大和高田市　寺脇三倉

おでん屋で諭吉一枚逃げられる

また負けたらしい男が怒鳴ってる　静岡市　久保きぬ

寡婦になり色眼鏡見る癖がつき

惜しまれて逝くのが花と考える　島根県　松本聖子

正月はやはりお客よ来て欲しい

寒空へ蹴った小石の音乾き　和歌山県　山田久子

嗅いで買う花の香りは三百円

短くも炎えて祭りは風となる

大学の門肩寄せて夫婦とか　八尾市　鷲見　章

静観の煙草を一人会議室　大阪市　松永すすむ

犬でさえ島から島へ泳ぐ恋
横顔がずらり並んで縄のれん　静岡市　谷紀代志

一声が欲しいと嫁に煽てられ
年越したあんころ餅を碁敵に　寝屋川市　豊福路子

足早な冬陽待ってね庭いじり
銀杏の葉ははじめっから黄かった　鳥取市　西村黙光

下心あって乗ります口車
口車のブレーキ利かぬ飲み屋街　岡山県　江口有一朗

古里

炊飯器村のかまどの烟消す
村民の半ばは団地の人で占め　和歌山県　岩崎瑞穂

懸命に生きる老爺のスケジュール
火の用心遠く凍てつく暮の町　静岡市　大石たき

舟の旅帰る日数え波枕
たくあんの皺年寄りの肌に似る　京都市　山脇正之

金婚を過ぎてドケチの綱ゆるむ
立つのが億劫で同じドラマを見てしまう　吹田市　山田里子

一弦の琴に綻ぶ須磨の梅
皇室のカレンダーあり雪の下　鳥取県　西浦小鹿

雑音も煩わしさも雪の下
ばあちゃんが作るからこそジゲの味　川西市　田中喜俊

地上げ屋に睨まれそうな我が屋敷
香水の土産嬉しい老女でも　東大阪市　大平太一郎

円高で痛し痒しの年迎え
祖母からの七草粥を母も炊く　八戸市　島田昭治

子が呉れた諭吉で本を買ってくる
有るところに金が集まる世のしくみ　鳥取市　山田草人

情報が切れて霧笛を鳴らしてる
致死量はとっくに超えたアルコール　枚方市　中山おさむ

敗者復活俺とお前の席がある
釣書をすかして見れば朱い色　大阪市　冨岡温子

テクニック投げたボールの抛物線
孫達も一役買って荷物特ち　八尾市　片上英一

赤提灯のら犬もふと立ち止まる
名前だけ刷った名刺に憧れる　呉市　岡田寿美礼

孫の声娘そっくりで騙された
腰痛み痛いと言える幸せを　島根県　今川三津江

初詣で一年分の願いごと
一羽なら絵になるカラス雪の原　島根県　児玉幸子

初詣でおみくじ結ぶ娘の晴着
暖冬にとまどう鳥も庭へくる　鳥取県　武田帆雀

仲人の足踏が無い今朝の雪
卵を積み上げるように婿を取る　奈良市　米田芳子

相性が良いと言われて早や五十路
年かいな漬物石がこたえます　青森県　木村喜峰

杵と臼知らずに食べる新人類
柚湯出て南瓜を食べて宮参り　島根県　岩田三和

夫婦しておなじテーマで越冬す
うまいねと舌がこたえる愛妻家　大和郡山市　渡部トキワ

どうも愚図足許に火で力み出す
夢の町浮ぶ湖面の蜃気楼　奈良市　井上大

日本語で日本人でないと言う
今度こそ本物らしい核べらし　豊中市　額田明吉

古稀迎えあと一段と深呼吸
除夜の鐘とわの平和へ願いこめ　尼崎市　新井朋子（中二）

◆ジュニアの部

中耳炎洞窟にいる冒険者
迷宮の音と遊んだ演奏家　枚方市　二宮摂子

髪さえも寒くて切れぬこの季節
わがままに雪は好きでも冬嫌い　尼崎市　新井晶子（小四）

世界中みんなが見てるお星さま
お母さんねてばかりいる時がある　枚方市　二宮正彦

お正月一番うれしいお年玉
お父さんよってる時しかねだれない

川柳点の先駆、大坂・堺の前句附

——瓦竹堂中村李坡点を中心として——

阿達義雄

(一) はじめに

江戸で川柳点の成立に大なる影響を与えたものに『誹諧武玉川』があり、川柳点に先行し、その先駆的な句風を見せている江戸の万句合に湖月撰『俳諧あづまからげ』がある。

しかし、江戸でこれ等の書の未だ刊行されていなかった寛保・延享期に出された上方の会所本(江戸の万句合に相応する)の中に、既に川柳点の多くの先蹤句が見られる。

右に上方の会所本と言ったが、その殆んどが泉州堺附近の点者の勝句集であって、京都系の点者の会所本は、むしろ例外となっている。また、これ等の句の中には江戸川柳の先蹤句の多く見られる会所本の点者として、堺の瓦竹堂中村李坡の名を挙げることができる。

瓦竹堂中村李坡は『俳諧大辞典』には全然見えず、今迄これについて紹介や研究も見られなかったが、昭和59年の『川柳塔』に、上方前句付集の雄編『明石人丸大明神三万句集』が発表されている。

泉州の会所本は、この頃の江戸万句合に如何なる影響を与えていたか、或はこれ等会所本に見られる上方句が柄井川柳によって、(彼がそれ等が上方句からの嵌句又は焼直しであったことを全く意識しなかったにせよ)、川柳点として採り入れられたのは何故であろうか。又、川柳点として採られた上方句は、上方の会所本に見られる句にしても、如何なる系統のものであったかなど、之について考究すべき種々の問題がある。

会所本に見られる点者名や興行地などから推定すると、寛保・延享期には堺の細字屋などを根拠として、京の前句附万句合の多くの点者に対抗して活躍した幾人かの泉州の点者群があり、瓦竹堂中村李坡がそれ等の中心人物であったように思われる。

なお、我々は京阪地方の前句附万句合(会所本)の句をみな同一視して、「上方句」と一括し勝ちであるが、京都系の句と堺・大阪系の句とではかなり異なっていて、川柳点の先駆となる可能性の多かったのは堺・大阪系の句であった。

本稿においては、これ等のことについて、考察してみたいと思う。

(二) 瓦竹堂李坡点に見る川柳点の先駆

寛保二年から延享四年にかけて、堺の瓦竹堂李坡点は、上方句において次第に支配的な地位を占め、それ自身において川柳点の先蹤句を孕みながらも、その周辺の上方句に川柳点の先駆となるような句を発生させていた。

この過程は、具体的な例句によって眺めることができる。

先ず、瓦竹堂李坡の最初の撰と考えられる『堺神明宮五千句集』に見られる——

手の隙ハ無イと丁稚が懐掌(ふところで)

(享保二年、李坡点)

右の句は「手の隙がないと丁稚がふところ手」と僅かに改められて、大阪板・晩鈴点の『柿本大明神五千句集』に採られているが、この晩鈴点の中の「我伊達に」「名物を買が」「手紙に八狸」「知る人に斗り」の四句も、また少しずつ改められて、江戸の川柳点に次のように採られている。

宝暦初年・大坂・晩鈴点
柿本大明神五千句集

↓（我伊達に）……川柳点・宝暦七・一一・五
↓（名　物　を）……川柳点・宝暦七・一二・五
↓（手紙には）……川柳点・「柳多留」五篇・36
↓（知る人に）……川柳点・明和五年礼印・4
……川柳点・「柳多留」六篇・六23

(1)手紙に八狸と書いて篭に鯉
（柿本大明神五千句集）
(2)手紙に八狸合には鯉をのせ
（川柳点・「柳多留」五篇36）

(1)知ル人に斗　子供は茶を運
（柿本大明神五千句集）
(2)知る人にばっかりしいる子のきうじ
〔川柳点・明和五・礼4
川柳点・柳多留六・23〕

〔注〕右の(2)の句は(1)の句の模倣句である。

即ち、李坡点を更に川柳点に近づけたのは宝暦初年の大阪の晩鈴点であって、寛保二年の李坡点は未だそのまま直接的に川柳点の先駆となる程のものではなかった。

然るに、翌寛保三年の『天満宮一万五千句集』になると、この中の「我尻は」の句が、後に川柳評万句合に採られているだけではなく、ずっと後に至って、『柳多留拾遺』にも採られた程である。

〔注〕「我伊達に」の句は、一旦、晩鈴点から、宝暦三年の『折句式大成』に取られ、宝暦七年に至って漸く川柳点に採られた。

右の各句を具体的に示すと次のようである。

(1)我伊達に下女が髪迄結てやり
（柿本大明神五千句集）
(2)身の伊達に下女が髪迄結て遣り
（川柳点・宝暦七・一一・五）

(1)名物を買が無筆の旅日記
（柿本大明神五千句集）
(2)名物を喰ウが無筆の道中記
（川柳点・宝暦七・一二・五）

寛保三年・李坡点
天満宮一万五千句

↓（旅籠代）
(1)我尻は）
(2)川柳点・宝暦一〇桜2
(3)『柳多留拾遺』九篇15
京一陽堂和汐点
『難波の花』（寛延三年）

(1)我尻ハいはず盥を小サがる
〔寛保三年・李坡点
天満宮一万五千句集〕
(2)我尻をいわずたらひをちいさがり
（川柳点・宝暦一〇桜2）
(3)わが尻ハいハずたらひをちいさがり
（柳多留拾遺九・15）
旅籠代直切た顔を汁でみせ
〔天満宮一万五千句集
一陽堂和汐撰『難波の花』〕

右の一陽堂和汐点の「旅籠代」の句は、川柳的な句として示しただけであるが、この一陽堂の選句の「親は売り他人は買ふてかはゆがる」の句が江戸の湖月評万句合（「俳諧あづまからげ」）に採られている程であるから、その点においては江戸万句合との交渉があった

ことになる。

『あづまからげ』(湖月点)が、川柳点直前の江戸万句合の中で、最も川柳点に似ていた先行文芸であったことについては、既に屢々述べたところである。

更に延享元年『家原文殊堂奉納五千句集』の中の李坡点の「心中と」の句は、兵庫の泉流点に採られると共に、江戸の湖月点にも取り込まれており、李坡点の「客の有る」の句は、川柳評万句合や『柳多留拾遺』の句の先蹤となっている。

○心中と身請の座敷二た間明
〔俳諧あづまからげ〕

◉客の有たび〳〵叱る九人前
〔家原文殊堂奉納五千句集
川柳点・宝暦一〇・智1
『柳多留拾遺』一〇篇26〕

互竹堂　李坡の会所本の代表的なものは、『明石人丸大明神三万句集』であって、その勝句九百二十一句（内、発句二〇句）を収めている。従って、本書によると、李坡点が多角度において江戸万句合に影響を与えていたことを端的に知ることができる。

それで、次に『明石人丸大明神三万句集』の李坡点を中心として、各方面との関係を考えてみよう。

左表、李坡点の模倣句

(1)又折も有フと腹を立テ残し
〔宝暦三年・折句式大成〕

また折りもあろうとはらを立て残し
〔川柳点・明和四・義7
泰月点・宝暦一二・一〇・一九
柳多留拾遺九篇18〕

(2)片乳房にぎるが欲の出来初
〔湖月点・あづまからげ〕

(3)吉日がここにも居るとこそぐられ
〔川柳点・宝暦九壬七・一五
〃　柳多留初篇20〕

延享元年　三評（一艸坡甲・李坡・可）
家原文殊堂奉納五千句集

↓〔心中と〕……兵庫・泉流点『有馬薬師奉納一万句集』（宝暦初年）

↓〔心中と〕……江戸・湖月点『俳諧あづまからげ』（宝暦五年）

↓〔客の有る〕…川柳点・宝暦一〇智1→『柳多留拾遺』一〇・26

右の各句を具体的に示してみると、

○心中と身請に明た二タ局
〔家原文殊堂奉納五千句集〕

○心中と身請とに明く二局
〔有馬薬師奉納一万句集〕

延享四年・大坂板
明石人丸大明神三万句集

(1)又折りもあらふと腹も立残し

(2)片乳ぶさにぎるが欲の初桜

(3)吉日が爰にも有ルとこそぐられ

(4)よい小紋着て紺屋迄引づられ

(4)よい小紋着て紺屋迄引づられ

〔川柳点・宝暦一一・智1〕
〔〃　柳多留初篇17〕

江戸にあって、『誹諧武玉川』の初篇が刊行されたのは、寛延三年であるから、右の李坡点は『誹諧武玉川』の出現以前の延享四年に既に存在し、後に直接又は間接的に川柳点の嵌句又は粉本にされたものと考えられる。

(三)　双峨点・一草点と江戸万句合

江戸万句合の先蹤となっている寛保・延享期の上方句は、右に示したものに止まらず、寛保三年の双峨撰『泉州岸和田蛸地蔵尊一万句集』を見ると、延享四年の江戸の収月点の「聟撰む」の句や、宝暦十三年の露丸点の「掛乞が」の句なども、実は双峨点であったことが知られる。すなわち、次の通りである。

聟ゑらむ間に雑兵の手に掛り
（延享四・四・二三、収月点）

◉聟撰む間に雑兵の手に掛り
（寛保三年、双峨点）

かけ乞が来れば和讃を長く引き
（宝暦一三・九・二五、露丸点）

◉掛乞が来れバ和讃を長う引
（寛保三年・双峨点）

尤も、右の双峨点（泉州岸和田地蔵尊一万句集）の句は、宝暦三年、大阪板の「折句式大成」の中に既に見えているものである。

又、『家原文殊堂奉納五千句集』の中の一艸点「長咄し」の句が、川柳評〔宝暦一二・仁5〕や『柳多留』初篇34の「長噺」の句の原句であったと考えられることについては、既に鈴木勝忠氏も指摘されていることである。

○長咄し鴉のとまる鑓の先
（『家原文殊堂五千句集』の一草点）

○長噺とんぼのとまる鑓の先
〔川柳点・宝暦一二・仁6〕
〔柳多留初篇・34〕

以上に検討してきた処を総括してみると、寛保・延享以降の上方の会所本に見られる江戸万句合の先蹤句、又は先蹤句と見做される句は、殆んどみな堺・大坂の会所本に偏在し特に之を寛保・延享期に限定してみると、李坡・双峨・一艸等の泉州の点者の選句に集中している事実に注目される。

おかめと小町

布施幸子

京都の千本釈迦堂の境内に、『おかめ塚』と『おかめ像』がある。

先日、その像の前で夫に写真をとってもらった。「うりふたつや」とからかわれたが私は結構、さだめしおかめさんの方で気をわるくしたに違いない。なかなかチャーミングな像だったから……。

おかめとは『お多福のこと。額が高く鼻低く頬のふくれたみっともない女』と辞書は悪口をいうが『広い額、こぢんまりした鼻、ふくよかな頬』と書き替えれば個性美となる。近頃は低鼻術、平面化粧法がはやっていると嬉しいことを聞くが、千本釈迦堂のおかめ像は生まれつきの個性を活かして愛らしく作られている。

本名を大報恩寺という千本釈迦堂は、一二二七年、今から七六〇年前に建てられた。応仁、文明の乱にも本堂だけは焼打ちをまぬがれ、上京大火にも焼けることなく、市内最古の遺構を誇っている。

その本堂が建ったときのエピソードとして

こんな伝えが残っている。

――大工総棟梁の長井高次が、うっかりして柱の一本を短く切りすぎてしまった。悩んでいると妻のおかめが、「ほかの柱もそれに合わせて切らはったらどうどす」と助け舟をだした。棟梁は助かったが、妻は「女の知恵で建てたとわかったら夫の恥」と苦にやみ、自殺してしまった。その死を悲しんでおかめ塚が立てられ、千本釈迦堂は大工さんたちの信心を集めるようになった。棟上げの御幣におかめの面をつける習わしもできて、招福おかめ、お多福信仰は広がっていった――

おかめそば、福笑い、おたふく豆、おたふくあめ、おたふくかぜなど、日常の暮らしと縁が深く、商家では小さな座ぶとんにすわり夜店ではひょっとこの面と並んで売られ「おたやんこけても鼻打たん」とからかわれても決して怒らず、いつもニコニコ笑っている。「おまえは御室の桜やなあ」と子供のころ父に言われ「そないキレイやろか」と喜んでいたら「わたしゃお多福、おむろのさくら、花（鼻）が低うても人が好く」という意味だと知ってがっかりした思い出がある。

御室の桜の木は低いので『お多福』に結びつけられたりもするが、『小町桜』とよばれる「しあわせ桜」もある。

小町紅、小町糸、小町灯篭、小町娘など、〝小町〟とつけば一級品、美しさの保証がつくのは小野小町が日本一の美女だったことによる。

だが、〝小町〟とは固有名詞でなく、平安時代の女官の職名だったともいわれるから、それなら不美人の小町さんもいたかもしれぬ。一方、女官でない小町美人もいて、それらにまつわる話がややこしく入り混り、さまざまの小町伝説が創作されたようだ。

京都山科の随心院は、小町の家だったと伝えられ、ラブレターを埋めた文塚や、埋めきれなかった恋文の残りでこしらえた文張り地蔵、深草少将の通い路などが残っている。（この道を通ると失恋するそうだから要注意）

また、左京の補陀落寺は、晩年の小町の家だったといわれ「小町寺」とよばれているがいや、そうでなくて小町は晩年を城陽市井手町に暮らしたのだ、という話も聞く。〝色も香もなつかしきかな蛙鳴く井手のわたりの山吹の花〟と詠んで、小町は井手の里を愛したという。

かと思えば、丹後の妙性寺に『見得院殿小野妙性大姉』の戒名や、辞世が残っているし、大阪にも小町晩年の遺跡があるし、調べてみると京大阪に限らず、全国各地に小町ゆかりの場所や墓があって、どれがほんものやら判断がむつかしい。

それほど伝説や遺跡の多いわりに、小町の美貌については曖昧模糊の感がある。おかめの顔については具体的な欠点をつらねる辞書も、小町については「非常な美人」とだけでどのように美しかったかの説明に欠けている。おかめの面はあちこちで見かけるが、小町の面は出回っていない。百人一首のカルタ絵の小町は、ヒキ目カギ鼻、下ブクレで、他の平安朝女流歌人と異なるところがないし、見方によれば不美人代表のおかめさんに近い顔立ちでもある。

が、ともかく小町は絶世の美女として知られ、晩年の薄幸が強調されるが、それを言うなら千本釈迦堂の、自殺したおかめさんの方が更に気の毒ではなかろうか。

同じことなら女は、やっぱり美女がトクだと思う。〝花のいろは移りにけりないたづらにわが身世にふるながめせしまに〟の歌にしても、作者が小町だからこその値打ちであって、仮に『サチコ作』とか『おかめ作』であれば、百人一首選考委員会はあっさりボツにしたに違いない。

愛染帖

橘高薫風選

肥満児が立てば座れる老夫婦　堺市　高橋千万子
ごね得の記事を凡人よみ返し
ゼロ一つ多くとっさに手を離す　大阪市　西森花村
心安う値切って金は持っていず
本年も先ず元旦の書き損じ　鳥取県　西浦小鹿
子の夢がはじけて飛んだ音を聞く
結論を早目に出すか酒呻る　熊本県　立道善太郎
幕切れに供えてもらう花を蒔く
花電車行く運転手お釈迦様　青森県　工藤甲吉
きさらぎの風鼻先が凍えかけ
大阪は河豚が美味いという便り　岡山県　土居耕花
妻の手がこんなに温い指角力
肩張れて猿に親しい眼で見られ　米子市　八木千代
神さまも冬と歩いていられよう
たぶん死ぬときも椿の木に夢中　富田林市　藤田泰子
潮時をいちばん知っているさくら
酒煙草止めて元気がありません　羽曳野市　吉川寿美
人生にいつ迄続くかくれんぼ
許せない理由があります花の刺　今治市　月原宵明
ひたすらに祈る姿の冬木立
貧乏で短気でとてもうどん好き　鳥取県　江原とみお
竜門の滝を見あげて五十年
妻の脚潮岬でもんでやる　和歌山市　牛尾緑良
新しい年に真白な鶴を折る
柏手を打って私をさらけ出す　米子市　青戸田鶴
すてようと決めた造花のいのちごい
咲いて散る長い短い物語り　鳥取県　新家完司
笑うしかない先程の地震かな　島根県　堀江芳子
見つめれば相づちも打つ庭の石　島根県　堀江正朗
いい音がなかなか出ないハタキかけ　西宮市　奥田みつ子
十二月月日に壁があるような　高石市　浅野房子
往年の美人にカメラきびしすぎ　倉吉市　野中御前
ジェラシーで磨く包丁よくきれる　寝屋川市　堀江光子
故郷の水を味わう手で掬う　岸和田市　古野ひで
元日へ真白な心祝箸　大阪市　塩田一郎
生れつき弱酸性で生きてます　島根県　板垣夢酔
マニキュアのおんな上げ底だと思う　和歌山市　山口三千子
真中を歩く勇気はまだもてず　羽曳野市　田中隆二
転ぶたび片目大きくなるダルマ　鳥取県　松下たつみ
灰色の目に証人は無理だろう　和歌山市　神平狂虎
僕の心に雪を降らせる瞳に出合う　寝屋川市　岸野あやめ
思い出の品も燃えないゴミに出し　唐津市　仁部四郎
今後ともよろしく妻が待ってます　守口市　森川まさお
初詣で大きな欠伸してしまう　川西市　野村静雄
野次馬になって初日の出を拝む　和歌山市　古久保和子
福笑い自分の顔が出来上り　岡山県　松本元江
とてもきれいな空うれしくて花摘みに　和歌山市　西山幸
目の高さ変えても見える十字架か　鳥取県　土橋蛍

ひとひらの紅き賀状の一句かな　町田市　竹内　紫錆

よだれ掛けが要るネクタイを嫁が呉れ　大阪市　川原　章久

浄土ではこんな顔して日向ぼこ　米子市　沢田　千春

図書館の空は青くてさわやかだ　豊中市　田中　正坊

孫に似たお顔もあった臼杵仏　和泉市　岡井　やすお

何になる気はないけれどまだ学ぶ　名古屋市　藤井　高子

一切れの水蜜桃で溶ける鬱病　広島県　田村　新造

悔い多し臥龍のままに六十路越え　広島市　流　奈美子

はすかいに読めば自分史は喜劇　伊丹市　樫谷　寿馬

点滴も聖歌のリズムクリスマス　和歌山市　後藤　正子

暮れいろに仄かに残る柚子の香よ　岡山県　矢内　寿恵子

木守柿小さな義理をふと思う　宝塚市　丸山　よし津

真向いに男女不明の人座る　田辺市　染道　佳明

油さしさし夫婦のメリーゴーランド　守口市　結城　君子

いつわりの花弁悲しいまで赤い　東大阪市　大平　太一郎

昼と夜使い分けする顔で生き　弘前市　真喜内　實

寒の雨屋台で妻に恋をする　島根県　小砂　白汀

さて誰もあてにならない冬の蠅　和歌山市　木本　朱夏

なんとなく波長が合うてひとの妻　鳥取県　乾　隆風

永眠の寝床はどこに敷くだろう　和歌山市　桜井　千秀

やっとこさのしどろもどろが受けたらし　竹原市　信本　博子

真実を求め嵐の中にいる　羽咋市　三宅　ろ亭

今日もまた三角形の他の二辺　奈良市　米田　恭昌

祝膳亡母に代って孫が居り　寝屋川市　宮尾　あいき

めでたやな嫁もらう孫嫁ぐ孫　岡山県　小林　妻子

もつれてる女の糸を解く手段　米子市　門脇　晶子

木琴をたたいて通る雨の道　和歌山市　山田　高夫

はみ出して自由なとこで息をする　堺市　河内　月子

息子が三人姑の勉強など少し　平田市　久家　代仕男

如意棒を忘れ弱者の群に居る　唐津市　浜本　治幸

夢の中何時も一人で居る孤独　高槻市　辻　白渓子

実家から野菜が自転車で届く　奈良市　井上　大

ひとときの善人になる助け合い　米子市　服部　朗子

現役の風が漂う本棚だ　奈良市　岡田　きぬえ

この硯この筆今年も書初めを　岡山県　山本　玉恵

落ち易い首をつないだのは情　唐津市　浜本　ちよ

青空の彼方に戦さまだ絶えず　和歌山市　田中　隆積

日常の暮しの大事身にしみる　大阪市　板東　倫子

正月の門へ宗教説きに来る　茨木市　堀　良江

寒に入りきっちり寒くなりました　大阪市　吉川　美津枝

一ぱいのコーヒーで獲得する孤独　今治市　矢野　佳雲

じいさんと孫が言うなら戴ける　高知県　小澤　幸泉

吾子二歳自分の数をかぞえだす　大阪市　桝本　蕗児

旅で聞く大阪弁のあたたかさ　和歌山市　青枝　鉄治

赴任地の水になじんだ電話ぶり　唐津市　福島　紀一

老いの下駄鼻緒はゆるくゆるく履き　和歌山県　岩崎　瑞穂

孫の手で背中掻いてる老い佗し

西宮市　松本一郎
もう時効そんな話もクラス会

鳥取県　奥谷弘朗
争うて奪った椅子がまだきしむ

河内長野市　植村喜代
ボーナスへ買うことばかり言い並べ

米子市　川上より子
赤いばら植えぬと決めた日のなごみ

吹田市　栗谷春子
赤裸々に書いたばかりに風邪をひく

西宮市　西口いわゑ
歳時記を先んじ売れ行く花よ

藤井寺市　福元みのる
御用始め用は顔見せ衣裳見せ

米子市　林荒介
八雲立つむかしがあるぞ十七字

兵庫県　脇田米朝
人間の吐息は森が浄化する

芦屋市　竹中綾珠
まだ命あると認めて手術され

羽曳野市　中村優
せせらぎを譜面に載せる春の水

静岡市　永倉太郎
愛の鞭その目はやさしい母でない

寝屋川市　内本さかえ
うさぎ追いしかの山宅地造成中

寝屋川市　江口度
島と島串刺しにして本四橋

海南市　三宅保
弔客に知らない客が多すぎる

静岡市　谷紀代志

初孫を家族が囲み初詣で

吹田市　西岡豊
舞衣装鏡に問うて友に問う

大阪市　亀井円女
今日の怒りを鎮めてくれた空の青

兵庫県　北川とみ子
あと戻り出来ぬ歩幅が広すぎる

今治市　越智一水
たたかわぬ「連合」すぐに抱きこまれ

大阪市　井上白峰
車間距離守れば女逃げて行く

米子市　新正子
利かん気のやさしいように耳そうじ

岡山県　千原理恵
逆境にいて情炎の灯を消さず

岡山市　川端柳子
冬木立ちらりほらりと幼き日

和歌山市　堀端三男
時価という握りを食ったことが無い

堺市　桜沢あか里
初生けや晴着と花の競い合い

有田市　松井かなめ
政宗の衣ほころぶ菊人形

尼崎市　春城年代
一七日古い写真の箱もあけ

島根県　榊原秀子
とんでもない話をふっとしたくなる

笠岡市　松本忠三
適当に処分しますとそれっきり

鳥取県　さえきやえ
孫の賀状根性のある文字でくる

高知県　曽我部裕
後手後手の人生だったなと笑う

静岡市　渥美弧秀
炎えさかるキャンプ車座歌も揺れ

岡山県　灰原泰子
修羅いくつ女に重い博多帯

島根県　松本文子
花になり貝になり男と女

青森県　相馬英三
うちの嫁二年半ばで天下盗り

熊本県　高野宵草
旅行する暇が出来たら金がない

寝屋川市　福富路子
ふるさとに翁と会いし菊の道

＊

投句先　〒560　豊中市中桜塚三丁目13―15
橘高薫風宛（ハガキに3句）

ＮＨＫ川柳

ＮＨＫ〝ふれあいラジオセンター〟の川柳選評は、センバツ高校野球のため、とりやめになりました。

女性コーナー

黄香の花

八木千代選

エレベーターの真ん中に一人立つ　茨木　堀　良江

今が冬のさ中だからでしょうか。自分とそのまわりの景色をここまで見て書いて下さると、寂の空間に私も吸いこまれるのです。考えてみればこの世の定まらぬ浮き沈み。せめて昇降機のまん中にしっかり踏ん張らねばと、わが身の過ごしかたにも思い及ぶのです。

嘘をつかねば明日がこない　舟を漕ぐ　寝屋川　稲葉　冬葉

嘘のつけない人が嘘をつかねばと思うまでには葛藤もあったに違いないし、まっすぐに明日を見ようとする念にも打たれます。いつかその嘘が真実にかわって明るく舟が進み出す日を私も待ちます。

ひとすじの道なれどなれど歯痒し　和歌山　森　茜

今日もまた爪切っている　愚かしく　岡山　清水悠貴女

ことことと煮れば私も変わるかも　西宮　奥田みつ子

鍵穴の位置に自分を置いてみる　大阪　鍛原　千里

捕えられそう　自動改札すり抜ける　大阪　島村美津子

働いてはたらいて春の旅支度　八尾　宮西　弥生

一灯を頼りに夢を買いいそぐ　倉敷　小野　克枝

肩パットわたしの首はどこへ行った　大阪　西出　楓楽

木偶ゆえに飾れば飾るほど哀し　鳥取　さえきやえ

おんな唄うたいつづける面を打つ　和歌山　西山　幸

ひいらぎの花は小さくて見逃がされ　富田林　片岡智恵子

うかつにも曇りガラスが透けていた　米子　菅井とも子

赤い糸の絆だなんて笑止だね　高槻　河瀬　芳子

春になったらと　今　北国は無口　藤井寺　高田美代子

この先は何処へ行きます冬の蔦　倉吉　淡路ゆり子

山が迫りわたしの影を抱いてやる　和歌山　後藤　正子

平凡な竜でよかった老いてみて　大阪　神夏磯典子

手鏡の裏には神のはかりごと　西宮　林　はつ絵

紙芝居の裏のからくり見てしまう　米子　門脇　晶子

それは谷　わたしを試す深い谷　和歌山　山川　克子

街路樹に恋をしたっていいじゃないの　米子　川上より子

母さんの娘のころを話しましょ　堺　河内　月子

一＋一が三になる日を待ちかねる　寝屋川　平松かすみ

木綿糸しっかり継ぎをいたします　田辺　染道　佳明

母の影踏みふみ走る寒の月　岡山　土居ひでの

お月様いびつな笑顔しかくれぬ　島根　松本　文子

一生涯わたしを吊るす不安感　徳島　宮武まつ女

カレンダー五枚吊るしているいくさ　大阪　津守　柳伸

使い馴れた庖丁なのにそむかれる　大阪　堀　いくの

壁の中　夫は八十路の絵をえがく　米子　石垣　花子

九官鳥　自我に目醒めてから無口　富田林　藤田　泰子

みそ汁ぐらい作れる夫にしておこう　大阪　鈴木　節子

風景の中に咲いてるさぎ草だ　米子　金山　夕子

渋滞の中で望みをまだ捨てず　吹田　井上　照子

良い子だと言われ泣くにも泣けずいる　和歌山　木本　朱夏

面壁九年　慈悲のこころがまだ解けぬ　久留米　古寺坂たか子
熱いものにふれるよろこび今もなお　米子　青戸　田鶴
コンパスの丸を疑う春の飢え　八尾　高杉　千歩
許す気にならぬこころで歳を越す　尼崎　春城　年代
終止符を打つまで花は絶やされぬ　米子　沢田　千春
ふるい女で罰をすなおに受けている　松原　佐藤　藤子
歩は固く還暦からの返し針　名古屋　藤井　高子
整理整頓　造花ぜんぶを捨てましょう　和歌山　田中　輝子
ひとつふたつのジョークは袖にかくし持つ　米子　政岡日枝子
気がつけばせかせか歩く群の中　大阪　田中　弘子
止まってる一こまへ的しぼり切る　和歌山　桜井　千秀
雪もよい小豆粥でも炊きましょう　堺　桜沢あか里
水鳥よもうすぐ春が来るからね　鳥取　田村きみ子
剪定にあしたのいのち試される　貝塚　池田寿美子
絵にならぬ女となって年嵩む　堺　高橋千万子
道連れの鈴は地蔵よ夜に鳴る　米子　林　瑞枝
告白の深さは肩のあたり迄　羽曳野　吉川　寿美
ダイヤルがよそよそしくてまだ逢えぬ　和歌山　福本　英子
簡単に母はおむつを手で洗う　米子　新　正子
姑という字姑になったら嫌になり　青森　福士　トキ
風向きがどう変ろうと決めた道　大阪　上江洌恵子
夢ゆめ夢　はずむ弥生のポストたち　佐賀　寺中三枝子
大時計小時計　春を呼ぶリズム　西宮　秋元　てる
寒月の気品おもわず掌を合わす　和歌山　内芝登志代
長寿梅の白さ　わたしにくださいな　島根　堀江　芳子

手術には堪えられるとて手術され　芦屋　竹中　綾珠
幸せな人に言ってもわからない　河内長野　植村　喜代
冬だからブルーにこころ染め上げる　米子　小村てい子
男とは頼もし転ぶところまで　寝屋川　宮崎　菜月
老眼鏡　心のすみもお見通し　大阪　樋口シマ子
金を掌に受けて人間くさくなる　堺　柿花紀美女
余白もう汚したくない筆洗う　宝塚　丸山よし津
倖せは今日も五体がよく動く　和歌山　田中　みね
憎らしい言葉で敵は負けている　茨木　吉川　悦子
虹をさがしに出るのか妻も化粧して　有田　松井かなめ
散歩道迷って小さい春拾う　高石　浅野　房子
静けさへ確かめてみる夜の雪　新発田　上鈴木春枝
沽券という無粋な意地をもつだるま　大阪　渡部さと美
髪飾り風の冷たさまだ知らぬ　広島　流　奈美子
美しく咲いたあの日を記念日に　鳥取　石尾かつ乃
許すこと一つおぼえた春の海　和歌山　福井　桂香

◇

ハガキに雑詠3句　毎月10日締切
投句先　〒683　米子市花園町一四
八木　千代

〈訂正〉2月号65P下段終りから2句目
「楽しみになるリハビリの一時間」は竹中綾珠さんの句でした。お詫び致します。

初歩教室

題 ― 茶碗

阿萬萬的

今月の課題「茶碗」に対してこんな句が集まるのは皆さんがお齢を召しているからでしょうか、一寸淋しいような気もしますが。

割って出る寂しい茶碗の別れ音　章久
告別の証の音を秘む茶碗　路子
不帰の旅門出の別れに割る茶碗　秀香
出棺の未練断ち切る茶碗割る　和子
茶碗割る音もむなしき野辺送り　正之
茶碗割る音純くして柩車出る　繁男
訃報聞く胸が茶碗を落とさせる　千鶴子
（茶碗ポトリと落して不吉なこと思う）
こんな湿っぽいのは止めて夫婦茶碗といきましょうか。
新しい茶碗選びの長いこと　悦子
（新婚へ贈る茶碗の柄を選る）
カップルのスタートラインに置く茶碗　路子
（ニューモードの夫婦茶碗で祝われる）
夫婦茶碗新婚家庭彩に添い　三千子
（夫婦茶碗へ新婚家庭の灯もぬくく）
夫婦茶碗洗うもそっと気の使い　しんじ
夫婦茶碗洗える幸をかみしめる　しず子
泣き笑い夫婦茶碗が絆とる　繁男
（夫婦茶碗の渋が知ってる過去のこと）
夫婦仲語りかけてる萩茶碗　遊光
（萩焼の湯呑が知ってる夫婦仲）
それなりに夫婦茶碗にヒビが入る　一郎
いつかは一つ欠ける運命の夫婦碗　円女
夫婦茶碗毀れ使ったことを悔い　方子
（いつかは欠ける夫婦茶碗にあるさだめ）
夫婦茶碗今日は片割れ四畳半　すみれ
（片割れの夫婦茶碗へ隙間風）
夫婦茶碗一人になって仕舞われる　ダン吉
夫婦茶碗一つ残った惨めさよ　勝美
（一つ残った夫婦茶碗に風寒く）
幸せは夫婦茶碗で今日も食べ　照子
（幸せは夫婦茶碗の白い米）
生きのびて夫婦茶碗を新調し　喜代子
定年に夫婦茶碗を替えてみる　紀代志
（定年退職夫婦茶碗も買い替える）
食べ初めの茶碗には親の願いや、おじいちゃん、おばあちゃんの願いも込められていて
喰い初めの茶碗の夢は食べきれぬ　緑良
食い初めの茶碗に親の欲も盛り　千鶴子
食べ初めの茶碗に親の願いあり　照子
孫一歳茶碗おもちゃに握り箸　勝美
持てぬ茶碗はまま食い初めの膳飾る　喜与志
食べ初めを茶碗に箸で孫も終え　太一郎
ままごとの茶碗見るよな食べ始め　遊光

ともあれ皆さんは同じようなところを見ておられますので、自分の句と他人の句とを見比べるのも一つの勉強だと思って並べてみました。

一と口を盛って夢ある離乳食　春枝
そしておばあちゃん達も少々物入りで
マンガ絵の茶碗を買うて孫を待ち　金吾
食い初めのお茶碗を買う老夫婦　三千子
百貨店初孫の茶碗下見して　美恵子
お正月孫の茶碗も買って待ち　トキ
そしてお茶碗が欠けて来ると、
三毛猫が愛用してる欠け茶碗　志洋
（三毛猫の愛用となる欠け茶碗）
捨て犬が自由失う飯茶碗　都姫子
謹賀新年猫の茶碗も新らになり　みね
茶碗割り未練たらしく合せて見　みね
客茶碗半端になって時移る　坂田しず子
（半端半端になってしまった客茶碗）
茶碗酒の句もありました。
茶碗酒父の吐息が洩れている　富恵
茶碗酒無口な父がよく喋り　志洋
のど仏上下で語る茶碗酒　章久
（豪快に大法螺を吹く茶碗酒）
馬喰が似合う舞台の茶碗酒　保夫
二日酔いの朝茶碗で水を飲む　小鹿
（二日酔い茶碗で朝の水を飲む）
次は茶碗むしの句を―
待たされて温み嬉しい茶碗むし　春枝
長過ぎる祝辞気にする茶碗むし　善太郎

茶碗むしの椎茸の香も乙な味　明吉

（茶碗むしの椎茸日本の香りして）

暮れの街を歩くと茶碗売りの掛け声が…　ミツエ

茶碗売り喋る度に値が下り　美子

掛け声に釣られて買った茶碗市　金吾

未練ない安い茶碗を妻選ぶ　美恵子

贅沢をまねて茶碗買うて来る　三津江

迎春へ茶碗も一つ新しく　悦子

お正月せめて茶碗もさらにする　富恵

茶碗屋がガチャガチャ暮れの街せかす　保夫

そして初春ともなると初釜で―　志重

茶碗こう廻してと妻に教えられ　正之

賞め方を知らぬ茶碗を持って見る　晏

お茶席で茶碗に困る賞め言葉　喜与志

賞め方を知らず見つめる掌の茶碗　しんじ

結構ですと茶碗賞めるも嗜みに　すみれ

抹茶碗勿体らしく桐の箱　遊峰

お茶碗を両手に師匠の丸い背な　サワ子

初釜へいそいそ姑の志野茶碗

大茶盛二人がかりで茶の宴

抹茶碗にもいろいろありまして…

いつの間に茶碗に渋がこびりつき　昭治

丹波焼錆がとれそう渋茶碗　向井しず子

（土の温みを感じる丹波の渋茶碗）

友が来て手作り茶碗自慢する　ミツエ

物言わぬされど茶碗は焼きが顔　太一郎

（土と炎で萩の茶碗の顔が浮き）

銘を頼りに少し高価な茶碗選る　て る

窯元で見つけた茶碗旅思う　喜代子

（窯元でひねった茶碗買うも旅）

由緒ある抹茶茶碗で孤独です　都姫子

何焼きか知らぬ茶碗の味が良し　昭治

（何焼きか知らぬが茶碗手に馴染む）

抹茶碗だけでなくコーヒーカップも…

コーヒ茶碗もお客の顔で決まります　トキ

単身赴任や引越しにもお茶碗もお伴して

赴任先へ箸とお茶碗ついて行く　隆雄

夫婦茶碗単身赴任に入れておく　和子

（夫婦茶碗も単身赴任の荷に入れて）

一戸建てあの日の茶碗も連れて越す　ダン吉

ともあれ老人が両手で温い茶碗を両手で包むように持っている姿は一幅の絵ですね。

お茶を飲む老人の背に春の風　つえ子

下五を「梅匂う」としてみては如何。

生姜湯の茶碗両手で風邪の姑　遊峰

御老人に代り若いお方は…

一とまわり小さい茶碗でダイエット　明吉

何時の間にか小さい茶碗に変えてる娘　て る

パン食へお茶碗肩身せまくする　三津江

（パン食へお茶碗出番が狭くなり）

藍茶碗見捨てられてる核の家　サワ子

（藍茶碗は忘れられてた核家族）

大盛りの茶碗が重い故郷の膳　紀代志

大盛りといえばこんな光景も…

地下足袋が大盛茶碗に秋を盛る　八重子

（大盛りの茶碗に飯場は秋を盛る）

では最後に諸々のお茶碗を…

百回忌和尚茶碗で般若湯酌み　成明

（豪快に和尚茶碗で般若湯）

お茶碗に外国からの飯を盛る　小鹿

里帰りの嫁の茶碗も買うて待つ　和子

父さんの茶碗は孤独な午後八時　治

許せないそれでも洗う飯茶碗　正子

こころ離れたときもあり茶碗拭く　晏

音立てて茶碗割りたい日もあった　はる子

コーヒーカップ選ぶ時から敷かれてる　治

下手な嘘お茶碗みんな知っている　美子

茶碗盛るただのおんなの朝がある　一郎

一粒の米の重さを知る茶碗　善太郎

幸せを茶碗の音に感じ取る　志重

以上で終るのですが、毎月のことながら、視野が同じ所に集まるのは残念ですね。普通の句会などでは相打ちの形となってしまったり、又、言い古されている場合が多いので、これは改めた方がいいのではないでしょうか。では又来月を期待しています。

◇

題「走る」　**3月10日締切**（5月号発表）

ハガキに5句以内

「新鮮」　4月10日締切（6月号発表）

宛先　〒598　泉佐野市中庄一〇八一―九九　阿萬萬的

客

内芝　登志代　選

身についた人柄が呼ぶ客の足　遊　峰
たこ焼の匂い幼い客を呼び　たつみ
名優がいちばん恐い立見客　正　坊
客が居る間は淑女となる女房　ちかし
長い旅してきた客の国なまり　緑　良
初釜の客華やかな下駄揃う　新　造
客連れて折箱ぶらぶら千鳥足　きみえ
大安の客へ打ち水念を入れ　公　一
まっすぐに客間へとおすいい話　しげお
来ぬ客へポインセチアと燃えている　達　子
横綱へ推挙の客にかしこまり　正　敏
どの客も差別はしない自動ドア　京　子
遠来の客は戦友酌み明かす　高　明
客待ちの人工雪に陽が登る　あ　き
花一輪一期一会の客を待つ　知恵子
解約の客へも行員頭下げ　冨　美
マネキンの柄に決めているお客　白渓子
ひやかしの客へ仮面で相対し　雄　々
気のきいた世辞がお客を喜ばせ　静　子
代替りお客の層も若くなり　サワ子
荒らくれた客を手玉にとるマダム　白　峰
客足が絶えて素顔に房る蝶　多賀子
木枯しの屋台ぐつぐつ客を待つ　克　子
足もとで客筋をよむ勘の冴え　鉄　治
客扱いも馴れて脱サラ三年目　枯　梢
膝組んで男気楽な客となり　堀江芳子
お祭りに客のないのを淋しがり　弘　朗
こわばった顔来客へつくりかえ　高　夫
良い客にされてチップへ気をつかい　砥　代
客筋の良さで捌ける京呉服　悠　泉
酒提げて挨拶などは要らぬ客　文　平
客商売さすがと思う人当り　み　ね
客で来た娘土産に孫を連れ　黙　光
お久しぶりあなたが来ると雨となる　可　住
夫婦してもてなす客に嘘がない　雅　風
客席をわかす子役の眸がきれい　美代子
珍らしい客が飛びこむ俄雨　佳　雲

佳

時たまは客になりたい握りずし　ただし
客扱いされて無心が切り出せず　三　男
客に来た母がいいだけ使われる　大　柏
千客万来防犯カメラの眼もせわし　高　子
観客を泣かせた役者も泣いていた　露　児

人

久闊の客に積った今朝の雪　蛍

地

客待ちが寒う立ってる宿の旗　雀踊子

天

客筋が自慢　老舗の大看板　倫　子

軸

客足が増えてはなやぐ街の風

隅

奥田　みつ子　選

町の隅訛り同士の小さい灯　本蔭棒
隅々が特に綺麗な亡母の部屋　規不風
ポシェットの隅に本音がかくれてる　武庫坊
庭の隅植えぬ草花咲いており　柳五郎
言い勝って心の隅にある翳り　諷云児
片隅の幸せしみじみ友がいるて　る
新聞を隅まで読んで独り住む　さかえ
隅々に亡母が生きてる台所　ちかし
隅までも空間生かす２ＤＫ　多賀子
隅ずみを忘れて福祉やせてゆく　寿　美
隅っこで相談してるのし袋　三　和
隅にいる無口がなんか偉そうで　三五島
嫁がせて人形ぽつんと部屋の隅　いわる
竹人形雪の降る夜は隅で泣き　勝　美
客席の隅にいるのが評論家　正　坊
有名な画家が住んでる町の隅　博　子
隅っこで静かに勉強していた子　妻　子
良心の隅で頑固が邪魔をする　遊　峰
隅っこの小銭でピンチ切り抜ける　貴代子
校庭の隅で弾まぬ毬ひとつ　奈美子
隅っこの落葉の下は鳥の墓　春　子
神棚の隅へヘソクリ供えとき　しげお

隅っこではらはらさせる参観日　高夫
誰も知らぬ美人が隅に座ってる　三男
吹きだまり丸い地球に隅がある　保
寒椿春を隅から招いてる　緑良
レントゲン心の隅まで見られそう　かなめ
隅ずみを掃かねば貧乏神が寄る　テル
名幹事隅の隅まで眼が届き　あやめ
隅っこで煙草くわえて立っている　蛍
隅だけをつつく税務署にも困る　雄々
隅っこで偶然会ったかくれんぼ　年代
隅にいる奴が気になる事を言う　山久
隅で良し凡夫の城は崩すまい　洛酔
隅々に届くプリマの澄んだ声　やすお
ソロバンの隅であかんと声がする　大柏
工場の隅が見えない社長室　源吉

佳

掃除機を信じていない部屋の隅　サワ子
大部屋の隅に生きてる芸の虫　正敏
居酒屋の隅で総理を斬っている　高子
重箱の隅に残している自由　宵明
父さんが隅に座れば絵にならぬ　理恵

人

職人の音生きている路地の隅　暁明

地

銀行の隅でカメラに覗かれる　白峰

天

堂々と隅から正論立ち上がる　きみえ

軸

床の間の隅に今でも亡母の琴

水

吉岡　きみえ　選

醜さも嘘も流してくれる水　典子
ふきのとう春の水音聞き分ける　京子
言い切った奥歯へ水が飲み干せぬ　文平
過去水に流して生きるわだかまり　悠泉
水鏡終った恋を眠らせる　砥代
出世したその分だけが水くさい　さかえ
寒の水亡母が助けた此の命　規不風
あの水を最後に父の灯が消える　妻子
水たまり女につらい過去がある　たず子
水割りに女の嘘が溶けてゆく　可住
パスポート母が気遣う旅の水　正敏
天からの水でも上下の値段つき　雀声
肚の虫水に流せる事でなし　たつみ
水くさい人だと思う片思い　佳雲
海に出る野望絶たれた溜り水　夢酔
酔いざめの水後悔をするばかり　素身郎
ゆっくりと水嵩を増す母の海　満江
大空と別れが惜しい水たまり　正子
早春の川水の情けが深くなる　多賀子
泥水を呑んでも鯉の糸づくり　秋人
水すまし深入りしない処生術　知恵子
せせらぎも春よ春よと唄い出す　高子
覆水はかえらぬ絆断ち難く　ただし
人生に廻り続ける水ぐるま　白峰
ほんとうの水のうまさをくれる汗　大柏
方円に随う水の余生とも　寿恵子
春の陽へ雪解け水が走りだす　蛍
美しい水で今夜の口濯ぐ　文子
水割りの水にも払う高い酒　幸一
泥水をかぶる覚悟の位置で耐え　雄々
雪解け水に毬藻は旅へ出たくなる　三枝子
水襞の水待つことに馴らされる　代仕男
水たまり赤いブーツに囁かれ　和子
水割の底で女が泣いている　はるお
汲みおきの水を忘れている平和　美代子
生涯を水と生き抜く女たち　芳子

佳

森羅万象水は旅人かも知れぬ　小鹿
水溜り案外深いかも知れぬ　枯梢
山男水の尊さ知っている　三男
水底に民話が一つ沈んでる　正坊
濁り水飲めない父の道具箱　寿美

人

苦い水飲んで少年脱皮する　鉄治

地

訳あってすこし濁った水を飲む　重人

天

逃亡記水のうまさを知っている　雀踊子

軸

思春期を水面で少女熟れてゆく

■**訂正**　1月号P99上段佳作の句、サワ子とあるは**遊峰**の誤りでした。お詫びします。

—水煙抄

秀句鑑賞

—前月号から

舟木与根一

羽交締めされたい程にある自由
流　奈美子

羨ましい境遇ですね。上五の表現は他力本願だが、自省もうかがえる。いま流行りのエアロビクスが無理なら、カルチャー族けっこう、大いに翔んで下さい。きっとご主人が、適当に羽交締めしてくれると思う。

書店から悟った顔でドアを出る
大川　幸子

元来、趣味が読書といえば、真面目で勉強家を想像する。立ち読みや、もとめた本の内容の如何を問わず、書店を出る表情は皆、一様にそうであろうと思われる。穿ちが効いていて面白い。

モノクロの絵にあたたかし焼いも屋
藤井　高子

街路樹の葉も散り、街並みはもうすっかり冬の墨絵である。寒々とした風景だが、この焼いも屋、あったかくてよく売れそうだ。

身内には井戸の深さの話など
小村　てい子

当節は、核家族かなにかしらぬが、親族でも油断ができなくなった。が然し、あなたのご一族は昔風のいい人達のようです。内情が話し合え、お互い助け合えることは幸せです。

掴みどり妻の小さな手に譲る
上田　柳影

小さくても、器用な手のほうが有利、とは読みすぎか。単純に、ゲームの楽しみを妻に譲った、と見たほうがずっと句が生きる。

好きな男のほうへと白い足のばす
小谷　美っ千

若い男女の集いであろう。膝をくずしたり足をのばしたり、思い思いの姿勢で談笑しているが、恋は正直である。作者が女性だから実感があり、迫力もある。この白い足には、すごくお色気がある。

七面鳥丸焼きにしてクリスチャン
笠嶋　恵美子

それには、それなりの謂れ、あるとしてもこの句は強烈である。

この痛烈な皮肉に、うっかり拍手をするとその筋からクレームがつきそうだ。

仕事着はいつも万歳して干され
宮崎　菜月

汗を洗い流したあとは、誰しも爽快であると思う。洗濯された仕事着とて例外ではない。この万歳がうれしい。作者は働く者の喜びと誇りを、干してある仕事着の形から感じとった。慧眼である。

金賞の絵だから感心して眺め
宇野　昭代

絵はわからなくても、入賞作品の前では一応立ち止まる。やがて納得面をする。まことに単純だ。軽薄な順応性を皮肉っている。句が動くのが欠点だが、捨て切れなかった。

次に六句ほど私の好きな句をあげてみた。それぞれ持ち味があり、面白いと思う。

カラフルな肌着に替えて逢いにゆく
木本　如洲

隠されたお洒落でしょう。若くありたい願望もある。気を回したり、偏見は止めよう。

隅っこの火鉢は冬の歌が好き
中尾　まゆみ

ここは、火鉢でないと歌が死ぬ。それにしても、今の時代に火鉢は貴重である。

白旗を数えてやおら立ち上る
舟渡　杏花

形勢を読んでからする発言には、いささか狡さがうかがえる。

普段着で慰められて泣きました
土橋　はるお

かざらない間柄だから、心打たれました。

ともだちの輪に一枚の戯画まじる
高杉　千歩

案外、複数かもしれない。が「一枚」の誇張が効いた。

御伽噺鬼はやさしい顔である
井上　照子

根はみんな、やさしい鬼だと思う。だから御伽噺には夢があり、鬼も救われる。

1988年 新年おめでとう会

1月15日・大成閣

新年三ヵ日もそうだったが、成人の日の今日も、街でキモノ姿をあまり見かけなかった。若い女性の振袖は、そう魅力的とは思わないが、そこへいくと、女性川柳家の和服姿は、さすが洗練されている。そんなことを考えているうちに午後一時二十分出句締切。天笑氏の司会で開会。和室の八テーブル満席で汗ばむほどだ。岡山、鳥取など遠来の柳友紹介、初出席者の紹介があり、栞主幹が「辰年は、何もかもが立つ年、わが川柳塔発展の年にしよう」と挨拶。出席八十二名の内、女性が半数近くを占め、新しい顔もふえた。川柳塔も年々変っていくことを実感させられる。

「待つ」「車」二題披講のあと、司会が岳人氏に代り宴会へ。由多香氏の発声で乾盃。ご存知、規不風氏が88年の川柳塔社を占い、〝思うこと凡て達成できる。特に女性の力で大きく伸びる〟と披露、果して当たりますかどうか。うれしい時はこれが出る、という年男、弘朗氏の映画説明「月形半平太」を皮切りに、カラオケオンパレード。中でも見ものは、アンコ姿に女装した東雲氏の踊り。塔の名物になること間違いない。まだまだノド自慢の方もおられたろうが、会場の都合で時間に制限があり残念でした。

形水氏の発声で万才三唱、午後三時四十五分閉会。

（史好記）

「待つ」　西出楓楽選

待ちくたびれたとはおっしゃれぬ皇太子　史好
来ないとも思う何かを待っている　さと美
良縁を待つ程皺が増えて来る　紅月
たんぽぽの綿毛ブルーの風を待っている　千梢
だいぶ待たしたらしいハンカチ疲れてる　千万子
輝く日故郷で待ってる母がいる　美緒
母の手が何時も待ってるはぐれ鳥　(松)芳子
なりゆきを流れのままに春を待つ　寿美子
卒業を待つ干涸びた靴の艶　高夫
冬木立芽吹くチャンスを待っている　美緒
寒椿いとしい人を待つ姿　月子
頼むから宵待草にしないでネ　進
待つ人がありゴールまで振り向かず　維久子
春を待つ女は高く翔ぶ構え　吸江
待つ人のない赴任地の冷たい巣　天笑
待ちあぐむ女の髪が蛇になる　水客
うさんくさい目を待っている戎橋　美津枝
おとぎ噺を待っているのは二度童　(河)芳子
徳利の帰り待ってる親狸　正坊
新空港待って寿命を考える　登志代
待つことに慣れてしまったすわりだこ　佳秋
胎動が秒読みしてる春を待つ　理恵
友達を待つ街角に風がある　岳人
一言を期待しているコンパクト　いわる
待たせても待っても友はあたたかし　千寿子
終電を待つ男の背中まるくなる　恭昌
も一度花を咲かせるチャンス待つ　あいき
天国で妻にまだまだ待たしとく　三男
ライバルの出方を待って策をねる　雄々
待つことに馴れた編み棒動き出す　君子
待たんでもいつかお迎えやってくる　吸江
待針の位置で生涯待つ母で　寿恵子
遮断機の向こうも短気者らしい　鉄治
春近し私を変える人を待つ　みつ子
待つ人へやさしくまわる花時計　美智子
忘れ得ぬ人待つブランコゆれている　維久子
待ち呆け雲の行方を追うている　栞
(人)たわいないことを待ってる老夫婦　智子
(地)晩成の子にのんびりと春を待つ　みつ子
(天)春を待つ心が花屋覗かせる　三男

(鮎)幸せを待つ鏡台を光らせる　　さと美

「車」　松川杜的選

ライバルが余裕を見せる車間距離　高夫
歯車がやっと合うたら銀婚で　栄
免許取り車もほしいアルバイト　逸
北風の話は好きさ風ぐるま　諷人
ロケットより孫も矢七の風車　美津枝
ジャリトラで稼ぎきれいに食べている　英壬子
マイカーが徒歩に抜かれた初詣で　寿美子
SLの記憶　鶴も低く飛ぶ　雄々
メイドインジャパンの車ワンダフル　正坊
ライバルの新車が光る車寄せ　光子
水車春の匂いをして廻る　紫香
策を練る気にはなれない禁煙車　佳秋
円高を乗り越えて来る日本車　洋敏
助手席の妻がアクセルばかり踏む　美緒
世は平和君も車を詠み給う　射月芳
瀬戸の橋一番のりを待つ愛車　寿恵子
町内で車の無いのは私だけ　弘朗
戸車がいたんでいます夫婦仲　しげお
車輪止めはずすと敵が多すぎる　東雲
車椅子あすあさってを視野におく　楓楽
なに思う風のない日の風ぐるま　鬼遊
外車から降りて来たのはもやしっ子　かなめ
人力車に乗ったは遠い高島田　維久子
歩きましょう人とのふれあいなくすから　あいき
家も車もハンドル妻に持たせとく　君子
絵日記の車素直に走ってる　てる
北へ帰る車窓に日本海続く　シマ子
親の方が乗っているのはポンコツ車　東雲
着陸の車輪の音でほっとする　吸江
出勤の車で団地が動き出す　水客
車間距離おんな心がもどかしい　白渓子
成人式降りて車が寂しがる　(松)芳子
青春を信号無視で行く単車　(河)芳子
三軒先で静かになった救急車　諷云児
出世せぬ顔が並んだ終電車　よ志子
車では見られぬ景色徒歩の良さ　登志実
(佳)嵯峨御流古木に配す御所車　しげお
(佳)新幹線がとっても好きな乳母車　寿恵子
(佳)母は命の限りを押さん車椅子　維久子
(佳)生きている倖一輪車を今日も押す　笛生
(秀)ハンドルを握ると狭い道ばかり
(鮎)赤帽の車に道を尋ねられ

■出席者

西尾栞　河瀬芳子　茂見よ志子　西田柳宏子
小出智子　川島諷云児　堀江光子　寺井東雲
宮尾あいき　宮崎シマ子　高沢栄　西出楓楽
柴田英壬子　池田寿美子　上原逸　藤村〆女
松川杜的　松川芳子　奥山美智子　小西雄々
上田佳秋　吉田笑女　渡部さと美　奥谷弘朗
秋元てる　辻白渓子　古川美津枝　正本水客
山崎君子　田中正坊　垂井千寿子　黒川紫香
南方静代　宮口笛生　柿花紀美女　小林妻子
千原理恵　中原諷人　小林由多香　阿萬萬的
米田恭昌　稲葉冬葉　矢内寿恵子　谷垣史好
青枝鉄治　堀端三男　高橋千万子　木本朱夏
藤田泰子　田形美緒　内芝登志代　桜井千秀
大坂形水　笠原吸江　野村太茂津　高杉鬼遊
河内天笑　河内月子　松井かなめ　天正千梢
吉原紅月　山田高夫　生馬芙美子　北野久子
吉岡美房　江口葉子　西口いわゑ　氏林洋敏
橘高薫風　板尾岳人　奥田みつ子　松永進
小池しげお　和田維久子　山本規不風
岩本雀踊子　神谷凡九郎　藤井一二三
上田登志実　小林トメ子　宮園射月芳
山田妙子

■ご芳志御礼（敬称略）

土居耕花　小林妻子　矢内寿恵子　千原理恵
吉田笑女

■祝電御礼

両川洋々　土居耕花

柳界展望

集録―敏・武庫坊

★第3回国民文化祭ひょうご88川柳大会
日時　昭和63年10月23日(日)
会場　神戸市中央区
港島中町6―9―1
（ポートアイランド）
神戸国際会議場
題と選者（現在交渉中）
港　安藤富久男選
爽やか　磯野いさむ選
白　大野　風柳選
民　斉藤　大雄選
島　田口　麦彦選
城　田中　好啓選
本　時実　新子選
踊る　西尾　栞選
彫る　広瀬　反省選
ペン　渡辺　蓮夫選
応募規定その他は追て発表。

★番傘みどり川柳会創立25周年・石川勝句集「淋しい鬼」発刊記念川柳句会
とき　4月17日(日)11時開場
場所　豊中市立市民会館
（阪急宝塚線曽根駅東へ3分ダイエー裏）
句集鑑賞　住田英比古
お話　古下俊作
宿題　各題2句〆切1時
「偏屈」　榎本　信治選
「さすが」　古川　一高選
「無茶」　山本　翠公選
「二人」　岩井　三窓選
「迷路」　保木　寿選
「真面目」　梶川雄次郎選
「ふれあい」　奥田　白虎選
「乾杯」　磯野いさむ選
「エッセイ」　神谷娯舎亭選
事前投句
「母」　石川　勝選
ハガキで2句4月3日迄
事前投句先　〒560豊中市赤阪一―六―九　石川勝宛
会費　三千円
懇親会四千円（申込制4月3日迄）
主催　番傘みどり川柳会

★昭和六十二年度吉永川柳社賞受賞作品決まる
第一位金賞
近道は皆消してある父の地図　杉原　胡風
第二位銀賞
残り火が燃えて私の薄化粧　武元　柳子
第三位銅賞
意のままになる幸せな目を迷い　阿部　良江
佳吟十句
晩年へ振子の音が早やすぎる　益恵
こつの要る戸を押し売りが軽く開け　義夫
面影を宝石箱に秘めて老い　すみ子
手の届くとこには咲かぬ憎い花　芳月
生きて行く明日へメガネの度を合わせ　留夫
水道のしたたりに似る老の愚痴　伊久野
花競べ父は小菊が好きだった　正州
傘さして女は夢を追いたがり　三与子
誰からも好かれて風に舞う女　正子
叱られてもやっぱりママの膝が好き　玉恵

★弓削川柳社は、六十二年度の紋土賞・川柳社賞を発表。
紋土賞　岡田敏子
背伸びした女の丸木橋揺れる
川柳社賞　杭田一雫
十円で話せるだけでよい夫婦

★一月十五日、川柳並木会は、木山遠二氏の六十二年度愛染帖賞（第一回）受賞を記念して特集号を発行。

★川柳路吟社は、「川柳路」二月号に「第17回誌上全国川柳大会」を特集。秀逸に安平次弘道氏（美祢市・同人）立道善太郎氏（熊本市・誌友）の句が選ばれている。

★「ふあうすと川柳社」は昨年十一月十五日、兵庫県滝野町県立はりま中央公園内「いしぶみの丘」に椙元紋太の句碑を建立。
大志を抱け平凡を愛す　紋太
いい勝負

★一月二十四日、はびきの市民川柳会は田中隆二句集かぼちゃぱい発刊記念句会

安藤寿美子さん（豊中市）より
亡母供養として
金一封拝受いたしました
川柳塔社

久谷まこと氏（出雲市）より
金一封ご寄贈いただきました
川柳塔社

新同人紹介

鷲見章
—栞・薫風・鬼遊推薦

森川まさお
—薫風・紫香・柳宏子推薦

栗谷春子
—薫風・紫香・柳宏子・鬼遊推薦

結城君子
—薫風・紫香・柳宏子・鬼遊推薦

江口明光
—薫風・度推薦

を開催。三十二名が参加。

▽**句集発刊**△

★森中恵美子句集
水たまり（文庫版）
第三版（第三刷）が11月上句刊行。頒価千円（送料二百円）申込みは〒566摂津市別府2—10—20—五〇三　森中恵美子

★大西文治氏（河内長野市）句集「パンの耳」を発刊。

▽**同人消息**△

★東野大八氏（本社相談役）「柳宴」誌2月号に「メモまた愉し」と題し執筆。

★中原諷人氏（鳥取県）恩師の鹿野中学校田中校長の要請にこたえ、同校の川柳クラブの講師として、毎週一回講座を開き文化祭にも発表、関係者に好評を得ている。

★「松江番傘」2月号に、「新風土記文芸編川柳」の記事を再録。青戸田鶴、菅井とも子、寺沢みど里の三佳人（本社同人・米子市）が顔写真入り一頁記事で紹介されている。

★本田恵二朗氏（倉敷市・本社参事）が、一月二十二日付朝日新聞（岡山版）の『ひと』欄に大きく紹介された。氏は老人ホーム「倉敷市立唐琴荘」で六年前から川柳教室を開いておられる。

★河内天笑氏（堺市・常任理事）は一月十日開催の岡山県川柳大会で山陽新聞社賞を獲得。

骨太い男の無垢に包まれる　天笑

▽**お便り**△

★信本博子氏（竹原市）残したいと思う句が出来る時と、何十句作っても発表をためらうような句ばかり出来る事があります。今年から句帖の整理法を少し変えてみました。その効果が上るといいのですが。

★種瓜平氏（客友、路郎と交友あり川柳雑誌に漫画を連載）元気に過し川柳漫画を書いております。元気で頑張って下さい。

★大石鶴子氏（井上剣花坊の娘さん）川柳塔をいつもありがとうございます。遠い昔路郎師が剣花坊をお訪ね下さいました記憶をもっております。

★赤川菊野氏（高知県）佐川川柳会忘年句会開催。皆様のことを話題に呑んでおります。お出でをお待ちしております。

★中原諷人氏（鳥取県）一月二十四日みか月迎春句会開催二十余名参加。お湯（鹿野温泉）につかって楽しい一日を過しました。

★遠山可住氏（兵庫県）ささやま新春句会盛大に開催。今年は丹波の祭典があります。どうぞささやまへ。

★二宗吟平氏（岡山県・本社理事）毎日犬をつれて若返りをはかっていますよろしく。

★矢内寿恵子氏（岡山県）新春おめでとう会に出席、柳友の方と和やかな時を過ごさせて頂き、ありがとうございました。

川口弘生遺句集
「しろきた」発刊記念

本社 二月句会

二月八日(月)午後六時
メンズファッションセンター

暖冬の後の寒波襲来にも拘らず、出席94名の盛会。野村太茂津氏のおはなしは、尼緑之助句碑除幕の句会で弘生ご夫妻と初めて出会い、その仲むつまじいお姿を羨しく思ったと、句集「しろきた」を鑑賞しつつ、ありし日の故人を偲ばれ、弘生さん亡き後、しろきた川柳会をお世話しておられる吐田公一氏が披講の前に別稿の如く挨拶された。

初出席は薗田漠沓(静岡県)吐田純子(大阪市)楠岡房子(茨木市)堀畑靖子・山口三千子(和歌山市)松永進(大阪市)大村美千子(京都府)杉野まつ子(奈良市)の皆さん。

今月の月間賞は河瀬芳子さんが獲得。

(進行—天笑)(受付—年代・藤子)
(記録—射月芳・亜成・山久)

出席者—笛生・典子・白峰・武庫坊・年代登志代・水客・公一・純子・敏・杜的・芳子正坊・河瀬芳子・房子・小林英子・白渓子・諷云児・三男・悦郎・藤子・池田寿美子・眉水・千秀・みね・かなめ・靖子・三千子・千代三・〆女・幸・凡九郎・勝美・福本英子・憲太郎・太茂津・重人・作二郎・鬼遊・隆二規不風・しげお・春蘭・柳宏子・達子・勝晴紫香・漠沓・満津子・狸村・白兎・進・章久千寿子・佳秋・みつ子・いわゑ・翠公・文秋美千子・まつ子・東雲・栞・山久・射月芳・朱夏・萬的・庸佑・智子・冬葉・美房・昭子美代子・浩一郎・薫風・はつ絵・柳伸・史好度・洋敏・亜成・雀踊子・吸江・小路・吐来一二三・頂留子・岳人・天笑・月子・英子子寿美・美智子・寿子

席題「相性」　大村 美千子 選

相性を調べる母の伊勢暦　雀踊子
相性の糸にもつれた夫婦仲　悦郎
相性の吉から心弾みだす　小林英子
相性も紆余曲折があった日々　幸
相性は夫婦茶碗が知っている　佳秋
頬杖をして相性をたしかめる　寿子
相性は凶　凶なりにお付き合い　庸佑
相性がどうあろうとも好きやねん　千代三
まだ惚れているので相性ええらしい　天笑
火と水の星で銀婚つつがなし　みつ子
お日柄も相性もよいフルコース　柳伸
相性云々ぼつぼつ醒めて来たらしい　千秀
相性の悪さを越えたフルムーン　美房
ひたすらに折れて相性には触れず　翠公
相性の悪いお酒に妥協する　千代三
相性がよくてボトルと切れぬ縁　寿美
相性のよい人妻に誘われる　規不風
好きだから相性悪い筈はない　満津子
相性を花びらに聞く青い恋　射月芳
相合傘と塔　相性が合うみたい　史好
相性はとてもよかった馬鹿でした　小路
フィーリングぴったり合うた初対面　寿美
相性の悪い代打を向けて来る　白渓子
相性に触れお断りする釣書　浩一郎
相性を我慢我慢で変えました　翠公
相性の悪いお医者がメスを持ち　千代三
相性の悪い男と船に乗る　浩一郎
戴いた和菓子　お薄を点てましょう　まつ子
相性にこだわり青い鳥逃がす　武庫坊
カマキリの恋に相性などいらぬ　雀踊子
相性が悪く戸車はずれがち　しげお
もえさかる愛　相性も年の差も　一二三
相性を信じ続けてきた誤算　橋本英子
冬の峠で相性を聞かれている　作二郎
相性は妻が合わせてくれている　智子
仲良しで少し変った夫と猿　美代子
相性とは別ですチョコレートを貰う　萬的
乳房絵馬　火の相性をもっている　作二郎
相性は合わぬが飯を炊いている　はつ絵
吉でない相性　吉にして夫婦　笛生
百合に合う壺は青磁ときめている　美千子

席題「かけら」　吐田 公一 選

水割りに恋のかけらが浮いている　智子

一片のかけら一片の心持つ　杜的
欲すてて土器のかけらと生きている　水客
飛鳥路で拾うたかけら夢がある　紫香
幾年ぞ愛のかけらを継ぎ合わせ　美智子
ひとかけらの愛が欲しくて旅に出る　小林英子
背信のかけらも見せず朝の膳　朱夏
プライドのかけらが好きを言わせない　河瀬芳子
宇宙のかけら地球に夢がある　靖子
骨壺にかけらとなった父を抱く　三千子
老骨へ根性のかけらまだ残す　千秀
土器片が上古の恋を語り出す　三男
幸せのひとかけらです桜貝　年代
夫婦茶碗いずれカケラになるだろう　昭子
事故現場ガラスのかけらにある悲劇　雀踊子
寒風にかけら集める社会鍋　典子
優先座席見た親切のひとかけら　笛生
ロッカーに不倫のかけらかくれてる　武庫坊
節分の鬼にとどかぬ陽のかけら　作二郎
円高の儲けをかけらほど貰う　射月芳
けとばしたかけらが値打ちものだった　度
愛情のかけらを探す寒の月　美千子
根気よく出土のかけらつぎ合わせ　英壬子
捨てられるカケラと宝になるカケラ　昭子
疵口に恋のかけらが突きささる　寿美
掌の海にえにしのかけら深く棲み　寿子
星のかけら落ちてきそうな山の宿　みつ子
骨のかけらにしたくないデスマスク　千代三
屑籠に失意のかけら捨ててある　諷云児
孤児還る記憶のかけら持ち還る　美房
良妻のかけらを捨てて楽になる　〆女
たくらみのかけらも見せぬ二枚舌　頂留子
想い出のかけらを拾う父の海　諷云児
噂話のかけら集めて風の私語　みつ子
突き詰めてゆけばロマンのあるかけら　智子
雪の結晶失くした愛のかけらかも　靖子
人情のかけらをもらうヒヤシンス　笛生
美しい花火のかけら手に受けよう　眉水
愛のかけらを抱き続けてる泥人形　年代
大和路の土のかけらも遺跡めき　公一

兼題「念入り」　津守柳伸選

念入りな化粧　喜劇になってくる　規不風
念入りの化粧も若さには勝てず　白峰
念入りな化粧をすれば眼が光り　博子
念入りに子供扱いされている　笛生
念入りに透かしてみても偽ダイヤ　翠公
念入りに磨けば石も光り出す　昭子
注意せよ念入りな声二度三度　市雄
念入りに検査ぼつぼつガタがくる　新造
入念に仕上げ一刷毛満ち足りる　水客
金借りにゆくお化粧を念入りに　年代
念入りに磨く鏡に騙される　白兎
後継ぎへ老舗の秘伝念入りに　池田寿美子
念入りなパズルに夜が短かすぎ　みつ子
念の入った挨拶されて白けます　年代
念入りに診ている医者の瞳が怖い　福本英子
念入りに調べたはずの縄なのに　川瀬芳子
流石職人基礎へしこたま念を入れ　千秀

『しろきた』の刊行に寄せて

吐田公一

去年の二月十四日に川口弘生さんが亡くなられて早や一周忌を迎えることとなり、またこの二月十四日は奇しくも中島生々庵先生の三回忌に当るという、何か因縁めいたものを感じさせられるのでございます。

ところで、この遺句集は弘生さんの奥様を中心に、ご長女をはじめご遺族の方々の手で約一年がかりで編纂なさった由承っておりますが、まさに夫思い父思いの愛情が編纂のそこここに見える思いがいたします。

耳鼻咽喉科医としての弘生さんは、どちらかと言えば庶民的なお医者さんで、そのお人柄が多くの患者さんから慕われる因となったものと思われます。

かあちゃんに抱かれているのに注射され
名医ではなくも一隅照らす医師

この句でもお解りのように、彼の優しさ、庶民性は根っからのもので、医師によくありがちな尊大な態度はみじんも見受けられませんでした。また、親を妻子を愛する深さは人一倍であったことが

雨もよし洗濯好きの妻と出る
半分ずつ食べて夫婦の気が足りる
子と遊ぶ自分の中で父と会う
詫びること多々あり母の爪をつむ

念入りにソウルへ向けて足ならし　憲太郎
同居する妻へ何度も念を押す　冬葉
もう一度確かめてみる当りくじ　勝晴
念入りの捜査に浮かぶ雑魚ばかり　亜成
いつまでも冬　念入りに爪を切る　千代
実年の恋おだやかに念入りに　藤子
念入りに要の釘を打っておく　射月芳
念入りに化けて見合の席に着く　かなめ
キスされる首念入りに洗っとく　眉水
何べんも何べんも見直している当りくじ　度
念入りも程程ワテも人ですョ　凡九郎
うぬぼれを念入りにするコンパクト　美代子
入念なチェックに警察犬の鼻　柳宏子
念入りに送る本命のチョコレート　幸
念入れ過ぎた装いへ立つ噂　小路
噴水裸婦へ冬の陽差しが念入りに　作二郎
念入りが過ぎてときどき蹴つまずく　杜的
念入りも程度を越すと疎ましい　諷云児
念入りに鍋を磨いて憂さ晴らす　泰子
念入りな検査は事故があってから　度
焼香の順まで書いてあった遺書　美千子
念に念　仕舞い忘れたとは言えず　三千子
念入りに鏡と自問自答する　浩一郎
念入りに磨いています売れ残り　月子
念入りに天声人語読める朝　柳伸

兼題「食後」　宮口笛生選

デザートのみずみずしさよ春近し　千代
ひとり寝るだけの食後をもてあます　美房
満腹になって油断をしてしまう　智子
いい話食後のこなれにとっておく　公一
駒下駄を借り庭園へ出た食後　紫香
満腹の顔で梅干噛んでいる　千代
女三人まだ喋っている食後　庸佑
同じもの食べてわたしに蕁麻疹　美代子
夕食後何がおこるサスペンス　はつ絵
旅先の食後冒険したくなり　天笑
塾の灯が食後のタロー待っている　まつ子
食後にはあたりさわりの無い話　武庫坊
弁当箱を包み煙草に火をつける　度
偶然に同じ薬を飲む食後　松川芳子
手を合わすだけで食後が満ちたりる　千寿子
大切な話食後にとっておく　池田寿美子
箸置くとすぐに崩れる家族の輪　佳秋
父と母食後を長い話する　規不風
附き添いは食後の薬もって待ち　栞
満腹の後は寝るしか用がない　隆二
新婚の内はメロンの出る食後　射月芳
約束を食後も忘れないように　緑良
飽食に慣れた食後のダイエット　美智子
しばらくは余韻たのしむつまようじ　美千子
説教はまたの機会にした食後　天笑
満腹でいつかはずれた鬼の面　千寿子
乳一ぱい吸わせて母の子守唄　純子
呆け食いが居るから早く片付ける　漠沓
均等法　男食後を片付ける　狸村
老夫婦　食後のお茶も静かなり　重人
遅い夕食終えて明日の米を研ぐ　三千子

花嫁の父に軽さと淋しさと
にその思いを見ることが出来ると思います。
また弘生さんは無類の〝石〟好きで、中でも宝石に因んで
睦まじい夫婦が守るガーネット
水底の小さな月の真珠婚
と詩われ、ここにも夫婦愛のすばらしさが見受けられ、まだこれからという身で他界されたご遺族の無念さは計り知れないものがあると思う次第です。
最後に弘生さんの辞世の句とでも言いたい
あの人もあの人も居て今日がある
今日を生く出口は見ない事にする
にありますように人の愛を信じつつ一人の庶民的な医師として、また川柳家として生涯を本当に真摯な姿で生き抜かれたことを、この遺句集を拝読して感じ、ここにご冥福をお祈りする次第です。

ゆとり取り戻す食後の爪楊枝　幸
食後ぐらいはずっこけて見るテレビ　年代
セールスの食後　煙草は吸わず出る　白渓子
眠くなる極楽になる食後　規不風
食後の散歩　夫婦の旅の久し振り　水客
食べ盛りチャルメラ呼びに出る食後　太茂津
食後にはシューベルトでも聴きましょう　博子
飯すんだとこへ悪友提げてくる　小路
死にたいと思うことなどない食後　緑良
親と子の対話　食後のミカンむく　笛生

兼題「切符」　岩本 雀踊子 選

廃止線今日が最後の切符買う　吸江
孫のもつ切符は二十一世紀　公一
ふところの切符と春を待っている　美千子
新婚の切符に磁石を当ててみる　悦郎
貴方まかせの切符に春の夢がある　緑良
半券は握ったままでいて他人　荒介
ひとり芝居の切符残りは僅かです　千代
長旅の私も切符もくたびれる　泰子
先取りの春へ切符は花色に　太茂津
さようなら言えぬ切符を買う女　隆二
定年後の切符手にして独り飲む　水客
切符が二枚彼女の気持問いかける　文秋
乗換券妻も私も持っている　杜的
鈍行で大志を抱いている切符　幸
逢いに行く切符は汗をかいている　一二三
地獄ゆき切符はとうに買うてある　千代三
ポケットにいつでも翔ぶ気の切符もつ　朱夏
ふる里を捨てる片道切符買う　松川芳子
各停の切符を軽く持っている　典子
エリートの切符に途中下車がない　武庫坊
新婚の切符は新婦の方が持ち　萬的
世渡りの下手な切符を持ち続け　いわゑ
食券の追加を買いに母がたち　栞
人生の切符でときどき途中下車　杜的
重吉一座をみた半券を持っている　河瀬芳子
青春は片道切符の恋もする　朱夏
無人駅の出口に箱が置いてある　度
ふる里へ帰る切符はまだ買わぬ　山久
逢うて来た切符無言で吸い取られ　いわゑ
雪の日に別れて切符捨ててない　作二郎
切符二枚黙って渡してくれた母　正坊
コンサート切符に企み少しある　勝美
出直しを赦す切符を握りしめ　寿子
くすり指　貴男の切符手に入れる　昭子
故郷の切符欲しがる竹トンボ　岳人
一枚の切符で過去を捨てに行く　緑良
ふる里へ無心を言いに行く切符　隆二
人生を変える切符を二枚持つ　水客
片道切符で真紅の海を眺めてる　〆女
島を出る決意　片道切符買う　浩一郎
悪女になる夢の切符を手に入れる　みつ子
人生の回り舞台に乗る切符　雀踊子

兼題「歴史」　西田 柳宏子 選

羅漢百態　百の歴史を抱いている　いわゑ
一と筋の歴史が和紙の里に生き　寿子
菩薩にも夜叉にもなれず歴史閉ず　吸江
町名変更　浪速の歴史消してゆく　千秀
さても歴史　愚かばなしを繰り返す　千代
飛鳥路の歴史をたぐる万歩計　吐来
裏側の汚点歴史に書いてない　天笑
落人の歴史を紡ぐ糸車　公一
木の埴輪謎の歴史を知っている　狸村
昭和史に陛下の手術日をしるす　美千子
寅さんの歴史はふられてばかりいる　一二三
まっとうに昭和史生きてきた無口　正坊
お粗末な歴史を綴る日記帳　美代子
出土器に添削されている歴史　頂留子
歴史にはない色少しだけ混ぜる　月子
ストローが二本　歴史はこの日から　緑良
開戦に皆萬歳をした歴史　美房
性善説信じ歴史のページ繰る　浩一郎
自分史にはるか遙かなすねの傷　年代
気が遠くなるよな歴史もつ化石　眉水
磯笛に海女の歴史は生き続け　〆女
残したい事も消したいのも歴史　凡九郎
我が歴史　元の二人にまた戻り　水客
夜が明けて小さな歴史始まりぬ　まつ子
捨てきれぬ夫婦茶碗にある歴史　朱夏
平凡な歴史のなかで餅を焼く　幸
たいせつにしようかごめの輪の歴史　千代
竹馬を降りて歴史を考える　作二郎
世界史のひととこ赤く染められる　水客
漬物石に母の歴史の愛がある　〆女
こんにゃくの歴史をおで人屋に説かれ　小路
真実を書くと歴史がボケはじめ　月子
丹念に歴史を探る竹のへら　吐来
検定の朱筆が歴史ねじ曲げる　正坊
俺の歴史にためらい疵が一つある　太茂津
コンパスの円も歴史を繰返す　作二郎
血の歴史重たく背負う競走馬　佳秋
歴史には残らぬ釘を一つ打つ　三男
べんがらが遠い歴史を抱いている　河瀬芳子
木簡の一字に歴史ゆさぶられ　柳宏子

（清記・史好）

締切毎月25日。必ず原稿用紙使用のこと。
作品は雅号も含めて20字まで。
担当・玉置重人

川柳ねやがわ　高田　博泉報報

判官びいき僕も阪神好きになる　創吾
あくまでも清潔ですと言う不倫　吉峰
小錦の愛嬌徐々に憎くなり　勇太
悪友も良友になる妻の前　増造
効能書き多くて薬怖くなり　一鬼
充電が切れそうなので昼寝する　路子
枯山水黙って禅が語りかけ　一途
せせらぎのめだか素足によってくる　とし
気象庁嵐の進路広くとり　権太
伝説の穴へ蝙蝠出入りする　亜也子
倒産のように嵐へ板囲い　覚然坊
漫画のような雲拡がって嵐くる　君子
伝説の里の煙が低く這う　おさむ
隠すからよけいにのぞき込む世間　頂留子
消しゴムの丸味が語る苦心談　一芳
清潔な話がほしい右の耳　山久
新婚の列車脱線など知らず　シマ子
たまの昼寝へめずらしく姑が来て　あいき
極楽へ行ける鐘なら十円払います　杜的
伝説の鬼も酔うたら踊りだす　まさお
坐らせて貰える椅子のある余生　あやめ
大空の青さへ背骨がのびてくる　亜成
コスモスは嵐の後も伏して咲く　光子
塾通い親の期待を背負ってる　千鶴子
手作りの砦嵐をよせつけぬ　三千子
物真似が売り物自分の影がない　柳宏子
脱線の代償高い石を置き　三郎
心の嵐消して流した洗面所　なつめ
野良猫にしっぽ振られたお人好し　藍子
才女にはなり切れないでいる素足　吉之助
嵐にも案山子頑固に田を守る　波留吉
花時計嵐の前ぶれ知っている　度
風鈴も外す嵐の来る兆し　英壬子
大文字ラブホテルから真正面　薫風
乗客になると居眠る運転手　かすみ
いつ見ても墨絵の様に暮れる森　紫香
国会に昼寝しに来る金バッジ　良三
賛成をしといてぼやく帰り途　一笑
ドライバーの美声みやげのおけさ節　松庄
思いやり真似の出来ない嫁が来る　静江
警策は美女にことさら派手な音　敬山
脱線のはずみに出来た子の始末　高雄
お隣のピアノが昼寝の子守唄　よしひろ
石一つ心を語る禅の庭　勝美
お返しにほんの真似事立派すぎ　紀代
許しなう声かもしれぬ夜鳴石　鉱平
伝説を語る埴輪の瞳が温い　勝一
点と線むすぶと脱線したくなる　冬葉
日日好日昼寝で暮す桃源境　眉水
相談欄まるきり妻に似たはなし　小路
妻よりもぬくい目をもつ女に会う　速水
清潔に生きて言葉を飾らない　菜月
禅寺を出ると血気が戻って来　博泉
伝説にロマンを感じる秋深し　佐和子
愛猫の足は許せぬ清潔家　さかえ
負け犬が再起をかけて禅をくむ　淳郎
回り道夫婦で脱線するもよし　静歩
満願の素足がほてる百度石　曲ん手
キューピーの様な目玉に秋を見た　萬的

城北川柳会　神夏磯典子報

門松の物色をして秋の山　新一郎
秋深しいつしか着ぶくれ八十の坂　寿美礼
幸せになりやと母から夫婦茶碗　満津子
絹の音させて娘も人の妻　公一
露天風呂月にはじらう老いの身を　八重子
使ってもいい金余す妻の旅　テルミ
二十一世紀覗いた様なツインビル　ふみ
さり気ない優しさに逢う冬の寺　達子
時差ボケの妙薬妻のお味噌汁　白峰
賀状だけの文通で知る皆達者　静子
年金で九千万の夢を買う　市郎
イブの灯を消して今年をふり返り　静歩
酒ビールお茶と水物よく這入る　正行
列島の広さの中で住む十坪　文子
喪服着て女貞淑な姿見せ　悟郎
澄み切った大空自分が小さくなる　典子
水槽で鼻つき合って居る活魚　倫子
遠慮なく大きな欠伸出来る部屋　正之
方言が聞けるテレビの時間待ち　温子
マラソンのランナーの足ほしい我　綾珠
牢獄の中をさらして世に浮び　とし江
ガンジスの聖さは氷河の雫より　よし子

命知る晩秋の蚊は逃げもせず　新一郎
探し物おりの猿にも似たすがた　トキワ
年の瀬の寒さ身に沁む喪の葉書　きくゑ
小雨降り黄金に映える金閣寺　久留美
連中と言える友あり喫茶店　ただし
仲人がほぐしかねてるもつれ糸　純子

川柳後楽　井上柳五郎報

古里の軒から出迎えつるし柿　照路
吊し柿白い紛ふいて年を待つ　青銅
つるし柿下界の修羅を眺めてる　健一
頑張りが効いて無罪の晴れ姿　番茶
頑張ったボクを励ます通信簿　秋月
頑張れの声に栄転見送られ　哲郎
頑張った答えはすんなり割り切れる　たけ志
剣ヶ峰頑張っている太鼓腹　金吾
我が家で胡座の纏める年になり　進
車座のあぐらが解けぬ打開策　佐加恵
寄合いで胡座がきれい歳の順　中建
グラビアの女胡座をかいている　文平
晩酌のおやじの胡座には勝てぬ　美智子
鎌足のヒゲがどうのと考古学　浄美
長島の春へゲートが邪魔をする　佐加恵
核廃へ行燈ほどの灯をともし　紫峰
気まぐれの蝶へも笑顔見せる花　吟平
気まぐれにすこうし振り子憧れる　草風
気まぐれは妻の得意の戦法さ　拓治
気まぐれに書いた手紙か漫画めき　博友
気まぐれの男第九を口ずさみ　九坡
欲望の絵図弾まぬまま枯れる　桃風

八尾市公民館川柳教室　高杉　鬼遊報

灯をつけて留守の空気をときほぐす　能子
子供部屋ファミコン遊びに灯がともる　泰成
赤提灯野良犬もふと立ち止る　英一
フィナーレわが人生に灯がともる　友一
金策がついて明るい師走の灯　重善
灯火親しむ本よりテレビ見て過ごし　龍襄
窓の灯が縞目に照らす暗い道　トシエ
父が病み家中の灯が消えたよう　初子
揺らぐ灯に紅さす仏紅葉堂　道子
読書の灯したしみすぎて眠りだす　春子
誘蛾灯生あるものの修羅を見る　その
勤め終え家のあかりにほっとする　恵以子
好きですといわれ心に灯がともる　シマ子
地下足袋にジャンジャン町の灯が温い　章
消灯に身の上ばなしまだつづき　幸子
ネオン街円高ひびき灯が消える　公子
晩学の机明るく夜も更け　百子
灯を消すと隣の話聞きとれる　はる
岐路に立ち灯のある方を恋しがる　重治

川柳藤井寺　赤木　和子報

高らかに軍歌で閉じる忘年会　軍志洋
へそくりがまだ残ってる本を閉じ　三郎
後ろからゆっくり行けば福があり　ときお
いい便りめがねを丸く拭いてから　きよし
もえる日もときめきも無し年の暮　スミ
透けてくる命数える除夜の鐘　治子
あの窓が気になる閉まったままだから　つやこ
広島と京都いまなお違う除夜の鐘　吸江
ドア閉めたままで答はノーである　かな女
慈善鍋そおっと入れても音がする　喜道
長読経うしろからそっと抜けて行き　作秀
老い二人話題はいつかうしろ向き　昭子
そして朝何処にも見えぬ玉手箱　美代子
通勤に坪何千万を踏んで行く　美房
捕まえた幸福だから逃げたがる　本蔭棒
一年の帳尻合わせて老いを住む　与呂志
古都税の列に市長は悔しがり　祐二
卯の年が閉まりかけてる十二月　伴子
日の丸が立つ表札を見て通る　てつお
御仏の灯明までも柿の色　うめ
シャッターを閉めて覚える肩のこり　美佐
貧乏くじ又ひき当てた十二月　みのる
カーテンを閉めて静かな除夜の鐘　末一
カレンダーやせて追われる十二月　ふゆ
音たてて柿の枯葉の鬼ごっこ　敦子
迷い道抜ければうしろに母がいる　正枝
頭下げ古都税丸く話付き　清心
木枯しを裡に閉めこみ冬樹林　和美
自己嫌悪自分で自分を閉じこめて　雅美
青春の色グリンピースの卵綴じ　彩
木枯しが去って落葉の吹き溜り　初枝
年の暮十大ニュース我が家でも　正人
くもりふく眼鏡持つ手は老いの皺　秀伸
折角貰った歳暮を嫁がせる　秋園
短日に追いつめられて初春が来る　かよ
蕾から花へ移ろいゆく手紙　和子

にた川柳会　西村　早苗報

初雪にとうに承知はして居れど　金市
サミットに狐狸犬猿の顔並ぶ　白馬
引き際がよくて皆んなに惜しまれる　木公
初雪へポトリと落ちた寒椿　千草
やんわりと締めた女が反撥し　静代
職ひいて破れ辞典の表紙はる　冬明

放って置こう少し泣かせた方が良い　裕
音もなく声をひそめる目白台　幸一
外国へ行かぬ飛行機恐いから　宗光
冬の陣十二月一日の雪が舞う　晴月
いつ見ても母なる独楽はとまらない　雪子
数の子も中流庶民の味となり　多賀子
うそついてみても冷たい風の中　寿美子
玉三郎素顔になって背広着る　登美也
目の玉にレンズかぶせている美人　花子
いざという時に役立つのが身内　弘朗
忘れたい男へ重い傘の雪　雄々
楢山へつなぐ細い糸電話　雀踊子
ふる里がそれぞれ違う団地の灯　舞吉
くらべては子供を叱る悪いくせ　愚童
玉子酒ふらふら風邪が酔うて逃げ　夢酔
ワンカップ友にのんびりひとり旅　由郎
思い出の糸を手繰れば亡父と亡母　紫泉
ご近所の噂が好きなケーキ皿　景子
日稼の軍手を濡らす雪時雨　巡歩
傷心に氷雨が肩に追いうちを　節子
お隣と比べるくせがまだ抜けず　〆女
キョロキョロと防風林へ用をたす　三和
森の神枯葉が舞えば笛を吹く　為一郎
うっかりと乗って気がつく禁煙車　肇
駅うらの通りに好きな酒がある　早苗

川柳ささやま　脇田　米朝報

どん底で笑顔たやさね夫婦箸　千代子
タクト振る母の笑顔にある温み　和子
黒枠の笑顔が過去を掘り起す　靖子
ネオンの灯笑顔魔物と知った悔い　百合子
茶柱が立ったよ今日の敵をのむ　越山
敵にする男が一人いる誇り　文平
受けて立つ敵へ闘魂もやす槍　久恵
敵少し甘く見過ぎていた誤算　ゆう也
裏切りを追うて女が島を出る　可住
七人の敵を味方にする巧さ　雅二
よく歩く道美しい過去があり　つや子
倖せは二人で歩いた汗の道　エキオ
肩書が取れて歩幅が合うてくる　千代子

川柳化粧櫓　植村客遊子報

草野球応援席が指図する　岳詩
さわやかな気分で美容院を出る　秋月
若草に恋が腹ばう温かさ　越山
泣くという手がある女らのいくさ　葉香
自信とは別に打つ手は打っておく　紅月
式済んでからの財布は嫁が持つ　白李
モーニング着て魚屋さんと当てられる　大鷹
足を踏むダンスへ曲は止まらない　礎石
糸切歯妻の仮面を信じよう　悲子
男一匹俎上にのせて嫁姑　としサワ子
お年玉予想のおもちゃプラン立て　輝月
渉らず気ばかりあせる十二月　遊峰
息子の愚痴といいつつ悔いをかみしめる　遊光
気を使う嫁に薄味馴らされる　みつこ
藪入りの娘と夜明けまで話し込む　永楽
過去捨てて今日を大事に老い生きる　まさ子
紅葉狩り留守居の夫におでん煮る　孝栄
古里は良い筈父母や友人が居る　客遊子
首振ってふって尺八新春の音

岸和田川柳会　植山　武助報

ボケという名前で可憐な花をつけ　こう
夕映えの雲に包まれ山眠る　さよ子
昔ばなし月夜のうさぎに夢がある　冨志子
ストレスが雑巾がけに消えて行く　寿美子
祖母の背は昔話を語ってた　ダン吉
子も孫も帰り残った窓の月　一弥
ダブダブの服で若者ニューモード　ゆずる
帰省する子も無いままに年の暮　通彦
孫達よみんな集まれ十二月　武助
弱い事言ってて女強く生き　狸村
母の背の荷物に涙溜めてある　ひで
水草に揺られ蛙のラブソング　佳生
相続税たんと残して父急死　春栄
かけ足の人生歩幅もたそがれる　加代子
大臣が漫画に顔を出す平和　白光子
方便の嘘が人生狂わせる　希久志

佳句地10選（前月号から）

飯田悦郎選

パンの世も瑞穂の国に穂がたれる　佳秋
ポケットのこぶしは母を呼び続け　文子
この人も哀しい荷物一つさげ　笑子
噴火する島でも里の灯が恋し　高明
匙投げた医者が患者に嘘を言う　東雲
うますぎる話に眉をなでてみる　明
落葉舞う還らぬ夢の永久に生き　千世子
忘却の空に消えない飛行雲　白李
ぼくだって一かいじょうばしてみたい　小二昌之
立ち話　罪な話に花が咲く　敦子

妬く妻の顔はまんがにもならず　甘平
人生が何だだいぶん酔うている　勝晴
生きざまをせめて残しておく人生　初太郎
ぜいたくが進む明日が恐くなる　浪速子
なじみ添いとは昔の人のよい言葉　操子

三幸川柳教室　桜井　千秀報

手をかけぬ料理に夫は慣らされる　上西幸子
その手には乗らず逃げ切る策を練る　愛子
神主の打つ柏手は音も冴え　重次
猫の手を借りて手順がなお狂い　朱夏
手の届く枝で熟柿が落ちそうで　美子
雑音になれて静寂こわくなり　政子
朝刊の音孤独から救われる　カツミ
ただいまの足音まっすぐ駆けてくる　育子
雨の音ひとり聞いてる毛糸玉　和子
音たてずいつも私へ杭を打つ　三千子
ドライブイン慌ててうどんすする音　かなめ
気は既に手の鳴る方へ向いている　鉄治
腕まくり主婦の音みな逞しい　靖子
音のせぬ様に真夜中猫帰る　紫香
神経と時計の音が調和する　明
無神経こころ土足で踏みつける　澄子
うつ病もふっ飛びそうな青い空　中北幸子　芳三
株下がり歯の神経が又疼く　千香子
還付金神経少しなだめられ　み ね
気のせいか酸っぱい物が欲しくなり　隆行
無神経血液型で決められる　一郎
神経の配線ちがう子に育ち　茜
神経をゆきとどかせてどこか抜け　敬子
ポインセチアだよ教えてくれたのは君　千秀
日々あらたはぐれ雲にも湧く慕情　孝子
アイラブユー親が慌てる幼稚園　桂香
初恋は日なたの匂い青い麦　保
初恋に似たときめきで新書読む　正二
初恋にペン習字の本を買う　力
本借りて返して貸して恋芽生え　邦郎
骨組みも出来ぬうちから皮算用　純子
子の為に折れる骨なら痛くない　可笑
骨までも愛せと初夜につめ寄られ　玉枝
骨抜きにされて章魚にもなり切れず　高夫
骨子だけ決めたプランが宙に浮き　ノブ

川柳塔まつえ一月例会　恒松　叮紅報

老いて今児童唱歌を懐しむ　満江
悲しくて戦いの歌唄い出す　貢範
塾へ塾へ少年歌を忘れてる　桂子
一徹の父を泣かせたお立ち酒　静翁
調子外れの歌聞いて寝る背なの孫　房子
唄一つおぼえた旅の箸袋　芳枝
唱歌には乙をもらった伴奏者　きみえ
カナリヤの歌を忘れた粗大ゴミ　正朗
盃に歌え歌えとくすぐられ　笑円
カラオケで唄う祝宴切りつかず　みえ
ナツメロを唄ってはたきかけている　翠星
好きな道歌一筋に生きる人　雄々
寄せ書きへ目立ちたいのが一人いる　三男
乱筆で書いても母の温かさ　芳子
書きぞめへはみ出しそうな子の名前　弘円
反核の署名大きく太く書く　清志
書き足らぬ想いはそっと電話口　小生
停年で書く人生の模様がえ　蒼流
円周のまん中に書く夫婦の絵　静恵
胸に書く文字温める春の月　玄艸
礼状を書いて野暮用書き落し　友子
掌に書いて飲む真似しての初舞台　市雄
騒がしく賀状を書いて年暮れる　鳳人
初春の銚子へ妻も座らせる　秀子
齢なりに初春の願いはかけておく　文子
初春きらり白いページの第一歩　寿美子
黒豆がふっくら煮えるぬくい初春　たつみ
梅一輪初春の音符聞いている　昭二
初春の街でピエロの面を買う　愚童
孫達の初春は新芽の匂いする　山久
初春をめでたく祝う朝の風呂　登美也
初春の床にほほえむ福寿草　妻子
卒寿越す老母にも初春の陽が温い　荒介
追い羽根の音を探している炬燵　代仕男
日常がドラマ我が家の子沢山　風子
愛されて愛してドラマ五十年　日出子
ドラマから翔けるヒントを貰う幸　多賀子
傘寿今夫婦ドラマの台詞編む　静江
ふと感ずドラマのような過去でした　長三
陽だまりの伝言板にあるドラマ　まさし
足音に世紀をつなぐ夢があり　舞吉
足音も荒く不満な顔帰る

稲葉冬葉さん（寝屋川市）より
ご長男結婚内祝いとして
金一封並びに電気掃除機を
ご寄贈いただきました
川柳塔社

足音を忍ばす若さもう一度　巡歩
聞き慣れた足音今日も一人待つ　幸子
寝正月春の足音聞いている　与根一
足音をしのばせついてくる影法師　鶴丸
鬼の首とったか足音翔んでいる　町紅

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

脇役に生まれ育った紅生姜　志重
切れた糸つなげば結び目引っかかる　秀香
遊び場の無い子の毬が垣を越え　千代女
頬ずりをした子が見上げるようになり　甫正
足元にある幸せに気が付かず　保恒
不用品買って買い得にもならず　定山
お上手の口からもれている本音　さわる
たった今置いた財布の場所忘れ　光子
子等に会う嬉しさこめて菓子作る　美恵子
母の味待つ娘に送る祭寿司　勝子
渋柿と知っても一度噛んでみる　明子
古希過ぎて習う筆にも肩がこり　楽山
七人の敵にはむかう靴を履く　種子
うまうまと乗った話が裏目に出　英峰
人情の温さ変らぬ裏長屋　ふさえ
芋の子が煮えたと裏口から届き　邦人
気に入らぬ話と解る顔の皺　雅紅
皺の跡残した弥生陽をあびる　虞人
貿易の皺よせ農家堪えて生き　光水
嬉しい日顔いっぱいの皺がのび　吟平
皺いくつ数えて余生坂を越え　山人
年輪の深さを顔の皺で読み　伊久栄
勤労の勲章でしょう老いの皺　半仙
独り言今夜の餌はなんだろうな　知代子
餌の素稼ぐ此の手に汗握り　英子
餌づけして鳥や獣に芸をさせ　禅心
餌をくれる足音聞いて寄ってくる　旭泉
真直ぐな男で餌に振り向かず　つた子
ローンで買うお客の名前だけわかり　賛平

川柳塔唐津支部　久保　正敏報

散水の凍る路地裏二日酔　旭恒
来る春へ希望切り込む花鋏　虹汀
今後共よろしくでつぐ毒の酒　四郎
一年を水に流して酌む器用　高明
家計簿は三段階に色分けし　あき
五十鈴川聖域へ棲む錦鯉　朴竜
星占術先ず相性に目を通す　香代子
盗人の仮面を脱ぐや冬木立　久仁於
空に散る海の男は唯無念　正敏

佐川川柳　赤川　菊野報

母さんの靴が小さい成長期　恒子
誕生日嬉しい今日の靴が鳴る　天花
玄関に脱がれた靴で客を知り　十面子
ほしい靴色とサイズがマッチせず　禎子
七人の敵を迎える靴をはき　稔夫
年頃にいくつ有っても足らぬ靴　節子
職引いて靴に馴染めぬ足になり　千鳥
一年をこの一足の靴にかけ　須磨子
玄関へ明日も出社の靴光る　暁耕
ズック靴再起を誓う松葉杖　朱坊
結論を出さずに帰る重い靴　和興
プリマへの夢が広がるトーシューズ　菊野

静岡市川柳塔同好会　永倉　僕川報

ジョギングに会釈が続く散歩道　弧秀
クラス会素顔になってよく喋る　金吾
負け惜しみ言う程相手強くない　紀代志

第11回 鳥取県川柳大会

日時 昭和63年3月27日(日)10時開場
会場 皆生温泉会館
電話 0859(33)3671
JR米子駅より皆生行バス約15分

兼題
「うた」　森中恵美子選
「我慢」　片山　巷雨選
「つながり」　本庄　快哉選
「方言」　澤　車楽選
「土」　渡辺　独歩選
「息切れ」　両川　洋々選
「花」　八木　千代選
「ロビー」　土橋　蛍選
「茶」　新家　完司選

各題2句　締切12時
昼食は事前にお済ませ下さい

会費
出席一、〇〇〇円(作品集呈)
投句一、〇〇〇円(3月15日必着)

懇親会
二、〇〇〇円

投句先
〒689—42　鳥取県日野郡溝口町溝口757　小西雄々方
第11回鳥取県川柳大会
実行委員会宛

主催　鳥取県川柳作家協会

苦労人素顔でわかるしわの数　定次
結論を急かせるように酒がくる　庚子郎
餅搗けば隣も揺れる兎小屋　孝平
一徹の明治の人に芯があり　喜平
若き日の思い出捨てよう冬木立　やす
ロボットを買おうかストをしないから　たま
たくあんの皺年寄りの肌に似る　たき
古稀傘寿共に目出度い屠蘇の膳　志げ
八帖へ一人が住んでもの足りず　千代
おもらしをごめんちゃいと孫可愛い　つね
燃え出した喧嘩は酒が火をつける　きん
控え目な中に動かぬ芯がある　きぬ
少年が大志を抱き燃える顔　まつゑ
洗濯も寝坊もしたい日曜日　みつ
初顔の人だが会釈瞳が綺麗　静代
雨の日に手荷物困る杖と傘　僕川

打吹川柳会　江原とみお報

積るほど悪口聞いた鬼瓦　雄々
抵抗もなく水平線へ拿捕の船　紫映
師走風だんだん冴える変化球　巡歩
男より太い女に世をわたし　三和
あっぱれと言おうか父の目玉焼き　日枝子
小さい傷治してしまう母の唾　典子
米櫃の底で泳いでいる夫婦　規仔
余白のない私に冬の雨が降る　雀踊子
不調和音女のコマが廻りすぎ　たつみ
バス旅行夫婦の席はおとなしい　柳風
叙勲にも士農工商まだ残り　宗光
生甲斐の仕事に励み日々楽し　梅朗
冗談が出だし病が追い出され　孝美
嫁姑世間なみに車間距離　吉朗
母の味恋し夜汽車の人となる　春帆
大正は化石時代と言うジョーク　倫子
思い出のコースを辿るフルムーン　白峰
星が降る女心も落ちて来る　節子
真相をたぐれば元の道に出る　ただし
くたびれた千円札で薬買う　佳女
底冷えの朝は冬眠したくなる　菊枝
身の程を知らぬ女の大火傷　幸子
太陽に蔭ひなたあり生きている　蛍
宿命とあきらめられぬのも因果　弘
追憶のレール未来へ敷きかえる　朗

川柳東大阪　森下愛論報

おばさんの守る地蔵に四季の花　とみお
日が沈む帰雁の群れに祈る無事　喜風
沈んでる友に黙って酒を注ぐ　松山
沈む日もアルサ明日のある生命　百合枝
ふんわりと今日の疲れを吸う布団　凡九郎
紅白で飾る布団へ菊かおる　孤舟
お隣は他人の暮らし町住居　勝美
偏屈な老医わが町ありがたし　しんじ
秋刀魚焼く煙へ夕日沈まない　滋啓
砦めく書架に沈んで孤にひたる　愛論
契約をするとおばさん来なくなり　慶三
座布団もお茶も出さないすかん客　度
人生の流れは町の灯で変わる　庸佑
地場産業で町を支える音がする　晋吾
握りあう手と手に言葉などいらぬ　文秋

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

おもわくがはずれ宍道湖もめつづけ　美子
おもわくがすらり通れば痩せはせぬ　世似
人生を悟りきったか虎落笛　聖子
森の樹の枯葉に与作の夢がある　鈴江
新人類おもわく通り踊らない　着流
短調でまとめた夜の虎落笛　歳栄
神棚へ無理な柏手打ってみる　恵美子
虎落笛レモン風呂にて聞くとする　智恵子
生きるということの難さと老いの日よ　民子
生きつづく未来を信じ枯葉落つ　天痴人
舞いたくて枯葉になった紅葉です　清泉
神々も遊び給うか虎落笛　かつ子
ためらいの想い揺さぶる虎落笛　白汀
はるみ

富田林市民川柳大会　池森子報

顔見せに聞く美しい声の女　伊庭勇
愚痴ばなしみかんのすじをゆるく取る　花子
コーヒーより先に手を出すみかん籠　シズエ
食べ放題園のみかんの小さいこと　田中勇
伝来の美田へ子等は横を向き　富久一
小さくとも十の家族が居るみかん　美緒
仮面脱ぐためのワインを二三杯　泰子
ぬるま湯の中で思案が長くなる　荘次
忙しい言うても昼寝ちゃんとする　文次
憎たらし奴やなこれも酸いみかん　凡九郎
無位無冠空港に立ち淋しいね　実
ひと思案みの虫少しゆれはじめ　千万子
タラップをにこやかに降り握手する　頂留子
輝いていますラッシュの改札機　重人
思案するロダンの首に冬が来る　正坊
大皿に美しく盛る今日の嘘　藤子
美女となる幻想を売る化粧品　〆女
美しい女の背後に捜査網　昭水
忙しい今日を満たしている祈り　維久子
美しい余韻さようならさようなら　花梢

ほっとしたところに置いてあるみかん　智子
喋るだけ喋りみかん貰ろて去に　美房
家ならば焼酎ですと特級酒　柳太
ひたすらにあの人を恋う夏みかん　森子

川柳わかやま　西山　幸報

揃わそう揃わそうと回す夫婦独楽　忠雄
ど根性負けても負けても甦る　天彦
祝盃へ古稀の色艶さらに増し　英子
ちらしずし私の影は何処にある　狂虎
母さんの手品でボロが甦る　千寿子
折り詰めのすしも酔ってる靴の音　雀踊子
甦るつもりの鐘を重く撞く　緑良
二人三脚の歩調を揃えたい絆　武雄
許す気になってる母の五目ずし　栄美子
すし折にひとまず鬼女の面外し　結実
盃を持ってご無沙汰詫びに来る　紫香
盃を重ねて知性溺れだす　信秋
忍の一字を押しずしは知っている　寿子
大盃の渦を沈めている器量　桂香
盃を重ねる程に本音吐き　光代
盃にほんのり浮いてくる本音　美智子
金要らぬ話へ歩調よく揃い　鉄治
足並を揃わす縁の下の力　隆積
お流れを頂戴に来た下心　柳宏子
握りずし位は買って帰りまひょ　凡九郎
ステップの輪に一人だけ乗りおくれ　〆女
しがらみを捨てる娯しみ甦る　太茂津
すし折りの用意してある座がこわい　与呂志
生々流転揃って回る夫婦独楽　三男
金盃へあなたわたしの五十年　登志代
帰省子へ愛たっぷりと巻いたすし　裕美

日の丸を洗うと亡父が甦る　保
変り身の早さ盃持ちかえる　高夫
ストレスの胃は閨房で甦る　忠
よく揃う歩調で風があたたかい　公子
落椿あなたの胸へ甦る　紀久子
何不自由なしに揃えて病んでいる　克子
盃を重ねて袴とれた肩　信子
別れ文いい事ばかり甦る　輝子
週末は母の手巻へ会いに行く　照子
甦る記憶は飛ばぬ竹トンボ　政一

京都塔の会　松川　杜的報

生き方を変えてみたい日のゴミ袋　はつ絵
松の葉も芝も刈られて新春を待つ　英子
血色の良い人に聞く健康法　正坊
紫のとばりが鐘の音をつつむ　達子
木枯らしに吹っとびそうな北斗星　求芽
梵鐘の音色が傷を深くする　武庫坊
臨機応変ねむたいときには寝ることに　年代
雲水の素足白い蝶が飛ぶように　杜的
投函のあとしばらくの虚脱感　幸
買う買わぬ財布が迷うピラカンサ　花代子
茶のこころ一期一会を掌にかこむ　水客
ロケットで里帰りするかぐや姫　美智子
いつもいつもすっぽんの側に立たされる　葉子
憧れで終った角帽似合う人　よ志子
憧れの人を追うてる丸木橋　明代
憧れの似ても似つかぬ初対面　太茂津
かぐや姫が居るから月を憧れる　ただし
憧れて何時もはずんでいたい毬　(松)芳子
良寛の手鞠に憧れてる老後　和友
憧れがふくらんでゆく薬指　諷云児

近畿文字放送作品募集

題「男」　橘高薫風選

3句　締切　**3月15日**

ハガキに明記の上、左記へご投句下さい

〒540　大阪市東区谷町2丁目36
大手前ウサミビル3階
近畿文字放送　川柳係

田中隆二氏（羽曳野市）より
句集「かぼちゃばい」発刊記念として
金一封拝受いたしました

川柳塔社

あの人が辞めて転がってきた誤算　陽露子
ライバルの誤算へ喝采しておこう　白渓子
器用さが今日の誤算に泣かされる　紅陽
同居して甘い誤算を悔いている　栄
コーヒーの底に沈んでゆく誤算　〆女
逢うてきた鏡の中にある誤算　麗水
誤算ばかりの人生ひとりでしめくくる　美穂
おもちゃ箱散らし放しの雨の部屋　正敏
泣きに行く部屋は仏間と決めてある　(河)芳子
また夫婦だけにもどった部屋を掃く　飛鳥
娘の部屋へもう父の声届きかね　白李
飾り気のない部屋に居て欠伸する　紫香
許す気になって娘の部屋ノックする　佳秋

川柳大阪　山下みつる報

ゆきずりの湯女に想いの旅の宿　柳弘
口欠けた壺に先祖の愚痴を聞く　本蔭棒
ジャンボクジ表に夢と書いてある　しげお
僕だけが駆足地球はマイペース　比呂志
指切りの約束夜の闇に消え　洛酔
しみじみと夜が男の酒にする　与呂志
凡人の欲に哀しくなる羅漢　重人
妻がいて子がいて急ぐ夜の街　あすか
再会もむなしく哀れ孤児の顔　天祥
花道を捨てた哀れな罪と罰　喜酔
印象は悪いが味のある男　笑風
後から把む印象信じよう　凡九郎
アメリカの赤字のツケを払う円　雅巣
定年で夜学に行くと友の夢　一介
日本酒の香り又よし冬の宴　もとみ
独身寮ひざをかかえて一人酒　龍二
古里を思いうかべて地酒のむ　三千雄
酒やめて煙草もやめてとはしない　宗一
へそくりを抱いて酒場で憂さ晴らし　鈍泉
赤ら顔酒とあの娘に照れ笑い　隼人
酒飲めば地ごく極楽紙一重　義雄
始発から酒飲みからむ恐い駅　一味
酒飲みの親爺見本で子は飲めず　喜楽
いとし子を母に預けて夜の顔　酔舟
百薬の長とお医者は言いまへん　鉄心
夜逢えば悪女に変る才女です　敏
印象は大事に箱に詰めてある　金太
愚痴ちょっと聞いてくれます縄のれん　みつる

川柳塔きゃらぼく　政岡日枝子報

ジョークですなどと本音を言ってみる　時子
わがままは身内の尺度ではかれない　恵子
器量づる身内に一人あひるの子　八重子
鼻唄で浮世離れた身内です　朗子
うす汚れた身内は他人に話さない　瑞枝
身内から蝕んで行く金の箸　正子
距離おいて身内の糸を握っている　夕子
彼岸から身内が見てる大花火　登栄
逆境に身内が傘をさしかける　千春
暗号のわかる身内の座を射とめ　ふみ
身内でも父の甲羅は割らせない　日枝子
つまずけば身内の背なを見失う　富美子
身内にも壺の素性はあかされぬ　花子
身内から逃がれてなぜかVサイン　玲子
秘めごとの蓋はがしたは身内だな　より子
身内には井戸の深さの話など　てい子
毒を売る身内くすりを売る身内　千代

西宮北口川柳会　松本一郎報

着せてやり脱がせてやっと娘の晴着　佳秋
寝首かく敵かも知れぬ盃を差す　園歩
ふたりきりテープも銅鑼もない船出　金太
未来図を描かすと母にひげが生え　柳影
波乱万丈狭間に生きてボケられぬ　紀雄
隠し子の未来へ長いレール敷く　青珠
冬ざくら倖せうすい美女と居る　光代
父と酌む酒にまァるい味がある　米朝
盃の底にわたしの影がある　美智子
なにげないしぐさが温い風になり　春子
下心あって盃あけさせる　みち子
辰年の船出目出度い処女句集　笑女
ドラが鳴る船出の旅は夢のせて　江美
なみなみと注ぐ盃に春の顔　よ志子
祖母も女下着は見えぬとこに干す　杜的
一ランク落して未来図書き直す　(松)芳子
観音像が船出の視野にまだ残る　白渓子
祝盃の輪から外れて呑んでいる　(河)芳子
絡まれないうちに盃伏せておく　諷云児
花嫁の父はうろうろするばかり　恵美子
末っ子の船も見送り母港風ぐ　よし津
出産も死亡も操作する未来　柳伸
未来図の男はみんな化粧する　〆女
高速化の未来が地球を狭くする　萬的
えべっさん色目も世辞も通じない　いわゑ
若駒の未来へかける冬の鞭　はつ絵
人は城社長盃挙げさせる　和友
六十五敬老手帖届けられ　一郎
それぞれの癖面白い鳩の顔　英子
鈴つけにきたのでお年玉をやる　しげお
盃が飛ぶ荒っぽいご返盃　眉水
ユーモアも少しはわかる仁王様　正坊

均等法もう盃の強いこと　伊三郎
未来図の中に私はもういない　香子
言い訳に黙ってつき出すすしの折　正一
盃が手からすべって酔うている　定人
改心をした盃へ注いでやる　三笑子
首巻いて神通力のない毛皮　天樹
弱り出す父へ挙式を早くする　静子
等身大のマネキン運ぶ冬景色　作二郎
風花の町でかつての妻と会い　水声
未来には未来のような設計図　伊升
火を酌いで火になる盃なら受ける　美幸
宵戎帰りの道にもう迷う　凡九郎
年明けて孫も二つになった顔　花村
武原はんと同じ八十路の謡い励まされ　千世子
いい顔で盃を持つ三ヶ日　みつ子
振袖になればお化粧また変り　一進
仲人口利きたいような娘に出会い　千秀
クラーク像の前で読んでる漫画本　俊子
叱られて手伝い忙しい大晦日　市雄
命だけのびてため息つく未来　文夫
何故僕の未来に酒がダブルのか　森生
出稼ぎの笑顔も交じるお正月　ノブ
盃を置いて本音の顔になる　陽露子
地球儀を廻すと未来の風が吹く　勝美
子には子の未来で毬をつかせとく　曲ん手
シンガポールに出向の子の帰る日を　紫春
未来行きの切符売場が見つからぬ　保
不治の身も心はれば古稀の春　善太郎
各停の駅に未来の絵を遺す　荒介
珍しく洟をたらした子に出会い　茂坊
眼鏡を捜す眼鏡がほしい年になり　万亀子

猫抱いて独りの窓へ白い視野　博子
人生って出逢いの人で決まるかな　六郎太
好きな事やって居るから疲れない　獏沓
亡母に逢う切符いちまい買うておく　散歩
明日は船出か水平線に灯が点る　太茂津
お喋りが一番先に涙ぐむ　紫香

川柳高知　川竹　松風報

智恵の輪が解けないままに年を越し　菊野
土佐梨を送って灘の酒が着き　竹萌
茶柱に送られて出る旅の朝　千鳥
三十年工員一筋生きてくる　和興
音痴でも子守歌なら子は眠り　俊子
期待した答が出ない参観日　春枝
仏様みたいな人で金が無い　和広
善人の暮しに妻の手が荒れる　玲
眠ってる顔善人に見えてくる　幸泉
遍路笠みな善人の顔にみえ　かず子
善人を小さな嘘が寝かせない　佳風
善人の真顔へペテン師も迷い　節子
善人の嘘はその日のうちにばれ　功
切り札をさげて男と差し向い　松風
善人の顔とは見えぬクレヨン画　朱坊

高槻川柳サークル卯の花　河瀬芳子報

一線を退いても走る父の貨車　諷云児
子に遺すノートへペンが走らない　百合子
まっすぐに走って師走の街に出る　如洲
勘亭流まねきが冬を走らせる　静江
三十一日まで走ってみてもしれている　信子
大河ドラマ人生を走りすぎただけ　和友
相性など気にする暇のないくらし　満喜
嫁不足相性までは問いません　正恣

相性がよくてももめる時はもめ　武茂
相性が悪いだなんてきれいごと　節子
相性の悪い隣と高い塀　佐代子
相性を占ってから見合いする　彰一
相性に一生かけて嫁ぎ行く　光代
相性をどうのこうのとまだ明治　(松)芳子
相性の悪さはうちの猫も知り　杜的
相性の悪いのもいてかごめの輪　恵美子
相性のひずみの中で許し合う　(河)芳子
相性はどうあろうとも好きな人　俊作
宿帳に妻と書く字が震えてる　草木
新郎の第一声が震えてる　森生
野仏も雪をかむって震えそう　永次
ポプラの葉風も無いのに震えてる　多賀子
痛い事されるやろなと先ず震え　悦子
三日前の話でしたが震えます　真笑
道端で震える小鳥の目と出会う　スミ子
煮こごりがふるえて暗い冬の朝　暢子
巣ばなれのひなの生毛が震えてる　〆女
震えながら捨て猫ついて来て困り　萬的
米櫃を先ずたしかめる年の暮れ　里子
可能性秘めた子どもを信じよう　庸佑
方丈の陽だまり恋し紅葉狩り　栄子
末っ子もやがて出て行く除夜の鐘　さと美
家でいい子学校に来て困った子　貞夫
年金の暮しを覗く冬の蝿　曲ん手
お歳暮に祖母好物のハムがあり　春風
早起会意志試される霜の朝　泰弘
ジェラシーを感じる友の人物画　花代子
判らない癖に家計簿見る夫　とおる
手をかけた子ほど遠くに親離れ　越子

北限の岬は強い風ばかり　紫香
気の若さ顔も若いと思いこむ　あきら
子離れをしてから日暮れが長うなり　房子
来るこない少女の指に花が散る　英子
ざんげ台蟻は一度も振り向かぬ　作二郎
許し乞う男がいれば可笑しいか　礫
ちひろの絵掛けてトイレも暖かい　年代
暮れいそぐ年に思いが深くなり　よ志子
この月が一番短い十二月　陽露子
上ばかり見て歩くからけつまずき　鬼遊

八尾市民川柳会　飯田　悦郎報

福笹をしっかり持って寒くいる　みる子
すがる瞳に寒い言葉は投げられぬ　酔虎
ふところの寒さが不義理させている　とみを
寒い程御利益のあるえべっさん　度
宇野重吉も逝ったよ寒い戎さん　晴生
別れた子齢を数えて寒い鈴　律子
国民の足のリズムが揃わない　和子
暖冬や地球のリズム狂いがち　三男
やっぱり齢をとりすぎていたリズム　恒明
六時には弁当出来ているリズム　シマ子
来客へリズムが狂う台所　節子
点滴のリズムにあずけていた命　夕花
飲みすぎてくどきのリズム狂い出す　雅士
今日の靴少し不安のあるリズム　悦郎
京みやげ舞妓の姿見て帰り　雅風
ワープロも習ってますと舞妓さん　鯛牙子
Gパンで通う舞妓の英会話　曲ん手
福笹はやはり舞妓の手から買う　敬吉郎
まだ少し故郷の訛りを持つ舞妓　幹斉
おとこしの力で舞妓しめられる　幸子
舞妓からヒントを貰う直木賞　憲太郎
喪の明ける空に仏の顔が浮く　浩一郎
春の空雲雀に広くあけて待ち　喜風
童心を空に泳がす凧の糸　章
悔し涙は見せてはならぬ空を見る　礫
盛会のかぎ握ってる空模様　頂留子
離陸して着陸までの般若経　不二夫
流氷のきしみ還らぬ島の空　外吉
万民の罪を赦して神の空　欣之
正直に暮せば神は空にある　壮之助
寝たきりへ鏡の空が晴れてくる　美幸
凧上げる空が河内にまだ残る　たつお
プラネタリウムに輝いている子の瞳　一高
美術館静かに裸婦の前に立つ　砂輝守
コーヒーを静かに飲んでいる無職　雀踊子
坐禅組む心の底は無にかえり　覚然坊
ししおどし凍ててしんしん雪の宿　柳伸
遊ぶのがいないぶらんこ風にゆれ　義子
墓地静かメトロノームを持って行こ　白洋
自画像の裏へ静かにかえりつく　珠梨
暖流の影へ釣り竿岩になる　高士

川柳たけはら　森井　菁居報

おぜんべいたべたらすぐになくなるよ　幼典之
クリスマスほんとにサンタくるのかな　幼千枝
おかあさんとへチマのたわしでこすりっこ　小二昌之
サンタさん早くプレゼント下さいね　小二史子
雪がふるね正月がくるね　小四晴美
虫かごに亀がごそごそ楽しそう　小四晶美
めがねかけ世の中みれば明るくなる　小五由博
寒そうで植木鉢をも家に入れ　小四視幸
スキーヤーだけがよろこぶ山の雪　中二亜貴子
雰囲気に酔う倖せなことに酔う　菁居
亡父のうしろ姿がいまもある炬燵　蘭幸
おらが年今年は絵馬を買ってみる　静水
飲みながら忘年会の打合わせ　勲
クラシックうちにソプラノの孫が居る　喜久恵
ネジを巻く時計家宝の一つかも　浪子
意地っ張り息子に無心など言わぬ　千年枝
ストレスを紅葉の谷にすてに行く　喜美子
CTに切り刻まれて生きている　静佳
仏様もよろこんでいる孫の文　麻代
今にして亡父の遺したひとことよ　君枝
枯れ枯れの落葉の上を歩きたい　雪子
あの虹が消えないうちにさあ帰ろ　俊夫
遠い耳妻の声だけよく聞こえ　清水
指導者と指名受けての術を練る　ヤスエ
お地蔵さん今日は小銭がありました　栄恵
ネグリジェも派手な色着て快復期　千恵
仲立ちの時期を失い後悔す　愛子
朗らかなナースの声に部屋も晴れ　八重美
海女の業胸打つことも女ゆえ　ふさ枝
仕合せの絶頂へ鍵たしかめる　静風
肩の荷をおろしてうどん食べに行く　太虚
髪切ったいわくみんながききたがり　比呂子
愛の矢をあげようわたしはキューピット　こうじ
北風のロマンを男なら愛す　白狐
ままごとに配役子供にあるきまり　康宏
生きるための精なり今日も句を綴る　のばら
風が吹くどこかの土になる落葉　政己
朝夕の冷え込み葉牡丹らしゅうなり　節夫
銀杏ふるふる童心に返りたし　笑子
痛いとこ出来て身体に感謝する　淑子

一休みそろそろ欲が顔を出す　令子
お正月大根白菜漬けて待つ　房子
吾を診る青年医師の眩しさよ　康子
野火たのし日本武尊の真似をして　不朽
般若心経亡父の命日だと気づく　貞子
塗り重ね油絵の具が包む過去　博子
土しかと摑んで揺れる枯芒　一路
木の葉踏みしめ浄土に続く道ならば　静火
連ダコがうねって竜の如くなり　新造
言葉なき子等が確かに話してる　臣子
老いてなお夢絶ち切れぬ柳縁や　シゲヨ
病む人へ大きい嘘もよしとする　操子
二歳の自立ボクという言葉　千代美

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

この辺に鏡が欲しいマイホーム　明光
縁談に家柄という垣がある　福一
恋人を家まで連れてくる勇気　きく子
年輪が語る泣いた日笑った日　寿美子
年輪に火遊びをしたあとがある　博史
鉾杉の樹齢からますバスガイド　杜的
年輪を重ね仏の顔になる　諷云児
年輪にきざまれている南北　英子
年輪を重ねて母は子に還り　慶子
年輪の初めはまん丸だったのに　正坊
年輪の真ん中辺に神の声　武庫坊
面影を追い続けてる般若経　よし子
流れ藻追う稚魚にも明日の夢があり　萬的
追い越してもぐら叩きに会ってます　洋子
追いついて泣く子の鼻をふいてやる　とく子
陽当りを追うて谷間の女たち　市雄
余命なお追いつ追われつ茜色　富子
燃える火を消すと女は老けはじめ　紫香
さよならの駅で煙草の火を借りる　作二郎
住めばよし火を噴く島も去り難し　曲ん手
車椅子お祭りの火を遠く見る　つえ子
おけら火のかまどに生きる初雑煮　登代子
冬日和野焼も眺めるレトロ趣味　明吉
若草の山を焼く火が春を呼ぶ　登志実
山焼の古都から春がやってくる　〆女
竜の年なにがあっても立ち上がる　典子
僕の白髪やっぱり政治が悪いんや　花村
頬冠りの客が待ってる無人駅　眉水
スケッチの視野にあいにく舟がない　白渓子
成人のつどいは振袖コンクール　隆

むらくも川柳会　藤井　明朗報

山彦が正しくもどす日本晴れ　正朗
口紅も晴着に合わす春の色　一葉
心から好きよと孫が言ってくれ　みどり
喜寿祝う蔭に内助の功が栄え　義良
大盃で喜寿を祝って百までも　翠星
嫁が来て福の神さん一人増え　福子
祝宴に一人一芸笑いこけ　武衛
喜寿祝う今日は目出度い記念句会　竹乃
働いて何より健康福が来る　林蔵
人の道正しく歩む悔いはなし　吉野
北山の杉の並木の正しさよ　久仁
招かれて老いも口紅そっと引き　千里
愛し合う心ひとすじ共白髪　はる代
手拍子に乗って祝盃踊ってる　和幸
正確に言わなくなった妻のとし　延子
正論へ味方の拍手でしめくくる　文子
素振りとは違うこころを許してる　鶏生
合掌の中で幸福光ってた　ヤス子
年玉へ正月孫が押し寄せる　君子
口紅をつけて嬉しい年になり　明義
花咲く日間近ときけば心浮く　秀子
成人の娘は口紅の彩も冴え　カツ子
福袋子から孫から届けられ　富子
口紅をうすくダンスの手を握る　明朗
叱られた孫の寝顔にない邪心　芳子
暖房のオフィス上衣脱いでいる　ゆき子
笹竹が窓から招くよい月夜　峰雪
お早うの窓を開ければご挨拶　よし美
窓際のテーブル若い二人ずれ　小み女
窓開けて大気にふれる病み上り　蚊声
窓の外内緒話に耳をよせ　緑水
どの家も倖せそうな窓明り　巡歩
寒い夜窓へ差しこむ青い月　幸子
講演会暖房からは遠い席　昌子
暖房の部屋で鉢物伸びていく　由郎
錦絵の皿に大鯛ピンと跳ね　清祥
先祖より家宝とされるこの絵皿　雪路
宴会に一つ覚えの皿おどり　梅園
風鈴と蜘蛛の巣窓で語りあう　三津江
しとしとと時雨の窓辺母を恋う　なつえ
水平線異国の船が見え隠れ　克子
陽溜りをよって曽孫の乳母車　千草
優しさを包んで届く母の味　保子
花生けて心豊かに客を待つ　昭子
たこ焼を父さんがする日曜日　八重子
どこに居た蠅一匹が邪魔をする　さくら
亡き人の噂もしばし旅の宿　寿

南大阪川柳会　中川　滋雀報

罰金を払って罪の意識消す　楓　楽
休耕田お天とサマの罰はある　外　吉
天の罰はじき出された流れ星　善　信
側杖も立たされている罰の列　しんじ
そうでんなそれも罰だす私には　凡九郎
罰金で済むことならと懲りもせず　公　一
罰金を払いに行ってまた違反　新　造
校則の罰へ反旗を振っている　曲ん手
口止めをしたのが反ってまずかった　柳宏子
まずい顔に馴れてどうにか添いとげる　文　秋
母ひとり子ひとりまずさ口にせず　雀踊子
イントロが先へ先へとまずい歌　章　久
漬物でまずい料理の胃を洗う　久　子
拙くても良いと代筆頼まれる　覚然坊
病院の食事まずいと限らない　綾　珠
まずいもんないから困る体重計　トミ子
まずくとも命つないだ芋のつる　勝　美
人の世の情が屋台の灯にこぼれ　滋　雀
木枯しが舞えば屋台に花が咲く　千　里
負け犬の愚痴がこぼれる屋台酒　寿　美
屋台から温さをもらう寒の夜　雅　風
しみじみと屋台で孤独いやす酒　シマ子
冷えた胸包んでくれる屋台の灯　三恵子
乱暴なおひとがうまい飯をたく　藤　子
乱暴な男にもある泣き所　庸　佑
乱暴をなげくな自分が育てた子　ハル子
地上げ屋とうまい話になる不安　晴　風
柘榴割る実は散りぢりに村を出る　作二郎
割り切っているのはいつも第三者　重　人
二で割った数で夫婦はことが足り　智　子
くちで割る箸へうどんが喋りだす　柳　伸

割り切ってみても心にある未練　頂留子
どんな罰うけたか地蔵首がない　慶　三

翠洋会　中西兼治郎報

頂点にのぼり社長は孤独なり　兼治郎
紅一点雪中に見る寒椿　恭　昌
水菜見てハリハリ鍋を思い出す　すすむ
野菜だけ食べているけど痩せはせず　萬　里
収賄でのぼりし地位を棒に振り　美津枝
初恋のいとしい人の寒椿　文　子
そんな事忘れなさいと陽が昇る　さと美
煮えるのを待たず五体はあたたまる　春　子
落ちて尚振り返させる紅椿　君　子
ひとり居のくらしを守るごまよごし　宏　子
おしゃべりもいっしょに煮えているお鍋　良　江
好ききらいにんじん刻む親心　照　子
値崩れの野菜に冷たい耕耘機　為　子
子が消えたコースを登る冬の山　佳　秋
頂天を極めた鬼も泣いている　東　雲
植え置きし椿手向ける墓詣り　綾　子
教えぬに椿を髪に女の子　光　子
生野菜ひもじいように食うサラダ　眉　水
冬トマトおいしいけれど値が高い　登志実
大根になる夢捨てぬ貝割菜　みつ子
つばき咲く月日は早し三回忌　いつを
たかが野菜されど野菜が化粧する　鬼　遊

尼崎おはま句会　上田　佳秋報

来る顔が来て正月の幕を閉じ　定　人
ただいまの声で夕餉の膳揃い　寅之助
ばあさんも泳いでいますスイミング　美　代
初対面話の種に困り果て　貞　吉
良寛に残してくれた窓の月　向　西

ゲートボール勝って揃えるユニホーム　弘　治
お揃いの浴衣がなびく露天風呂　よしつぐ
神無月神の集まるうら覗く　敏　之
ローカル線行商女のたくましさ　いわを
小春日和孫の布団も干してある　江　美
末っ子が音信不通屠蘇の膳　佳　秋
福袋何が出るやら買うてみる　昌　子
元旦に誓った禁酒三日もち　保　蔵
遣り直しきく日水やる如露の口　歌　子
歌かるた無口な者が先に取る　十四郎
着飾ってお前はいいね姫だるま　すみ
方言をさわやかに聞く汽車の旅　夢之助
地下街の花屋で早い春に会う　武庫坊
盃をみたして嬉しい春の酒　〆女
陽春をうろたえたのか紅椿　たか
沙汰のない友の話でふぐを食う　紫香

尼崎いくしま句会　上田　佳秋報

油断して触れると火傷する言葉　正一
ライバルの笑顔に油断してしまう　歌子
球根が籠で芽吹いていた油断　年代
油断するとカードがひとり歩きする　佳秋
躓いた石に油断を教えられ　定人
追い越せる距離を保っているゆとり　(河)芳子
野良犬を追うのにしては優しい目　良征
減塩の食事に箸がうろたえる　文夫
大関が恥かしそうにつまむ塩　柳影
握り飯塩の旨さを噛みしめる　曲ん手
父の忌の酒あり塩を舐めて飲む　作二郎
本積んで昼寝の用意もして座る　幸子
友達がいるのでぬくい赤電話　静夢
デパートの階段上ってリング買う　美代子

今年こその日記も白いまま閉じる　梨枝
運勢もコンピューターが弾き出す　英子
運不運星はみんなへまたたきぬ　美智子
福耳で晩年の運待ってます　一郎
シャンデリア照らし続けて来た不運　(松)芳子
運不運占師にもそりゃおます　凡九郎
カネもなく故郷もなし寝正月　保蔵
落人の正月テレビが写しに来　萬的
追いすがる子を振り切って行くパート　みち子
湯煙の素顔は美人に見せてくれ　〆女
愚痴ばかり並べて寒い四畳半　諷云児
亀さんを追うても時は戻らない　伊三郎
老いらくの恋が身の上話する　杜的
また一つふくらむ夢を追いかける　園歩
回り椅子油断へ冬の風が吹く　春子
娘も二十嫁がす話する夫婦　紫香
相槌を打てば握手を求めて来　白渓子

川柳泉尾　吉川寿美報

君ひとり辞めさせはせぬ辞表抱く　美代子
万歩計足ぶみしながら立ち話　文子
霧ぶとん被て安らかな涅槃岳　満洲子
風の音会話とぎれてみかん剝く　トミ子
山茶花が今年も終りと咲き誇り　三世
正月も受験生には苦い餅　美南子
車椅子もうたじろがぬ弓を射る　弘子
幸あれよ乳含ませる母と児に　淑子
風呂上り妻も美人に見えてくる　途子
子は育つ育ちにくいは親の方　二三
間接税火種が炎あげはじめ　光子
じっくりと見てはもらえぬ冬の花　敦子
裏切りを許せば影が淋しがり　美子

おやじさん一しょに飲もう紅葉酒　義一
一筋をいっしょに生きてきた白衣　シメ子
お人好しいつでも下駄を預けられ　和子
それぞれの個性がちびた下駄にあり　昭子
幕が下りラストの余韻まだ去らず　シマ子
ラストからついてゆきたい亀もいる　敏
ラストでも卒業証書変りなし　悦子
人生のラストが見たい三面鏡　清子
ラストナイトの事にはふれず朝の雪　白水
スタートもラストも人生手ぶらです　はつ子
かまきりがラスト演じる冬の塀　伴子
人生の岐路に立たされ迷う下駄　三千代
一期一会の風といっしょに無縁坂　寿美

城北川柳会　神夏磯典子報

八十路坂梅の香りにただよいて　輝子
ボーナスに羽根があるよう年を越す　トキワ
重箱の隅もほじれぬ時代波　八重子
帰省した孫帰りゆく淋しさよ　綾珠
新年に四月陽気の春かすみ　正之
蛇口から若水汲んで春迎え　よし子
隅々まで気がつきすぎて嫌がられ　寿美礼
立ち読みでデートの時間調節し　秀夫
花形になって化粧が落せない　典子
日めくりに追いたてられる十二月　星斗
元気出せ歩でも王将取れるんや　新一郎
書初めは遺言状を書いておく　ただし
ふるさとはダムの底なる水の彩　静歩
一隅へ慈悲の光をさす如来　公一
ごめんねと一言聞いて晴れる胸　テルミ
正月の肩の荷おろし小豆がゆ　文子
追い出しておいて雀友呼び集め　とし江

涙など映りはしない水鏡　温子
横綱の綱断ち切った新人類　倫子
恋を得て嬉しくかさむ通信費　静子
白旗を揚げていても尾は振らず　白峰
除夜の鐘苦楽も共に消して初春　きくゑ
こだわりを捨てる流れがきれいすぎ　達子
鴨川の水で磨いて名妓とか　ふみ
腹這いで充電してる三ヶ日　悟郎
賑やかな未来図となる子沢山　登志代
子や孫の行末祈り初詣で　右近

聴障川柳　稲田豊作報

神棚に一家息災の灯が点る　豊作
神様にお願いする前お詫びする　行江
有って無く無くて有るのが真の神　鉄火
宝くじ買って儚い神頼み　いわお
離婚ふえ出雲の神は渋い顔　文古
年老いて神と対話が長くなり　たみ
神前で貰うことのみ頼む人　みつる
神頼み困る時だけとは可笑し　一晄
神頼みしても直らぬ難聴者　進一
信じます人の心に神居ます　八恵子
耳しいへ神はいつしか夢をくれ　三香
神様の裏でおみくじ読む女　珍顔
神さまも賽銭額でお蔭あり　健太郎
神々よこちら向いてと力入れ　真女

大原川柳社　小林妻子報

突走る世に取り残されて粗大ゴミ　直二
糸口を摑んでからはするすると　あすなろ
姉妹の昔話に花が咲く　正子
転職へ望み一途な筆を取る　ひでの
退屈な老母が故郷で待つ受話器　はるみ

成る程と作句の視野が見直され　寿恵子
この親にこの子叱れぬ通信簿　みさえ
やり直し出来ぬ人生悔い残る　睦子
成る程ともっともらしく首を振る　こふゆ
望みある子に惜しまない愛の鞭　敏子
退院近い退屈顔が又集い　美代子
飽食の舌では打てぬ舌つづみ　正己
裏方の苦労話が身に沁みる　巴子
老いてなお望み捨てない母達者　喜美子
鯛焼が売れ残ってる十二月　たけよ
大望をさげて虚栄の虹を書く　悦子
くるくると六十五年目の夜明け　妻子
初雪と相撲取ってる父の腰　朝代
一粒の種が望みをつなぎ止め　智泉
箸箱の中の亭主はおとなしい　理恵
望み一途に咲く夢ばかり冬ごもる　元江
人生の荷を積み直しつみ直し　玉恵
望まれて咲いた花です裾模様　辰子
欲望の心がたぎる老いの日々　宮子
望まれて女冥利と腹を決め　みづえ
退屈でとてもたまらぬ一円貨　耕花

川柳はびきの　田中隆二報

足袋も添え気配りぬくし旅の宿　満洲子
新しい話題が好きでまだボケず　蛙声
生きるとはその日その日の積み重ね　正義
コメ論議父の眉毛が立ってくる　弘子
胃ぐすりをしのばせて行く忘年会　ケイ子
妻の目の合格点にずれている　吐来
学校の門から耐えてきた涙　隆
河豚刺しを通して見せる皿自慢　伴子
山里にヒヨ鳥も来る客も来る　清子
忘年会ついでに年も忘れたい　淑子
新春は夢という字に明け暮れる　忠宏
節分へ姑元気に鬼払い　繁男
マイナスもプラスもあった年の暮　篤子
十二月今月限りの悪い運　白水
ひとひらの雪に融けこむ真珠婚　優
陰口を承知で噂の人と居る　絢子
おでん鍋一人足りない愚痴も煮る　トミ子
ジャンボくじ枯木に花の夢を買う　昇
理屈まで正論づけてる老眼鏡　与呂志
賑やかに囲む我が家も屠蘇の春　末一
百薬の長効きすぎて脚もつれ　志洋
ボーナスをもらった日から気がゆるむ　キミ子
風呂敷も出番となった年の暮　美代子
手抜きしておせち料理の数がへり　悦子
許しては貰えぬ旅の雨宿り　美子
ほろ酔いに願い届くか初詣で　たけし
空白のページ疑い深くなる　隆二
福引きの当りの声も歳の暮　シメ子
最近の新聞陽気にはなれぬ　比沙胡
看護婦が並ぶスターの退院日　健三
もの言えばお札が動く年の暮　葉子
好きやねん生れも育ちも羽曳野市　隅谷義一
手心で酔わす今宵の美人ママ　三世
円高のしこり残して年明ける　胡村
体力で勝負する気の受験生　三千代
オールドは減多に見せぬ弾の痕　敦子
オールドも挑戦してるエアロビクス　昭子
オールドの高ぶりマイク離さない　希代司
サラダ記念日オールド歌人揺れている　美津子
オールドミス会社のキーを握ってる　ダン吉
オールドに浸って老母の回顧録　寿美
花柄の封筒気になる女文字　重人
柄悪い男の連れは京美人　敏
思い出す酔うてあの日のプロポーズ　石橋義一

サークル樺樣（前月分）　片岡智恵子報

赤いバラ百万飾るバースデー　美緒
飾る年齢とうに過ぎても店覗く　三四子
使い方次第で一日二十五時　泰子
使うだけ使ってぽいはひどすぎる　千代女
味の方デコレーションでごまかされ　雅子
気ばかり遣うて骨と皮でいる　智恵子
気飾ってみな美人なり成人式　登美子
CMに使え使えとせまられる　今日子
神仏も正月飾り立てられて　薫風

サークル樺樣　片岡智恵子報

お雑煮の味がきまらぬ若夫婦　美緒
波風に磨かれ丸くなりました　泰子
年ごとにままごとみたいなるおせち　美子
大晦日うさぎ小屋でも窓磨く　三四子
新年に冷凍カレで恙なく　雅子
着納めの振袖とゆく初詣で　智恵子
動揺をかくして磨く窓ガラス　今日子
泣いた顔磨いた鏡に笑われる　千代女
飛行機の事故を見ていた奴凧　薫風

■12月号80P中段最終行「花鋏静かに響く母の秋」の作者、涼一を取消します。

3 月 各 地 句 会 案 内

	日／時及び題	会場と投句先
尼崎 いくしま	4日(金) 午後1時半より 三流・真似・自由吟	サンシビック尼崎 阪神電車尼崎下車南西徒歩3分 〒661 尼崎市南清水11番1号 田淵定人 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
堺川柳会	6日(日) 午後1時より 不意・普通・深い・ぶらぶら	堺総合福祉会館 南海高野線堺東駅下車堺市役所西入ル 〒593 堺市堀上緑町2－9－2 河内天笑
八尾市民 川柳会	10日(木) 夕6時より 咲く・攻める・虹・あこがれ	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市弓削町南2－141 飯田悦郎
川柳塔 まつえ	12日(土) 午後1時半より 花束・ベンチ・天才	慈雲寺 松江市和田見町 〒690 松江市雑賀町1686 恒松叮紅 句会費 300円 投句料 300円(60円切手可)
川柳 わかやま	13日(日) 午後1時より 造花・雛・イメージ	和歌山県民文化会館 4F 〒640 和歌山市駕町15 野村太茂津 句会費 300円 投句料 60円切手3枚
西宮北口	14日(月) 午後1時より 握る・足音・自由吟	西宮市中央公民館 阪急神戸線西宮北口駅南出口歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5－25－17 春城年代 句会費 300円 投句料 60円切手4枚
富柳会	17日(木) 午後1時より 災難・流石・猿	富田林市中央公民館 〒584 富田林市南大伴353 池 森子
高槻川柳 サークル 卯の花	17日(木) 午後1時より 合図・鉢・使者・自由吟	高槻市民会館302号室 阪急電車高槻下車歩5分 〒569 高槻市宮田町3－8－8 川島諷云児 句会費 500円 投句料 200円(60円切手3枚と20円切手1枚) 各題2句
南海電鉄 川柳部	17日(木) 夕6時より 手配・グルメ・絹(シルク)	南海会館ビル内南海電鉄本社地下食堂 南海・近鉄・地下鉄各難波駅下車高島屋東南角 〒542 大阪市南区難波5丁目1番60号 南海電気鉄道(株) (川柳部) 不動産管理部管理課 廣井季雄 句会費 無料 投句料 60円切手1枚
南大阪 川柳会	19日(土) 夕6時より 受身・口車・砂・摘む	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2 金井文秋 句会費 500円 投句料 180円(郵券可)
川柳 ねやがわ	21日(月・祝)正午より 税金・ゲーム・卒業・自由吟	寝屋川市立総合センター4階 寝屋川市駅下車京阪バス総合センター前下車 〒572 寝屋川市春日町9－9 高田博泉 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
もくせい 川柳会	22日(火) 午後1時より 箸・アルバム・うれしい・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急宝塚線曽根下車東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801 田中正坊
川柳 東大阪	26日(土) 夕6時より 半分・揺れる・逆・ストレス	東大阪市社会教育センター2階 近鉄布施駅北へ5分長堂小学校隣 〒577 東大阪市菱屋西5－6－23 桑原喜風 句会費 500円 投句料 60円切手3枚
駒つなぎ 川柳会	28日(月) 夕6時より 壁・縁・薬・罪	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南口下車 南へ1丁3筋目左へ駅より歩3分 〒545 大阪市阿倍野区天王寺町北1-3-11 津守柳伸

★特に記載なき場合 句会費 500円、投句料 300円 (郵券可)、各題3句以内

原稿送り先 (〆切・毎月20日 予め決定している場合は何ヵ月分でも結構です)

〒597 貝塚市地蔵堂53番地の5-1-401号 宮園射月芳

本社3月句会

日時　三月七日（月）午後六時
会場　メンズファッションセンター7階
東区内本町一―一　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（2番出口）交差点西南角

おはなし　板尾岳人

兼題「省略」　河内月子選
「飴」　堀端三男選
「余裕」　阿萬的選
「勲章」　黒川紫香選

席題　二題　当日発表　各題三句以内厳守
会費　五百円

★投句は柳箋（4cm×19cm）に一葉一句。
各葉毎に裏面に必ず**氏名明記**。
投句料 **300円**（60円切手5枚）同封のこと。

川柳塔社

4月の兼題　「油断」「互角」「群れ」「抱く」

4月の本社句会は7日（木）

『夜市川柳』募集

第10回「時計」　板尾岳人選
3句・締切　3月末日

第11回「湯」　西出楓楽選
締切　4月末日

投句先　〒593　堺市堀上緑町二―九―二
河内天笑方
堺川柳会

●募　集●

五月号発表（3月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
茴香の花（3句・女性）八木千代選

課題吟（5句）
「縁」　春城年代選
「袋」　田中隆二選
「足」　松下たつみ選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★水煙抄欄の投句は一般誌友の方です。

六月号発表（4月15日締切）

川柳塔（10句）西尾栞選
水煙抄（10句）黒川紫香選
愛染帖（3句）橘高薫風選
茴香の花（3句・女性）八木千代選

課題吟（5句）
「好き」　田形美緒選
「駅」　脇田米朝選
「雲」　森田熊生選

★愛染帖・茴香の花・課題吟は同人・誌友を限らず。

3月の常任理事会は1日（火）

定価　五百円（送料50円）
半年分　三千二百円（送料共）
一年分　六千三百円（送料共）
昭和六十三年二月二十五日印刷
昭和六十三年三月一日発行
編集兼発行人　西尾巌
印刷所　藤原童心社
〒545　大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六六―六九一四番
振替口座大阪8―三三三六八番

＝編集後記＝

☆二月十四日はバレンタインデーだった。西洋では、聖バレンタイン司祭を偲ぶとともに、この日愛する人に贈り物をするしきたりだという。

☆二月に入って買物に出かけた近くのスーパーの、チョコレート売り場のフィーバーぶりには驚いた。まさに軽薄短小の世相をまのあたりに見る思いがした。

☆二月十四日は、川口弘生さんの一周忌でもあった。八日の本社句会は、遺句集「しろきた」の出版記念で百名に近い出席を得て故人を偲んだが、ハートのチョコレートを贈るに一番ふさわしいお人柄だった。

☆十四日は、さらに中島生々庵先生の三回忌法要が営まれた。西田柳宏子さんと霊前に合掌して川柳塔社への加護を祈った。

☆時実新子さんの句集「有夫恋」の売れ行きはすばらしく、二月十日八刷が決まったのだから凄い。

☆田辺聖子さんが中央公論一月号の随筆で「有夫恋」を紹介し、著者の感性と川柳の特質を賞揚しておられる。「ぞんぶんに人を泣かしめ粥うまし」何ともさわやかだ。現代は傷つけ合う時代ともいえるだろう。かってないほど人と人の車間距離が狭まっているので、（そのくせ心は離れているが）人はみなストレスに悩んでいる。自分を傷つけまいとして先制攻撃で人を傷つける。（中略）そういう湿潤文化のいやらしさを、詩人の直観は糾弾している。「ぞんぶんに人を泣かしめ」た本人は、さもうまげに粥を、たっ！たっ！と舌ならして食らう。（略）天空海濶、川柳の明るさ、ここにきわまるというもの。詩人の感性はすこやかに現代の病弊を衝いているといえよう。それを正面切って論じないでおかしく言いくるめる、川柳という形式が、私は実に好きだ。と。

☆渡辺淳一氏も週刊文春で著者の作品への身の入れ様に触れておられる。

☆五万部十万部突破へのエールを送りたい。（薫）

▼〝平和というものは、その当り前のことが、当り前にあるということです。戦争をやめることが平和のすべてではないのです〟と、作家の灰谷健次郎氏が書いている。こんなわかりきったことを書くと「何を甘ったれるな」と、何処からか言われそうです。言われないにしても、そんな気がするのは、当り前のことが、当り前でない、平和でない証拠でもあります。

▼いま、話題になっている〝地上げ屋〟の存在を当然と見る向きも一部あるでしょうが、反面「悪」と見られる人達の方が多いように感じられます。感じられるだけでは正当化されませんが、何の悪いことも迷惑もかけていない正常な市民たちが、悪辣（当用漢字にもない）非道な方法をもって生活の場を追われているのが現実なのです。

▼選挙の時が来ると、黒い手に純白の手袋をはめて、「有権者の皆さま」と、お客様は神さまみたいな美しい台詞で、気味のわるい笑顔をふりまく政治家よ、今こそあなた方の出番ではないのですか。

▼弱い者を見殺しにするのが法治国家なのですか。かっての白馬章子の山城新伍さんだけが正義の味方なのでしょうか。

▼「思うようにならないのがこの世の中だ」と、貧しく死んでいった父のことばを今更ながらに噛みしめるのです。（き）

☆仕事の帰りや、夜遅い時刻に、電車の中で居眠りしている人をよく見かけるが近頃の私は、だらしないことに、朝っぱらから電車に乗ると無性に睡くなる。我慢しようと思えば思うほど瞼の上と下がくっついて、ついウトウト。

☆そんな或る日、ウトウトから覚めて何気なく窓の外を見て驚いた。いつも見なれた風景と全く違うではないか。終点まで行くのだから乗り越すはずはない。一体ここはどこなのか。一時迷路に迷いこんだような気になった。

☆やがて電車が駅に着くと駅舎の模様も、まるで変っていて、しかし駅名は同じである。混乱していた頭脳回線が、ここでやっと正常に戻った。

☆何カ月も前から、この線は一部、高架工事を行なっていて、ちょうどこの日、新しい高架路線の営業運転の初日に当っていたのである。駅にその旨、掲示が出ていたのを、すっかり忘れていたというわけだ。最も高いところでビルの四、五階はあろうかという高架からの眺めが私の眼前に展開していたのである。

☆以来、通い馴れた沿線の新しい風景の発見に、子供のような好奇心を燃やしているのだが、やがて、これも惰性となり、景色を見ていながら実は何も見ていない、そんな状態になるのであろう。（史）

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
昭和六十三年二月二十五日　印　刷
昭和六十三年三月一日発行（毎月一日発行）
別刷六十三年　通巻七三〇号

伝統の味を贈りものに……
菊正宗
料理がいきる
辛口の本格派
日本酒で乾杯！
神戸・灘
菊正宗酒造株式会社

ボリュームたっぷり　スタミナ満点!!
豚饅・焼売・焼餃子
551 HORAI
OSAKA NAMBA 蓬莱 HORAI CO.,LTD.
なんば戎橋筋本店
その他有名百貨店でどうぞ
ほうらい
蓬莱
TEL641-0551

雑誌　05703－3